

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第184集

泉屋遺跡発掘調査報告書

一 関遊水地事業関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

泉屋遺跡発掘調査報告書

一 関遊水地事業関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600箇所にあぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の泉屋遺跡は、太田川左岸の段丘上に立地し、平成3年の発掘調査によって縄文時代の土坑や平安時代の井戸跡などが発見されました。ひき続き出土資料の整理をすすめ、ここに報告書として発刊するはこびとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、平泉町教育委員会をはじめ関係各位に衷心より謝意を表します。

平成5年3月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長 工 藤 巖

例 言

1. 本報告書は、岩手県西磐井郡平泉町平泉字泉屋 28 - 1 ほかに所在する泉屋遺跡の調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、一関遊水地事業にかかわる太田川暫定堤防建設に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と建設省東北地方建設局岩手工事事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号は N E 76 - 1079、調査略号は I Y - 91 である。
4. 調査面積は 2,000 m²、野外調査期間は平成 3 年 5 月 7 日から 6 月 21 日である。
5. 発掘調査は神敏明・佐々木務が担当し、室内整理および報告書の作成は神敏明が担当した。
6. 検出された遺構の種類と数は以下のとおりである。
掘立柱建物跡 1 棟 土坑 54 基 溝 1 条 井戸跡 1 基 焼土遺構 4 基
7. 石器の石質鑑定は、佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）に依頼した。
8. 本報告書では、国土地理院発行の 50,000 分の 1 の地形図、建設省東北地方建設局岩手工事事務所作成の 500 分の 1 の用地図を使用した。
9. 土層の色調観察には、農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」を用いた。
10. 発掘調査および室内整理に際しては、次の機関の御協力と御教示を賜った。
建設省東北地方建設局岩手工事事務所 平泉町教育委員会
井上喜久男氏（愛知県陶磁資料館）
11. 野外調査にあたっては、地元の方々の御協力をいただいた。
12. 本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序
例言

〔本 文〕

I. 調査に至る経過	2	IV. 検出された遺構と遺物	15
II. 遺跡の立地と環境	3	1. 掘立柱建物跡	15
1. 遺跡の位置	3	2. 井戸跡	17
2. 地形	3	3. 溝跡	18
3. 周辺の遺跡	4	4. 土坑	18
4. 基本土層	10	5. 小土坑群	20
III. 調査方法と整理方法	11	6. 焼土遺構	32
1. 野外調査	11	7. 遺構外出土遺物	33
2. 室内整理	12	V. まとめと考察	51

〔図 版〕

第1図 岩手県全図	1	第15図 小土坑群2	22
第2図 遺跡位置図	2	第16図 小土坑群3	23
第3図 調査区周辺地形図	5	第17図 小土坑群4	24
第4図 地形分類図	7	第18図 小土坑群5	25
第5図 周辺の遺跡	8	第19図 小土坑群6	26
第6図 基本土層図	10	第20図 小土坑内出土遺物1	29
第7図 遺構配置図	13	第21図 小土坑内出土遺物2	30
第8図 掘立柱建物跡	16	第22図 小土坑内出土遺物3	31
第9図 井戸跡	17	第23図 焼土遺構	33
第10図 井戸跡出土遺物	17	第24図 遺構外出土遺物(土器1)	38
第11図 溝跡	18	第25図 遺構外出土遺物(土器2)	39
第12図 J 24-1号土坑(遺構・遺物)	18	第26図 遺構外出土遺物(土器3)	40
第13図 K 24-1号土坑(遺構・遺物)	19	第27図 遺構外出土遺物(土器4)	41
第14図 小土坑群1	21	第28図 遺構外出土遺物(土器5)	42

第 29 図	遺構外出土遺物（石器 1）	…… 43	第 33 図	遺構外出土遺物（石器 5）	…… 47
第 30 図	遺構外出土遺物（石器 2）	…… 44	第 34 図	遺構外出土遺物（石器 6）	…… 48
第 31 図	遺構外出土遺物（石器 3）	…… 45	第 35 図	遺構外出土遺物（石器 7）	…… 49
第 32 図	遺構外出土遺物（石器 4）	…… 46	第 36 図	遺構外出土遺物（石器 8）	…… 50

〔写真図版〕

図版 1	遺跡遠景	…… 61	図版 13	遺構外出土遺物（土器 1）	…… 73
図版 2	遺跡近景	…… 62	図版 14	遺構外出土遺物（土器 2）	…… 74
図版 3	土層断面	…… 63	図版 15	遺構外出土遺物（土器 3）	…… 75
図版 4	掘立柱建物跡	…… 64	図版 16	遺構外出土遺物（土器 4）	…… 76
図版 5	井戸跡	…… 65	図版 17	遺構外出土遺物（土器 5）	…… 77
図版 6	溝跡・土坑(1)	…… 66	図版 18	遺構外出土遺物（土器 6）	…… 78
図版 7	土坑(2)	…… 67	図版 19	遺構外出土遺物（石器 1）	…… 79
図版 8	土坑(3)	…… 68	図版 20	遺構外出土遺物（石器 2）	…… 80
図版 9	土坑(4)・焼土遺構	…… 69	図版 21	遺構外出土遺物（石器 3）	…… 81
図版 10	遺構内出土遺物 1	…… 70	図版 22	遺構外出土遺物（石器 4）	…… 82
図版 11	遺構内出土遺物 2	…… 71	図版 23	遺構外出土遺物（石器 5）	…… 83
図版 12	遺構内出土遺物 3	…… 72	図版 24	遺構外出土遺物（石器 6）	…… 84

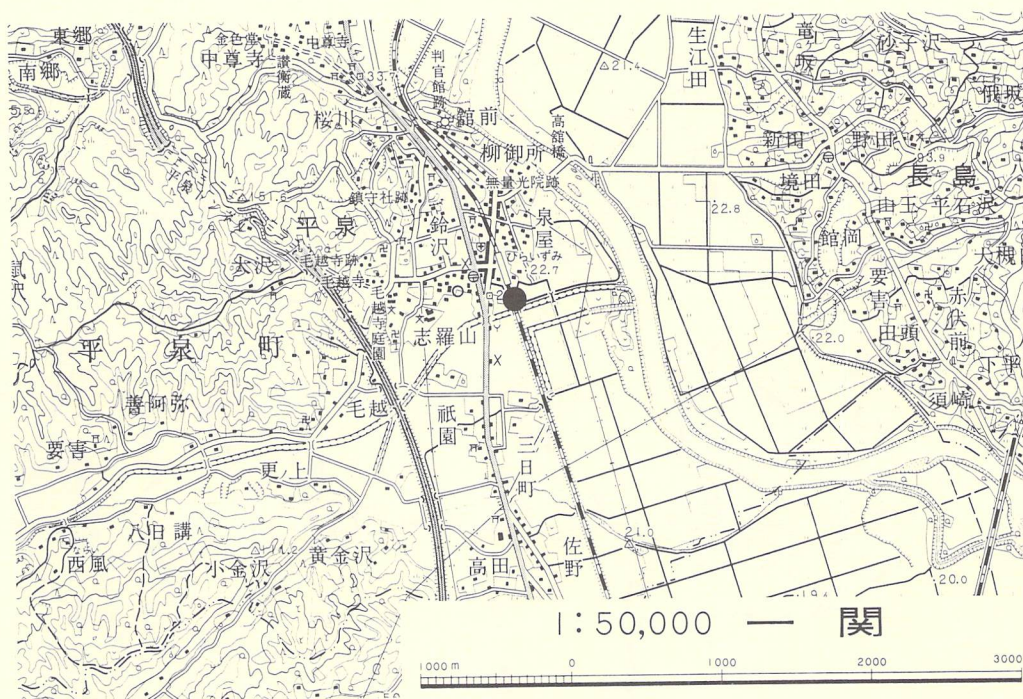
〔表〕

表 1	周辺の遺跡一覧表	…… 9	表 5	土器一覧表(3)	…… 56
表 2	小土坑計測表	…… 28	表 6	石器・石製品一覧表(1)	…… 57
表 3	土器一覧表(1)	…… 54	表 7	石器・石製品一覧表(2)	…… 58
表 4	土器一覧表(2)	…… 55			

I 調査に至る経過

一関遊水地事業計画は、北上川改修事業の一大プロジェクトとして、岩手県一関市と平泉町地区沿川を洪水から守るため、上流ダム群の建設とともに北上川治水計画の根幹をなすものである。この遊水地は、延長 21 km の周囲堤と延長 18 km の小堤によって、洪水調節と市街地等の水害防除および土地等の高度利用を目的とするものである。事業は昭和 48 年に工事实施基本計画が決定されたのをうけて、昭和 53 年から本格的な着工のはこびとなった。

この事業に関わる埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、岩手県教育委員会と建設省東北地方建設局岩手工事事務所との間で協議が行われた。その結果、県教育委員会が実施した遺跡の分布調査によって存在が明らかになった泉屋遺跡については、県教育委員会の調整によって岩手県文化振興事業団の平成 3 年度以降の受託事業とすることとし、年次計画によって発掘調査を実施することとなり、平成 3 年 4 月 30 日付けの委託契約にもとずいて発掘調査に着手することとなった。



第2図 遺跡位置図

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

泉屋遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線平泉駅の南約 250 m 付近に位置している。遺跡の所在する平泉町は、県都盛岡市から南方に約 80 km、岩手県の南部にある。町の中央部を北上川が南流し、東北本線・国道 4 号線・東北縦貫自動車道が南北に縦断している。東側は衣川村、西側は東山町、南側は一関市、北側は前沢町と隣接し、総面積は 63.75 ㎡である。

本遺跡は、国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「一関」(N J - 54 - 14 - 15)、および 2 万 5 千分の 1 の地形図「平泉」(N J - 54 - 14 - 15 - 3) の図幅に含まれ、北緯 39 度 58 分 59 秒、東経 141 度 7 分 20 秒付近にある。

2. 地形

平泉町付近の地形としては西に奥羽山脈、東に北上山地があり、その間を北上川が南流している。また、西部奥羽山地に源を発した衣川、太田川が東流して北上川と合流している。北上川は一関市東方で山地と丘陵地の接する所を流れ、狭窄部を形成している。この狭窄部の上流では北上川の形成した氾濫平野が広がっている。

北上川左岸には、東稲山山地と石蔵山山地が広がっている。東稲山山地は 596 m の海拔高度をもち、主として花崗岩から成る山地である。この山地のすぐ南東側には石灰岩から成る石蔵山山地がほぼ南北に伸びている。斜面形態は特異な形態を示しており、他の山地斜面に比較して谷壁斜面が急であり谷も深い。尾根は狭いが、丸みを帯びた形を示しており、やせ尾根はない。平泉周辺はほとんどが丘陵地であり、かなりの数に分類される。最も広い範囲を占めるのは一関市街地南方に広がる有壁丘陵であり、つづいて平泉西方に広がる衣川丘陵である。有壁丘陵は 100 ~ 200 m の高度にわたって広がっており、定高性はかなり良い。起伏量は小さく、特に東部ほど小さくなる。衣川丘陵は磐井川左岸に拡がり、丘陵全体の形態は有壁丘陵西部に似ている。ただし海拔高度は衣川丘陵の方が高く、侵食も進んでいるが、西部の方ではまだ開析が及んでおらず緩斜面が残っている。

平泉段丘は位置、傾斜の方向からみて、北上川によって形成された段丘である。範囲は狭く、北上川の氾濫平野との比高もそれほど大きくはないが、崖線は明瞭である。北上川右岸の河岸段丘及び太田川によって形成された扇状地上には平泉の主要な遺跡が立地している。

北上川は狐禅寺狭窄部で川幅が狭まり、流下水量が減少する。したがって洪水時においては氾濫原となり、北上川及び付近で流入する太田川の河道の変遷は著しい。北上川低地にはこのような河道の変遷に伴って形成された旧河道、旧河微高地、自然堤防などが分布している。

3. 周辺の遺跡

泉屋遺跡を含む平泉遺跡群の各遺跡は、中尊寺を除いて東日本旅客鉄道平泉駅を中心とした1 kmの範囲に収まり、隙間なく包蔵されている。

泉屋遺跡の北北西の山際には、藤原清衡によって造営され、特別史跡に指定されている中尊寺がある。過去10数回の発掘調査が行われ、礎石建物跡、掘立柱建物跡、井戸跡、堀跡、池跡などが発見されている。中尊寺の東側には衣関遺跡と坂下遺跡が立地している。それぞれ特別史跡中尊寺境内の飛び地指定が含まれており、かわらけや陶磁器片が出土している。

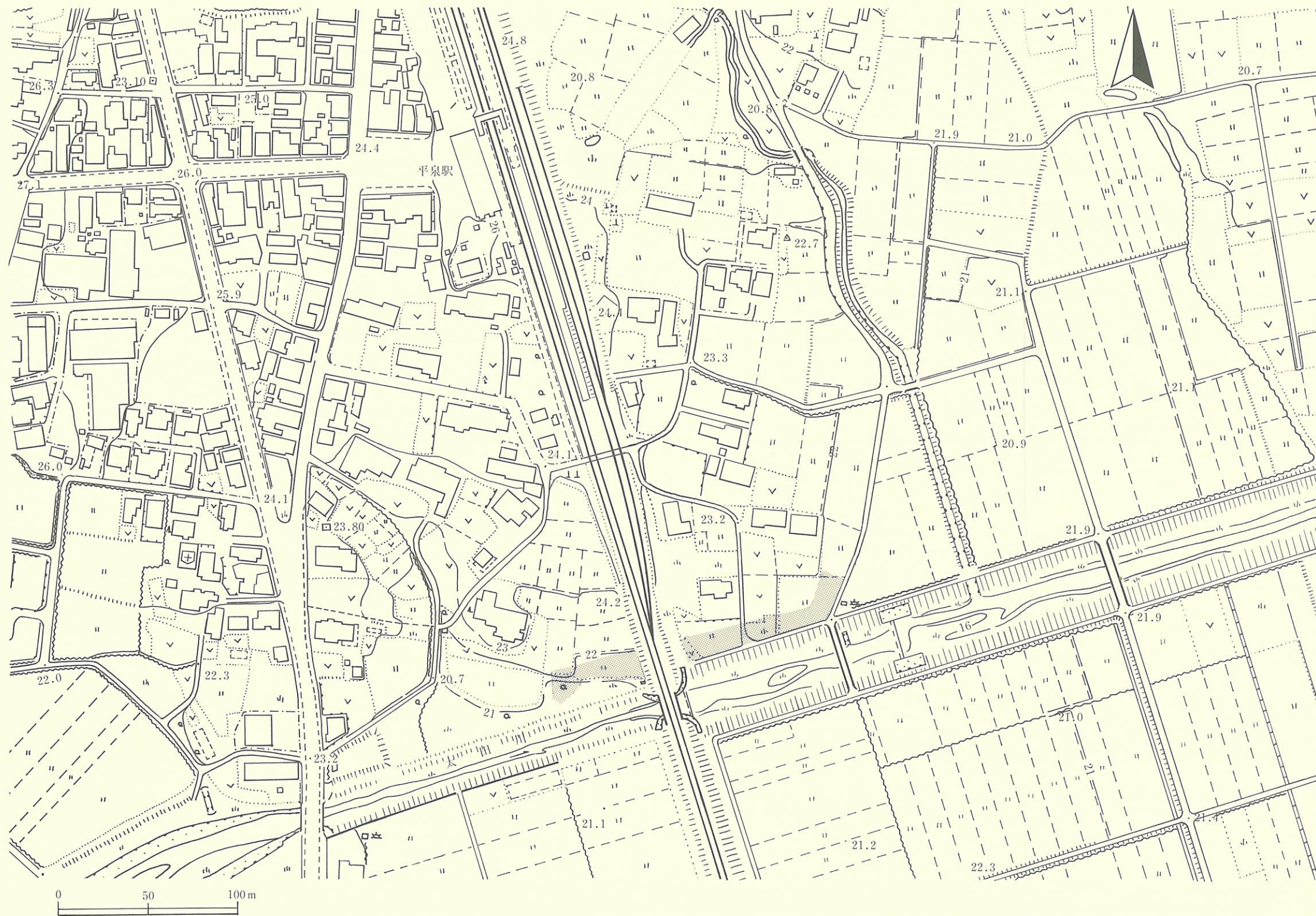
東日本旅客鉄道東北本線と北上川とに挟まれた地域には、義経最期の地という伝説をもつ高館跡、人為的な壁面が検出された猫間が淵、最近の調査によって園池跡、堀跡、板塀跡、建物跡などの多数の遺構が検出され、墨画の描かれた折敷・烏帽子・国産陶磁・中国陶磁・大量のかわらけなどの遺物が出土し、平泉館跡との見方が強まっている柳之御所跡、宇治平等院を模倣して造られたといわれる特別史跡無量光院跡、藤原3代秀衡、4代泰衡の居館と伝えられている伽羅御所跡が立地している。

東北本線の西側の市街地及びその南西には、特別史跡・特別名勝に指定され、庭園遺構などが検出されている毛越寺跡、観自在王院跡、経塚とされる金鶏山、鈴懸の森、毛越寺の飛び地指定をうけ、礎石群が検出されている花立Ⅰ遺跡、三十三間堂跡といわれる花立Ⅱ遺跡、毛越寺の飛び地指定地である白山社跡、中尊寺の飛び地指定地として瓦窯跡があり、掘立柱建物跡や井戸跡などが検出され、木製品が多数出土している志羅山遺跡、藤原国衡・高衡の館跡といわれる国衡館・高衡館、毛越寺跡の飛び地指定地が点在する毛越遺跡がある。

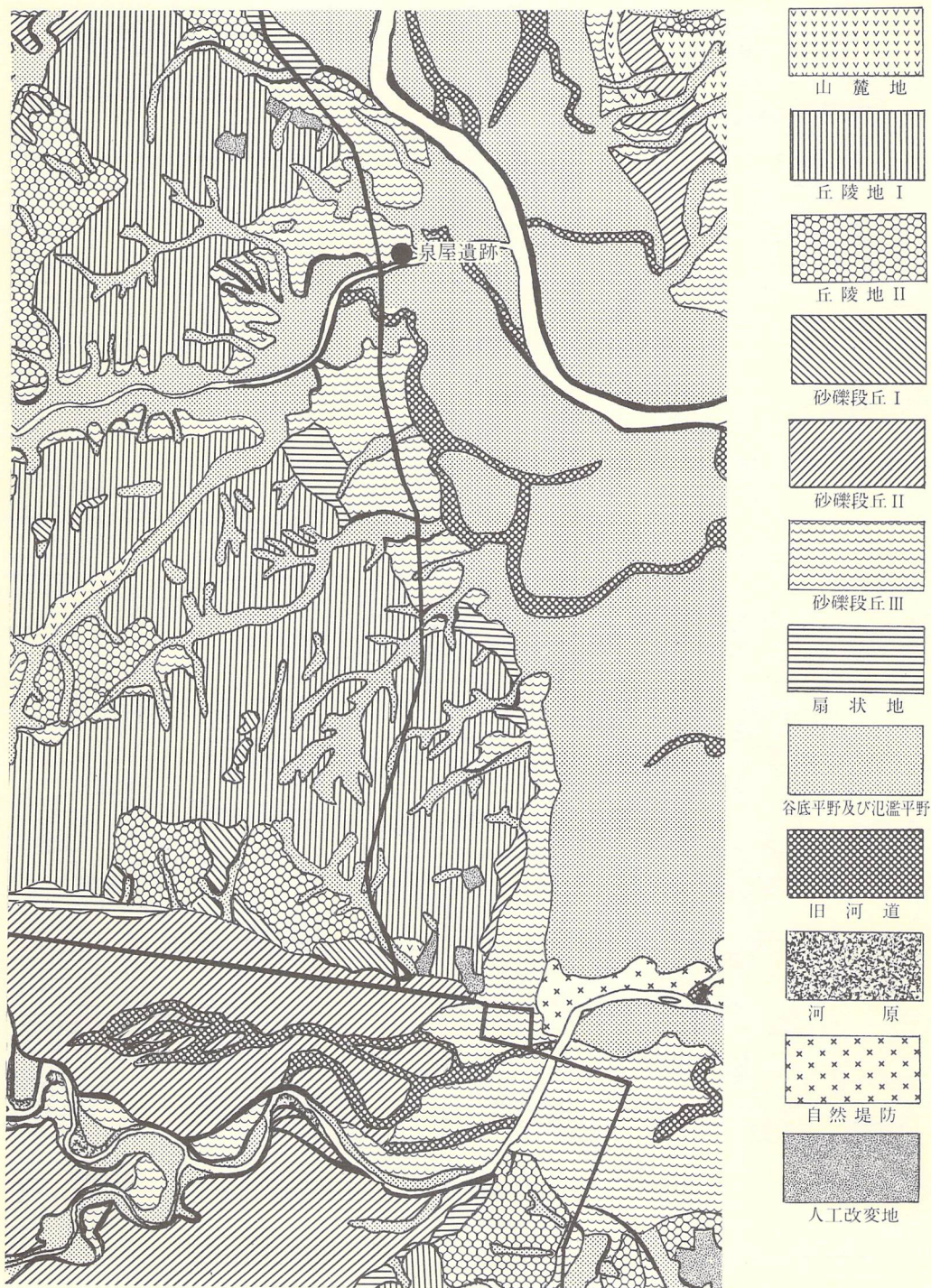
また、泉屋遺跡の南の祇園地区にも毛越寺の飛び地指定地があり、かわらけなども出土している。

泉屋遺跡の南1 kmほどのところに立地する高玉遺跡からは新期の屋敷跡や井戸跡、構築時期不明の柱穴やカマド状遺構が検出されている。

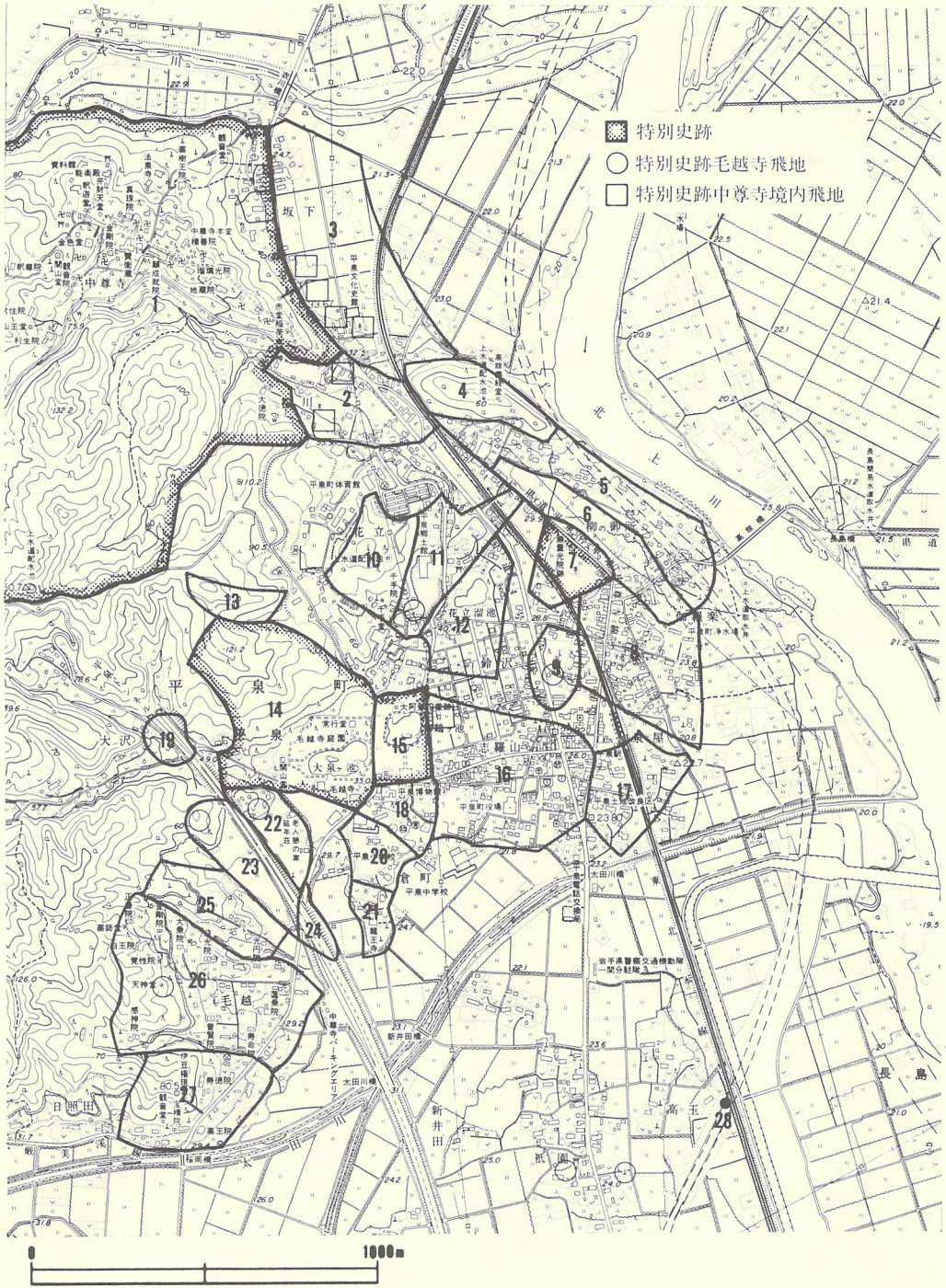
平泉町においては12世紀以前の遺跡については包蔵地としては知られているものの詳しい発掘調査はほとんど行われておらず詳細が不明な遺跡が多い。平成3年度に岩手県埋蔵文化財センターがおこなった長島地区の新山権現社遺跡からは縄文時代後期と晩期の遺物が大量に出土している。



第3図 調査区周辺地形図



第4図 地形分類図



第5図 周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	備考
1	中尊寺境内	寺社・経塚・包蔵地	伽藍遺構・堀跡・かわらけ陶磁器片	特別史跡長期にわたって発掘調査 堀跡あり
2	衣 関	寺社・包蔵地	かわらけ・陶器片	2ヶ所に特別史跡の飛地
3	坂 下	寺社・包蔵地	伽藍遺構・かわらけ・陶磁器片	4ヶ所に特別史跡の飛地
4	高 館	城館・包蔵地	土塁・堀・段・かわらけ	昭和39・40年度の発掘調査で柱穴が発見されている
5	柳之御所	館跡・包蔵地	多数の遺構・かわらけ陶磁器片・木製品	長期にわたって発掘調査 堀跡・塀跡・園池跡
6	猫間ヶ淵	包蔵地	池跡・かわらけ陶磁器片	堤防跡が2ヶ所
7	無量光院	寺社	伽藍遺構・かわらけ陶磁器片	特別史跡 一里塚跡
8	伽羅之御所	館跡	土塁・かわらけ陶磁器片・多数の遺構	土塁あり 畑地にはかわらけ片が散布
9	白山社	寺社	かわらけ	特別史跡の飛地
10	金鶏山	経塚	甕・壺	出土した甕と壺の一部が千手院と東京国立博物館に保管
11	花立Ⅰ	寺社・城館	礎石・瓦・かわらけ陶磁器片	特別史跡の飛地花館廃寺といわれている 館跡は破壊
12	花立Ⅱ	寺社	建物跡・瓦・かわらけ陶磁器片	伝三十三間堂跡は花立堤の堤防下
13	鈴懸の森	経塚	石組が露頭	造成により破壊 経塚山ともいう
14	毛越寺	寺社・包蔵地	伽藍遺構・かわらけ陶磁器片	特別史跡長期にわたって発掘調査
15	観自在王院	寺社	伽藍遺構・かわらけ陶磁器片	特別史跡史跡 公園化されている
16	志羅山	包蔵地	かわらけ陶磁器片・多数の遺構	特別史跡の飛地「瓦窯跡」が含まれる
17	泉 屋	包蔵地	かわらけ陶磁器片・多数の遺構	中心は平泉駅の東
18	倉 町	包蔵地	かわらけ陶磁器片	
19	大 沢	包蔵地	縄文土器・石器	昭和48年度発掘調査
20	国 衡 館	城館	かわらけ陶磁器片	八花形ともいい、瓦せんが1枚出土している
21	国 衡 館	包蔵地	かわらけ陶磁器片	毛越寺の南東側
22	毛越Ⅱ	包蔵地		昭和48年度発掘調査 特別史跡の飛地含まれる旧毛越B
23	毛越Ⅲ	包蔵地		昭和48年度発掘調査 特別史跡の飛地含まれる旧毛越C
24	毛越Ⅰ	包蔵地	建物跡・かわらけ陶磁器片	昭和48・49年度発掘調査旧毛越A
25	毛越Ⅳ	包蔵地		
26	毛越Ⅴ	包蔵地・城館	かわらけ	勅使館跡が含まれる 特別史跡の飛地が含まれる
27	毛越Ⅵ	包蔵地	かわらけ	
28	高 玉	包蔵地	建物跡・かわらけ陶磁器片・土師器・須恵器	岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第93集

表1 周辺の遺跡一覧表

4. 基本土層

調査区は東西方向に長く、中央付近で東日本旅客鉄道東北本線の線路によって2分される。線路の西側は東側に比べやや低くなっている。調査区の東端部では、河川改修以前の太田川の旧河道が検出されている。遺跡の現況は水田、畑地、原野である。

I層 暗褐色土 (10 YR 3 / 4) シルト。表土で畑地の耕作土。草木の根が混入する。調査区全域で認められる。層厚 10 ~ 15 cm。

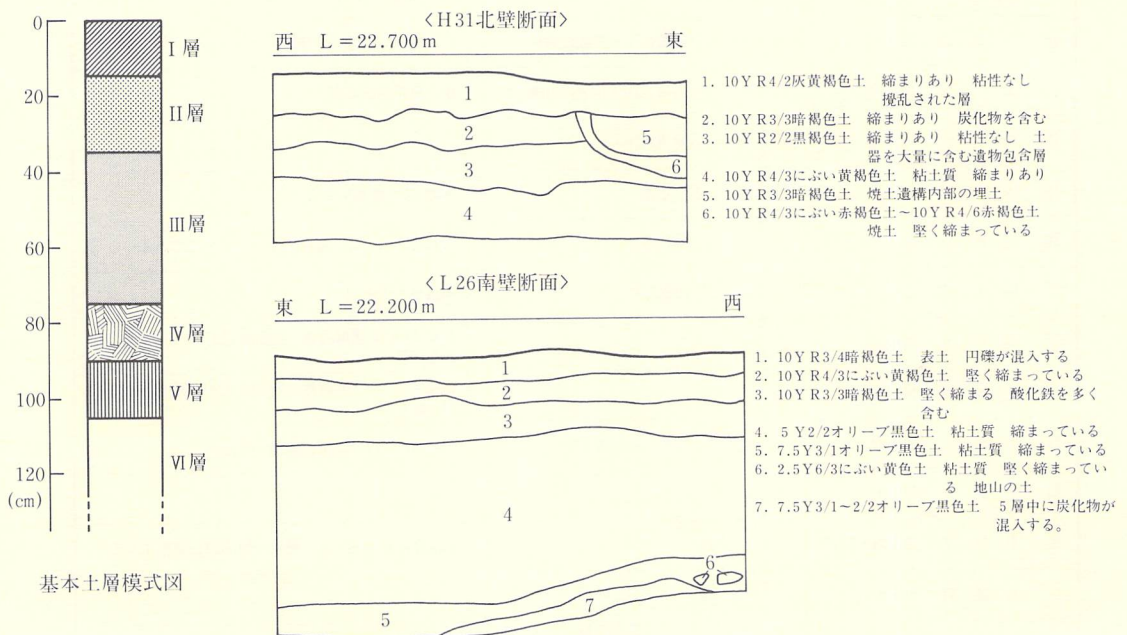
II層 暗褐色土 (10 YR 3 / 3) シルト。調査区東側では薄い。かわらけなどの遺物を少量含む。層厚 5 ~ 25 cm。

III層 オリーブ黒色土 (5 Y 2 / 2) 粘土質。調査区中央部付近にのみ存在する。河川改修時の盛り土と思われる。層厚 0 ~ 85 cm。

IV層 黒褐色土 (10 YR 2 / 2) シルト。調査区中央の北側にのみ存在する。縄文土器及び石器を多数包含している。層厚 0 ~ 15 cm。

V層 にぶい黄褐色土 (10 YR 4 / 3) 粘土質。少量の遺物を含む。層厚 0 ~ 15 cm。

VI層 にぶい黄橙色土 (10 YR 6 / 4) 粘土質。地山の土である。粘性に富み、非常に堅くしまっている。



第6図 基本土層図

Ⅲ 調査方法と整理方法

1. 野外調査

(1)調査区の設定

本遺跡の調査区域は、太田川に沿って東西に細長く広がり、その幅は8～17 m、長さ170 m 余りである。そこで、平面直角座標第X系の公共座標軸を利用して調査区を設定した。具体的には調査区域内に基準点1と基準点2を設定し、この2点間を結んだ線を延長し基軸線とした。次に調査区域全体を網羅するように4 m×4 mのメッシュを組んだ。

調査区の命名は北西端を原点として東側には1～43、南側へはA～Tまでの名称を付し、実際の呼称はこの東西と南北の名称を組み合わせるA1、B2、C3のように表現した。また、便宜的に東日本旅客鉄道の線路の西側を西側調査区、線路と線路の東側を南北に通る道路で挟まれた区域を中央調査区、道路の東側を東側調査区と呼称する。

基準点の平面直角座標は次の通りである。

基準点1 $X = -112,858.00 \text{ m}$ $Y = 25,100.00 \text{ m}$

基準点2 $X = -112,858.00 \text{ m}$ $Y = 25,068.00 \text{ m}$

(2)粗掘り

調査区域が鉄道・道路などで3区画に分かれるため、東側から適宜試掘トレンチを入れ、土層や遺構の有無を把握した後、重機によって表土除去を行った。その後人力によって徐々に掘り下げて遺構の検出を行った。

(3)精査と実測

土坑、焼土遺構、井戸跡は2分法を原則として精査を実施した。また、溝跡は土層観察用のベルトを設けて調査を行った。掘立柱建物跡では柱穴掘り方を明確に検出した後、柱痕の確認に留意し、半截して断面観察を行った。遺構の実測図は、簡易の遣り方測量を設定し、20分の1の縮尺を用いて行った。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

(4)遺構名の命名

遺構にはそれぞれの遺構が位置する調査区名を組み合わせるA1土坑、B2溝跡、C3焼土のように命名し、同じ調査区内に同種の遺構が複数存在した場合は、A1-1号土坑、A1-2号土坑、A1-3号土坑とした。遺構が2つの調査区にまたがっている場合は面積的に多く占めている方の調査区名を使用した。必ずしも厳密ではない。

(5)写真撮影

現場での写真撮影は、35 mm判2台（モノクロ、カラー・リバーサル）と6×7判（モノクロ）

1 台を使用した。

2. 室内整理

(1)遺物の処理

遺物は水洗、ラベルの記入、接合復元、実測、トレース、写真撮影、遺物図版作成の順に整理を行った。

(2)遺物図版

図版は、遺構から出土したものは遺構別に、遺構外出土遺物は種類別に掲載した。縮尺は土器・土器拓影・礫石器が3分の1、土製品・剥片石器が2分の1を原則としたが、器種の大小に応じて適宜縮尺を変えて掲載した。

(3)遺構図面の処理

図面は第1原図の点検、修正、合成、トレース、遺構図版作成の順に整理を行った。

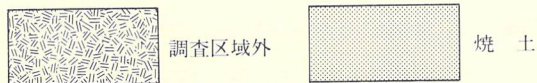
(4)遺構図版

図版の縮尺はK24-1号土坑、小土坑群、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡は80分の1、J24-1号土坑は60分の1、他は40分の1の縮尺で掲載した。

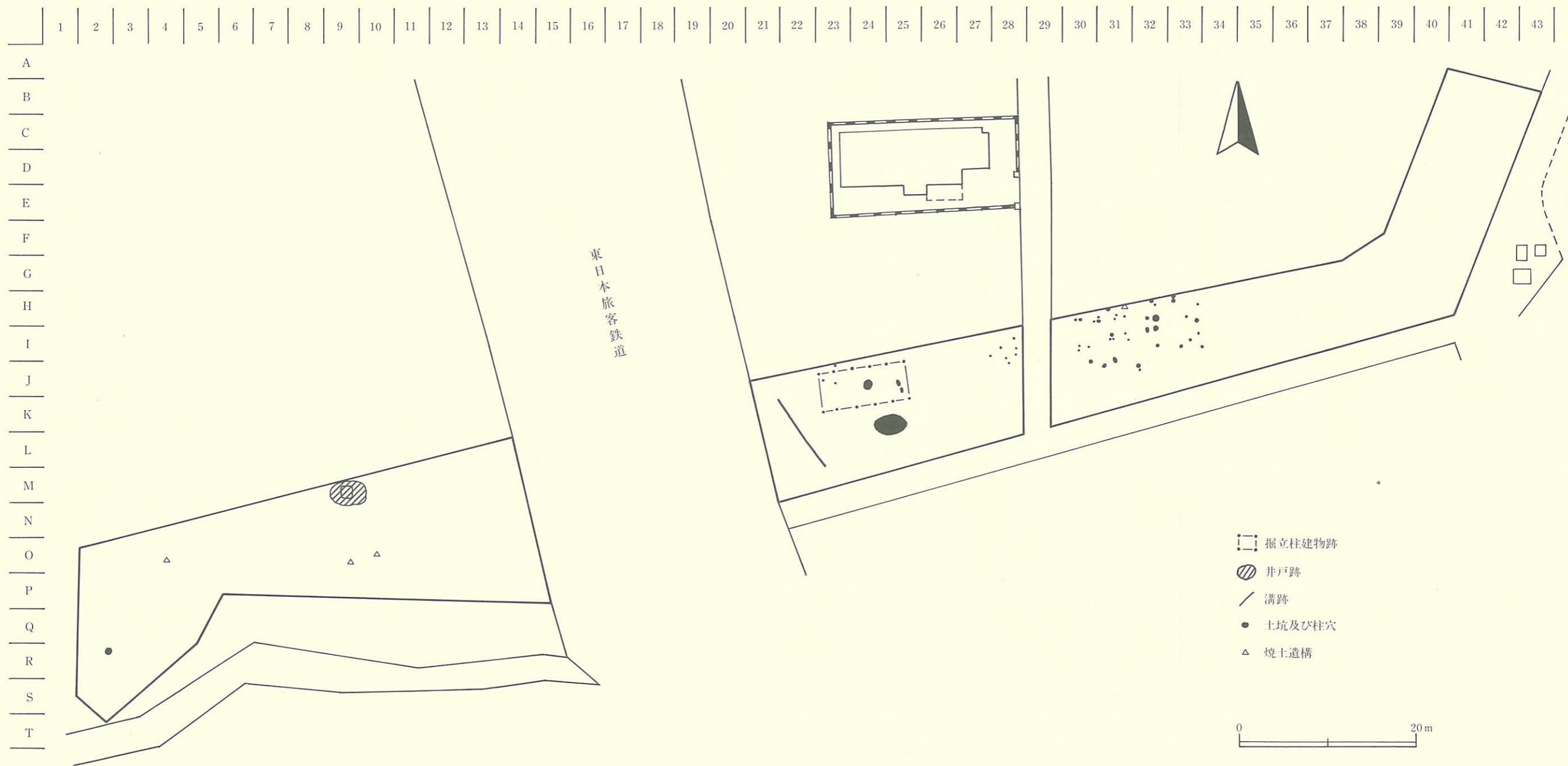
図版中の礫はアルファベットのS、掘立柱建物跡の柱穴はA₁・A₂…及びB₁・B₂…で表している。

(5)写真図版

遺構写真の縮尺は不定である。遺物写真は土器・礫石器が3分の1、剥片石器は原寸あるいは2分の1を基本としている。なお、遺物番号は遺物図版と符合している。



スクリーントーンの表し方



第7図 遺構配置図

IV 検出された遺構と遺物

調査の結果、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、溝1条、土坑54基、焼土遺構4基が検出された。出土した遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、陶磁器、かわらけ、石器、石製品、椀である。

1. 掘立柱建物跡（第8図、写真図版4）

本遺構は中央調査区の北寄り J 23～J 25、K 23～25 に位置している。検出面は基本土層のVI層に相当するにぶい黄橙色土上面である。なお、このにぶい黄橙色土層は太田川の河床に向かって落ち込んでおり、河川改修前は旧河道であったと思われる。本遺構は、その旧河道に落ち込む手前の平坦地に位置する。本遺構の西側には溝跡が、南側にはK 24 - 1号土坑がある。

規模は、桁行5間(9.7 m)、梁行1間(4.2 m)の東西棟と推定されるが、西側の2基の柱穴の規模が他の柱穴に比べ小さいことから桁行4間(8.0 m)、梁行1間(4.2 m)で西側に庇あるいは他の付属施設のある建物である可能性もある。棟方向はN - 85° - Eである。

桁行北側間尺は西から1.8 m、2.05 m、2.0 m、1.9 m、2.0 m（現行尺6.0尺、6.8尺、6.6尺、6.3尺、6.6尺）で、南側間尺は西から1.85 m、1.85 m、1.95 m、2.00 m、1.95 m（現行尺6.1尺、6.1尺、6.4尺、6.6尺、6.4尺）である。梁行西側間尺は4.2 m（現行尺13.9尺）、東側間尺は4.15 m（現行尺13.7尺）である。柱穴間の平均間尺は、桁行が1.94 m、梁行は4.18 mである。

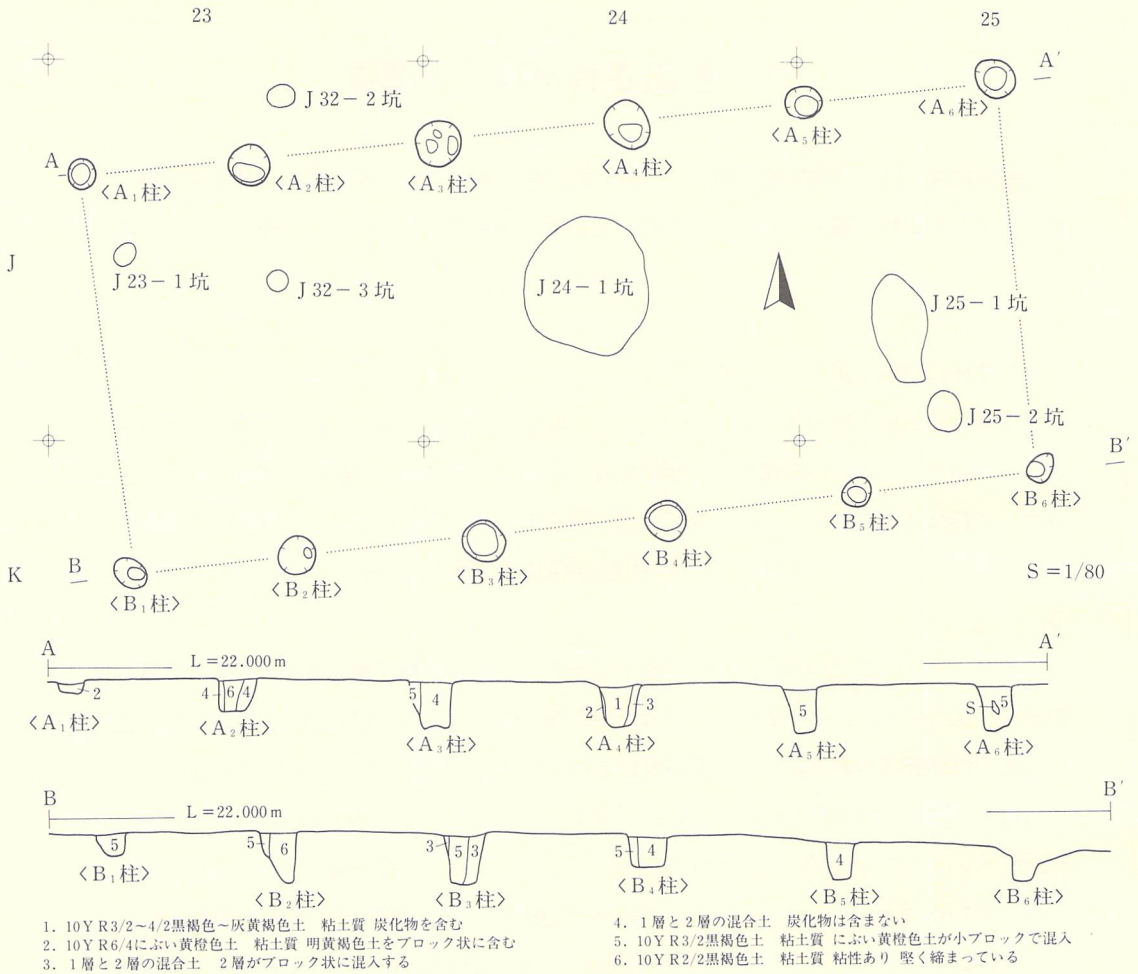
梁行の柱穴間の間尺は、桁行の柱穴間の間尺のほぼ2倍となっており、A₁柱穴とB₁柱穴の間とA₆柱穴とB₆柱穴の間にも柱穴の存在が考えられたが検出されなかった。

柱穴の掘り方はほぼ円形で、径32～53 cm、深さ18～60 cmの規模をもつ。柱痕は不明なものが多いが、確認できたもので径20 cm前後を測る。庇あるいは付属施設の柱穴と考えられるA₁柱穴、B₁柱穴については深さがそれぞれ18 cm、28 cmと浅く、径も他の柱穴より小さめである。

埋土は黒褐色土あるいは黒褐色土とにぶい黄橙色土の混合土が主体で、にぶい黄橙色土はブロックで混入する。A₁柱穴の埋土には少量の炭化物が混入していた。柱痕は黒褐色土で粘性があり堅く締まっている。

本遺構は遺物を伴わず時期不明である。

なお、本遺構の中央部付近にJ 24 - 1土坑が存在するが、本遺構との関連は不明である。



第8図 掘立柱建物跡

No	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	A ₆
開口部径	32 × 30	44 × 43	50 × 49	53 × 45	40 × 35	46 × 41
底部径	22 × 19	34 × 20	20 × 10	26 × 19	25 × 22	26 × 24
深 さ	18	33	52	47	60	52

No	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	B ₅	B ₆
開口部径	40 × 29	41 × 40	46 × 42	44 × 43	35 × 29	35 × 25
底部径	19 × 13	12 × 9	35 × 31	36 × 27	21 × 17	20 × 16
深 さ	28	59	53	36	40	31

掘立柱建物跡柱穴計測表

(単位 cm)

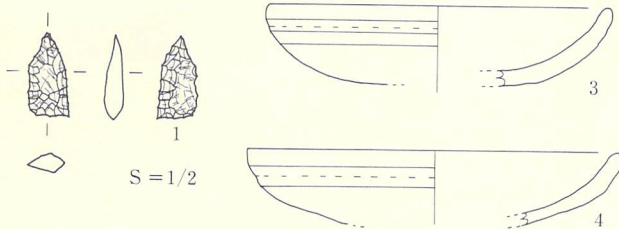
2. 井戸跡 (第9図、写真図版5)

本遺構は西側調査区北辺のM9グリッドに位置する。検出は重機による表土除去後の暗褐色土及び青緑色粘土の広がりによって確認された。平面形は不整な楕円形を呈し、検出面から70 cm下がった地点から底部までは方形となる。規模は開口部径4.3 m × 2.9 m、底部径1.7 m × 1.67 m、深さ2.45 mを測る。埋土は3層に大別される。1層は暗褐色の粘土質シルト、2層はにぶい黄褐色土とにぶい黄橙色土と黒褐色土の混合土、3層は暗緑灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入する。埋土の状況から人為的に埋め戻された可能性がある。

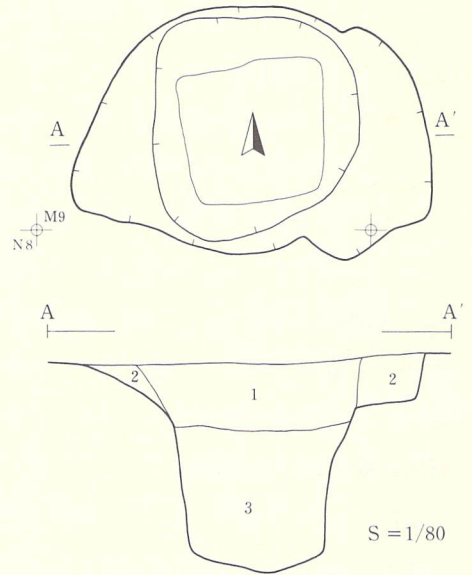
出土遺物 (第10図、写真図版10)

1は平基無茎の石鏃で、基部が一部欠損している。埋土上位からの出土で、埋め戻しによる流れ込みと思われる。2は漆塗りの椀で、2層中位の南西の隅から出土した。修復再利用のためか口縁部が削り取られている。底部にはろくろ使用の痕跡が認められる。漆の塗りはやや粗雑である。材質はけやきと思われる。3～5は手づくねのかわらけで、いずれも2層中からの出土である。実測可能なかわらけはこの3点のみであるが、他に細片が1.3 kgほど出土している。

出土遺物から12世紀の遺構と考えられる。

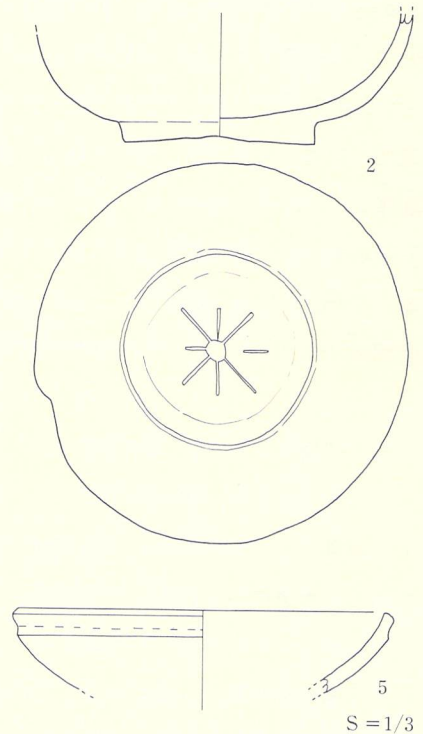


第10図 井戸跡出土遺物



1. 10 Y R 3/3 暗褐色土 粘性・しまりあり にぶい黄褐色土をブロック状に含む
2. 10 Y R 4/3 にぶい黄褐色土 黒褐色とにぶい黄橙色土をまだらに含む 粘土質 しまりあり
3. 5 G Y 3/1 暗緑灰色土 粘土質 緑灰色土の粘土ブロックを含む

第9図 井戸跡



3. 溝 跡 (第 11 図、写真図版 6)

本遺構は中央調査区西側に位置し、南北に延びる。北側は削平を受けており、南側は試掘トレンチにより切られるが、いずれも調査区域外に続くものと思われる。検出は基本層序のVI層上面の暗褐色土の広がりによる。規模は、全長約 10 m、幅 25 ~ 55 cm、深さ 4 ~ 15 cm 程である。断面形は浅い皿状を呈している。壁及び底面はVI層中にあり、底面はほぼ平坦である。埋土はII層起源の暗褐色土 1 層で、砂質土や泥質土は全く見られず、水が常時流れていたような痕跡は埋土の堆積状況からは観察されない。

本遺構は遺物が出土せず、時期不明である。

4. 土 坑

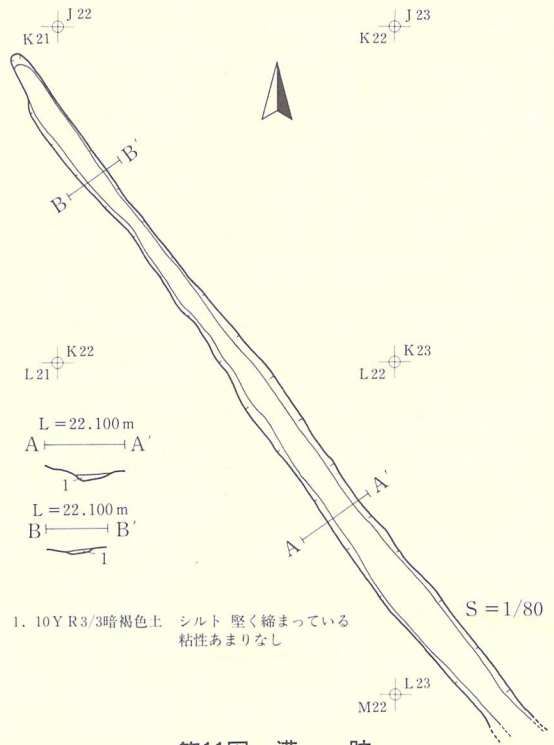
J 24 - 1 号土坑 (第 12 図、写真図版 6)

本遺構は中央調査区北側、掘立柱建物跡の中央付近に位置する。検出はVI層上面におけるにぶい黄褐色土の円形の広がりによる。平面形はほぼ円形で、規模は開口部径 150 × 130 cm、底部径 50 × 30 cm、深さ 140 cm を測る。断面形は V 字状を呈し、壁は急角度で外傾して立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色土とにぶい黄橙色土、暗褐色土の混合土で、埋め戻されたものである。

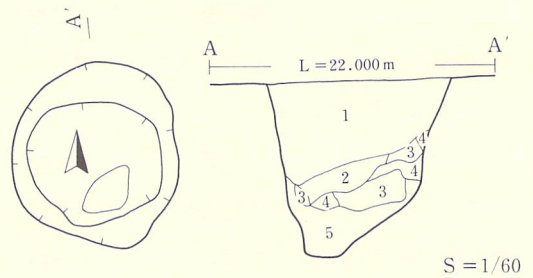
出土遺物 (第 12 図、写真図版 10)

6 は無文の土器の胴部破片である。7 は石錐で、錐部が欠損しており、残存長は 3.2 cm ほどである。本遺構からは他にも土器が数点出土しているが、いずれも細片で摩滅が激しい。

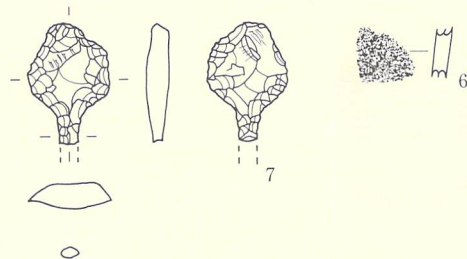
本遺構からは縄文土器が出土しているが、流れ込みによるものと思われ、時期不明である。



第11図 溝 跡



1. 10 Y R 6/4 にぶい黄橙色土 (粘土質) と 10 Y R 4/3 にぶい黄褐色土 (シルト) の混合土 強く締まっている
2. 10 Y R 6/4 にぶい黄橙色土 (粘土質) と 10 Y R 4/2 灰黄褐色土 (粘土質) の混合土 強く締まっている
3. 10 Y R 3/3 暗褐色土 粘土質 締まっている 粘性あり
4. 10 Y R 6/4 にぶい黄橙色土 粘土質 締まっている 粘性あり
5. 10 Y R 5/4 にぶい黄褐色土 (粘土質) に 10 Y R 3/2 黒褐色土 (シルト) が大きなブロックで混入する



第12図 J 24 - 1 号土坑 (遺構・遺物)

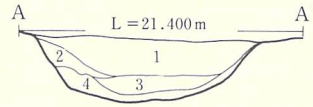
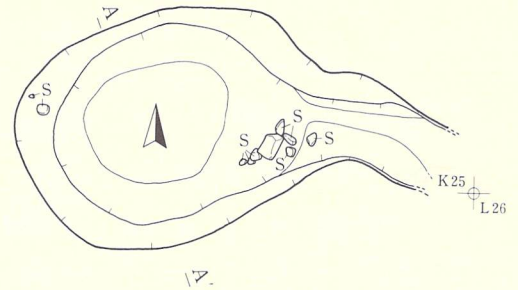
K 24 - 1 号土坑 (第 13 図、写真図版 6)

本土坑は、中央調査区やや南寄りの K 24 グリッドに位置している。検出はにぶい黄橙色粘土層上面における暗褐色土の楕円形の広がりによる。平面形は東西方向にやや長い楕円形を呈し、東側に土坑から続く溝をもつ。この溝は重機により南側が削平されたが南側に続き、太田川に流れこんでいたものと思われる。規模は開口部径 370 × 270 cm、底部径 175 × 145 cm、深さ 75 cm である。断面形は浅鉢状を呈する。底部は VI 層中にあり、ほぼ平坦で堅くしまっている。

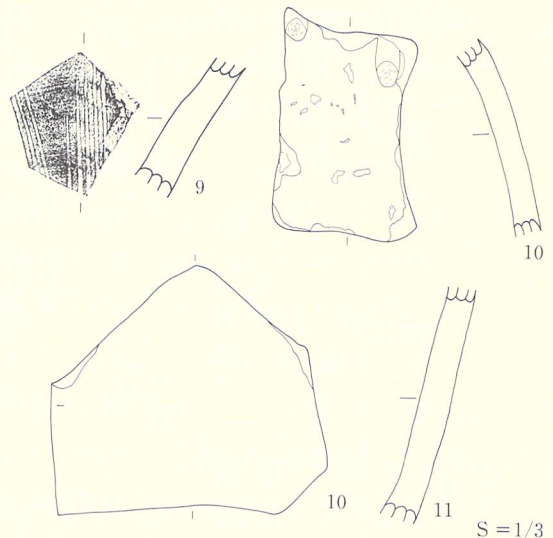
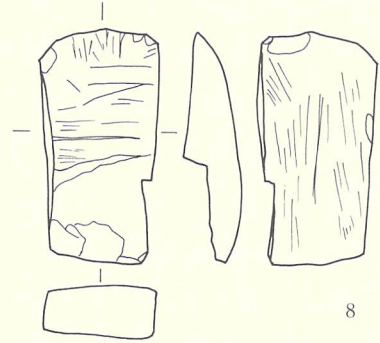
埋土は 4 層に分けられ、上位は砂質土が厚く堆積し、下位は灰色の粘土層が広がっている。なお、粘土層には小枝や梅の種が混入していた。出土遺物 (第 13 図、写真図版 10)

7 は砥石である。片面が使用され、使用面の約半分が欠損している。8 はすり鉢の胴部破片である。条痕の間隔が比較的広いことから、江戸初期以降のものと思われる。産地は不明である。9 は胴径 30 cm 程度の常滑産の壺の胴部破片で、自然釉がかかっており、鎌倉初期のものとして推定される。10 は常滑窯の特徴をもつ壺の胴部破片である。胎土に砂が混入し、表面が白濁している。焼きは非常によい。15 世紀後半から 16 世紀にかけてのものとして推定される。他に近・現代のものと思われる陶磁器片が埋土上位から 10 点ほど出土している。

本遺構の遺物は時期的にかなり幅があり、遺構の時期を特定することはできないが、埋土の上位部分が他の遺構では見られない砂質であることから、比較的新しい時期の排水施設的な性格をもつ遺構と思われる。



1. 10Y R3/4暗褐色土 砂質シルト 締まっている 粘性なし
2. 10Y R4/3にぶい黄褐色土 シルト 非常に堅くしまっている
3. 10Y R5/2灰黄褐色土 砂質 水分を多く含み縮まりなし
4. 5 Y 4/1~4/2灰~灰オリーブ色土 粘土質 堅くしまっている 層中に小枝などが含まれる



第13図 K24-1号土坑 (遺構・遺物)

5. 小土坑群 (第 14・15・16・17・18・19 図、写真図版 6・7・8・9)

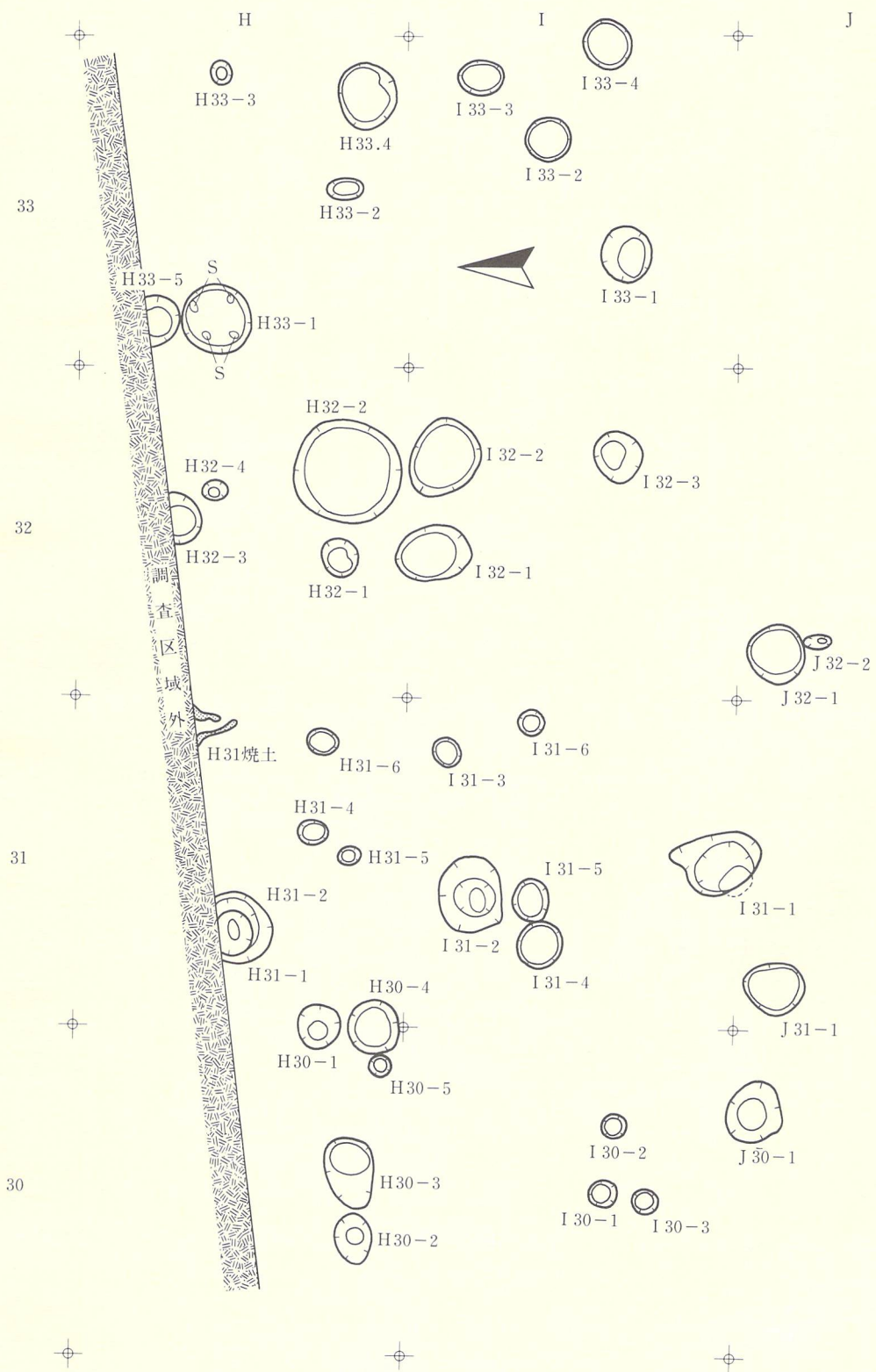
小土坑は東側調査区で 39 基、中央調査区で 12 基、西側調査区で 1 基検出されている。東側調査区の小土坑は、東西約 12 m、南北約 8 m の範囲に集中している。この地点は以前に家屋が立っていた場所で、ごみを捨てるために掘った新しい土坑などもみられる。この地点の土坑の規模は長径で 28 cm～131 cm の範囲にあり、20 cm 台が 3 基 (7.7%)、30 cm 台が 9 基 (23.1%)、40 cm 台が 2 基 (5.1%)、50 cm 台が 7 基 (17.9%)、60 cm 台が 6 基 (15.4%)、70 cm 台が 3 基 (7.7%)、80 cm 台が 2 基 (5.1%)、90 cm 台が 6 基 (15.4%)、1 m を超えるものが 1 基 (2.6%) である。1 m を超える H 32 - 2 号土坑は、桶を埋設しており明治以降の新しいものと思われる。深さは 8 cm～81 cm の範囲にあり、10 cm 未満が 2 基 (5.1%)、10 cm 台が 12 基 (30.8%)、20 cm 台が 8 基 (20.5%)、30 cm 台が 5 基 (12.8%)、40 cm 台が 4 基 (10.3%)、50 cm 台が 1 基 (2.6%)、60 cm 台が 5 基 (12.8%)、70 cm 台 1 基が (2.6%)、80 cm 台が 1 基 (2.6%) となって 50 cm 以下のものが多い。形状は円形と楕円形がほぼ半数ずつある。

この中で埋土断面に柱の痕跡がみられるものは H 30 - 1 号土坑、H 32 - 3 号土坑、H 33 - 1 号土坑、H 33 - 4 号土坑、I 30 - 1 号土坑、I 31 - 1 号土坑、I 31 - 2 号土坑、I 32 - 3 号土坑、I 33 - 1 号土坑、I 33 - 4 号土坑の 10 基である。これらの規模は長径が 60 cm 以上のものが 9 基、深さ 40 cm 以上のものが 8 基と他の土坑に比べて大型である。断面からみた柱痕の径は 15～20 cm のものが多い。

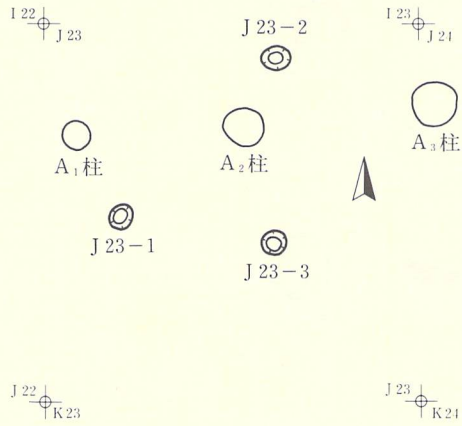
遺物が出土している土坑は 16 基ある。出土遺物は縄文土器の細片が最も多く、他に石器や陶磁器片が少量出土している。この地点は縄文後期から晩期にかけての包含層にあたり、縄文土器と陶磁器片が同一の土坑から出土したり、上述のように攪乱もあることから遺物から時代を特定することはできないが、H 30 - 4 号土坑・I 32 - 1 号土坑は土器がまとまって出土しており縄文後期の遺構の可能性が高い。

中央調査区では 12 基の小土坑が検出されている。不整形の J 25 - 1 号土坑を除けば小規模なものが多い。長径は 22～47 cm (J 25 - 1 号土坑を除く) の範囲にあり、20 cm 台が 8 基と最も多い。深さは 9～57 cm の範囲にあり、30 cm 以下のものが 10 基と大部分を占める。この地区の小土坑からは柱痕は確認されず、埋土も単層のものがほとんどである。遺物は J 25 - 1 号土坑から縄文土器が数片出土している。

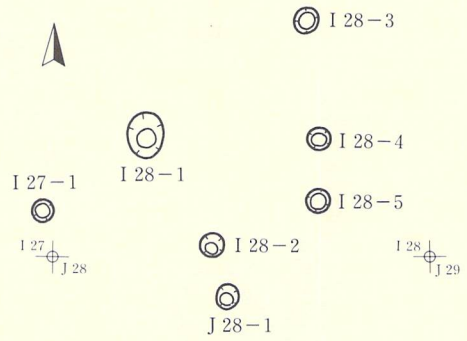
西側調査区では R 2 - 1 号土坑 1 基が検出されている。規模は開口部で 78×78 cm、深さ 45 cm を測る。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。埋土からは柱痕は確認されず、暗褐色土の単層である。この土坑からは、かわらけの細片が数点出土している。



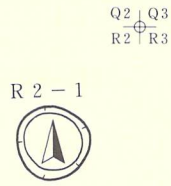
第14圖 小土坑群 1



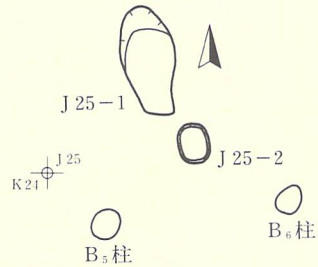
J 23 グリッド土坑



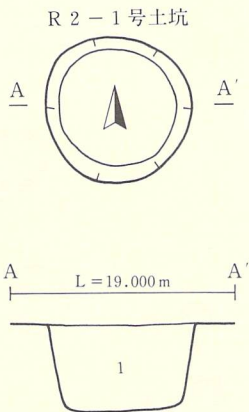
I 28 グリッド土坑



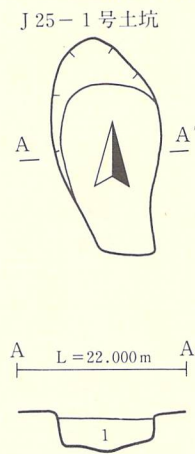
R 2 グリッド土坑



J 25 グリッド土坑



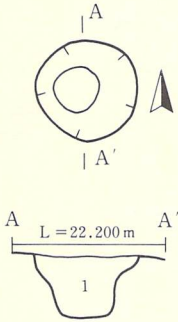
1. 10Y R3/3暗褐色土 粘性あり 締まっている 炭化物が少量混入



1. 10Y R4/3にふい黄褐色土 堅く締まっている にふい黄橙色土がブロック状に混入する

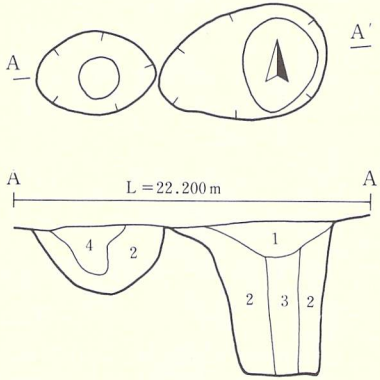
第15図 小土坑群 2

H30-1号土坑



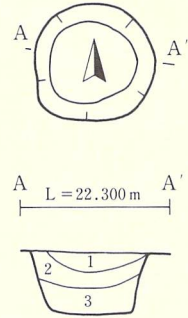
1. 10Y R3/3暗褐色土 粘性なし 縮まりあり

H30-2号土坑 H30-3号土坑



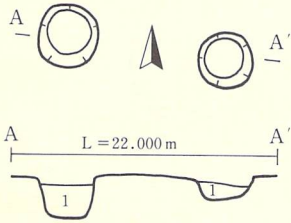
1. 10Y R3/3暗褐色土 強く縮まっている 褐色土を小ブロックで含む
 2. 10Y R3/2黒褐色土 粘土質 褐色土をブロック状に含む
 3. 10Y R3/2黒褐色土 粘性あり やわらかい
 4. 10Y R3/2黒褐色土 粘土質 強く縮まっている

H30-4号土坑



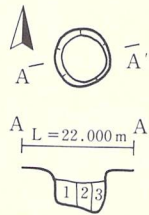
1. 10Y R3/3暗褐色土 粘性なし 縮まりあり 炭化物を含む
 2. 10Y R4/3にふい黄褐色土 粘性なし 縮まりあり 炭化物を含む
 3. 10Y R3/4暗褐色土 粘性あり 縮まりあり 炭化物を含む

I30-1号土坑 I30-2号土坑



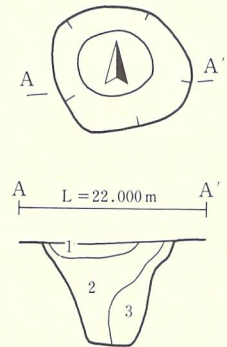
1. 10Y R3/3暗褐色土 粘性あり 縮まっている

I30-3号土坑

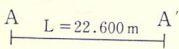
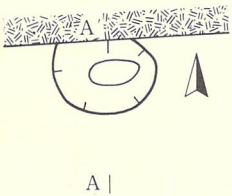


1. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色土 粘性・縮まりあり
 2. 10Y R3/3暗褐色土 粘性あり 縮まりあり
 3. 10Y R4/3にふい黄褐色土 粘性・縮まりあり

J30-1号土坑

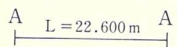
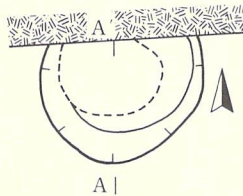


H31-1号土坑



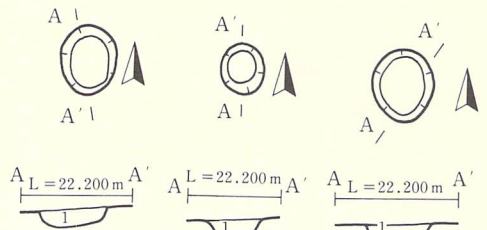
1. 10Y R3/2黒褐色土 粘土質 褐色土をブロックで混入
 2. 10Y R4/6褐色土 砂質 径5mm-25mmの円礫を多量に含む

H31-2号土坑



1. 10Y R3/1黒褐色土 粘性・縮まりあり にふい黄褐色土がブロックで混入
 2. 10Y R3/4暗褐色土 粘性・縮まりあり
 3. 10Y R3/1黒褐色土 粘性あり 縮まりやや弱い にふい黄褐色土を混入する

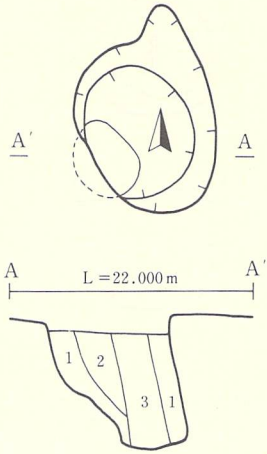
H31-4号土坑 H31-5号土坑 H31-6号土坑



1. 10Y R3/3暗褐色土 粘性あり 縮まっている

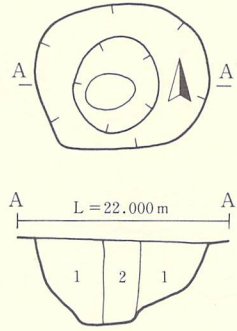
第16図 小土坑群3

I 31-1 号土坑



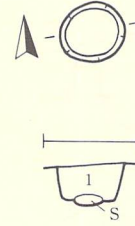
1. 10Y R3/3暗褐色土 粘性なし 強く締まっている 明黄褐色土をブロックで混入する
2. 10Y R3/2黒褐色土 粘性・縮まりなし 明黄褐色土を少量混入する
3. 10Y R3/2黒褐色土 粘性・縮まりなし

I 31-2 号土坑



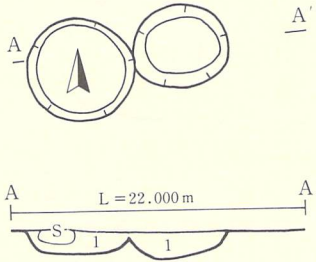
1. 10Y R3/3暗褐色土 粘性あり 縮まっている にふい黄褐色土を小ブロックで混入
2. 10Y R4/6褐色土 粘性あり 縮まっている

I 31-3 号土坑



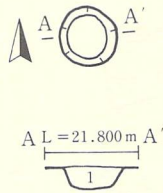
1. 10Y R3/3暗褐色土 粘性あり 縮まっている

I 31-4 号土坑 I 31-5 号土坑

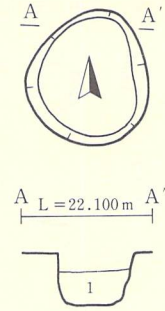


1. 10Y R3/3暗褐色土 粘性あり 縮まっている 酸化鉄が少量混じる

I 31-6 号土坑

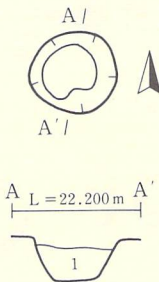


J 31-1 号土坑



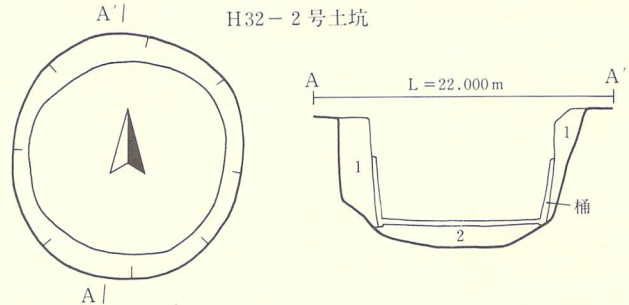
1. 7.5Y R4/3褐色土 粘土質 強く締まっている

H32-1 号土坑



1. 10Y R3/3暗褐色土 粘土質 縮まっている にふい黄褐色土をまだらに含む 少量の炭化物が混入する

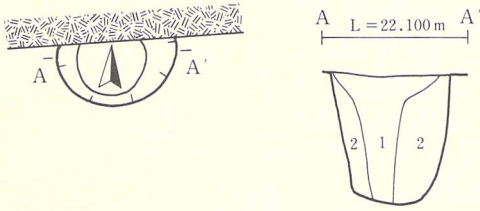
H32-2 号土坑



1. 10Y R3/4暗褐色土 強く締まっている やや粘性あり
2. 10Y R4/2灰黄褐色土 粘土質 やわらかい 水分を多く含む

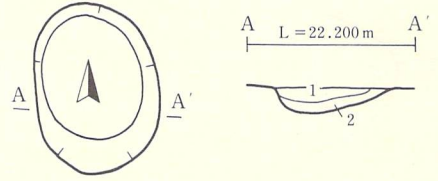
第17図 小土坑群4

H32-3号土坑



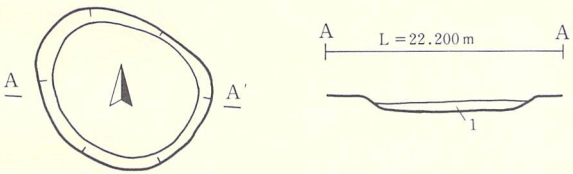
1. 10Y R3/2黒褐色土 粘性あり 縮まり弱い
2. 10Y R3/4暗褐色土 粘性・縮まりあり 地山の粘土をブロック状に含む

I 32-1号土坑



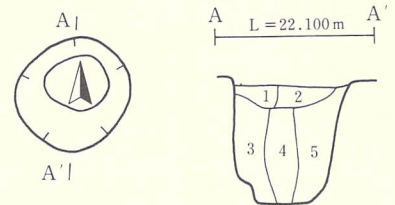
1. 10Y R2/3黒褐色土 粘性なし 縮まりあり 炭化物を含む
 2. 10Y R3/1黒褐色土 粘性なし 縮まりあり 炭化物を多く含む
- ※ 1・2層とも遺物を多数包含する

I 32-2号土坑



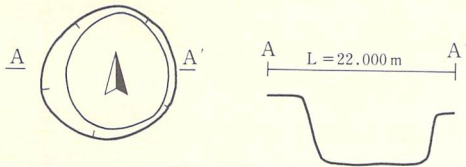
1. 10Y R4/2灰黄褐色土 粘性なし 縮まりあり 浅黄色の粘土が小ブロックで混入する

I 32-3号土坑

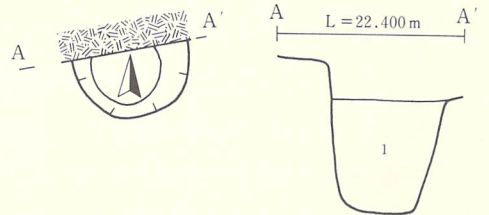


1. 10Y R3/2黒褐色土 シルト 粘性あり 縮まり強い
 2. 10Y R3/1黒褐色土 シルト 粘性あり 縮まり強い
 3. 10Y R4/4褐色土 粘土質 粘性あり 縮まりあり
 4. 10Y R3/3暗褐色土 粘土質 粘性あり 縮まり弱い
 5. 10Y R3/4暗褐色土 粘土質 粘性あり 縮まりあり
- ※ 1・2・3・5層には灰黄色粘土がブロックで混入

J 32-1号土坑

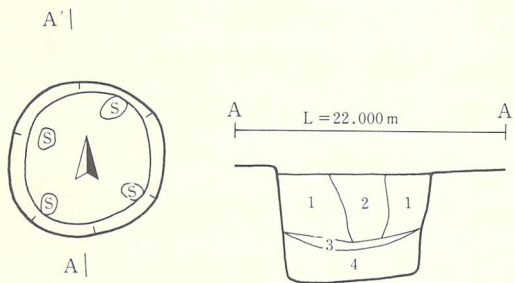


H33-5号土坑



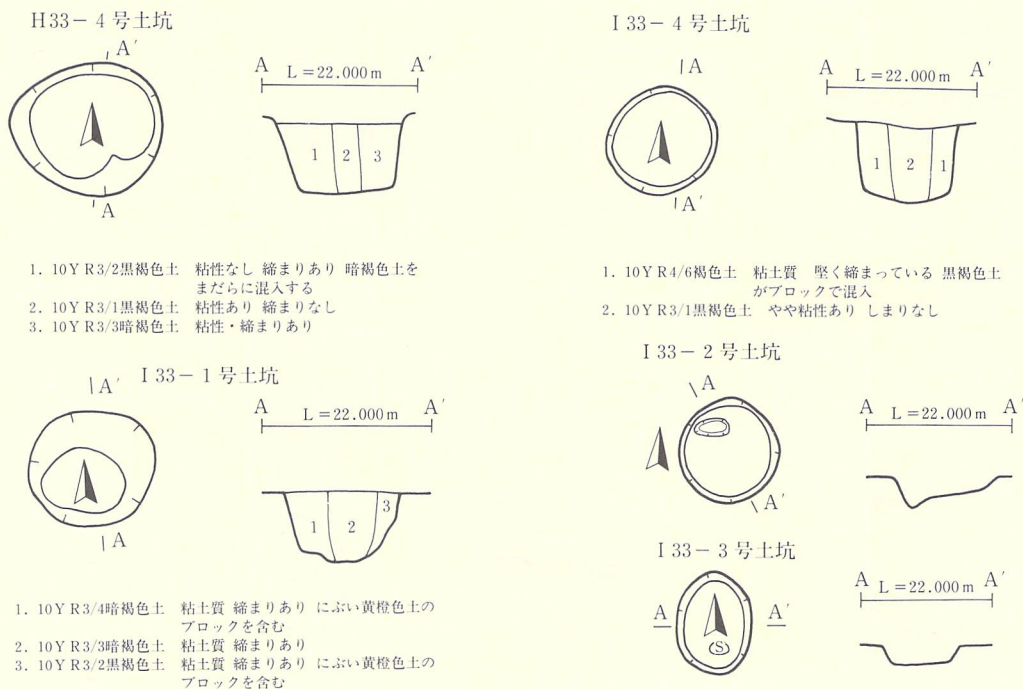
1. 10Y R3/4暗褐色土 堅く縮まっている にぶい黄褐色土を小ブロックで混入する

H33-1号土坑



1. 10Y R2/3暗褐色土 シルト やや粘性あり 縮まっている
2. 10Y R3/2黒褐色土 シルト やや粘性あり 縮まりなし
3. 10Y R4/3にぶい黄褐色土 粘土質 粘性あり 縮まりなし
4. 10Y R4/2灰黄褐色土 粘土質 粘性あり 非常にやわらかい 水分を多く含む

第18図 小土坑群5



第19図 小土坑群6

出土遺物（第20・21・22図、写真図版10・11・12）

出土した遺物は土器・石器及び陶磁器である。土器の量は少量で摩耗がはげしく、いずれも細片での出土である。

J 25-1号土坑出土の12は羽状縄文が施されている深鉢の口縁部破片である。H 30-3号土坑出土の13には羽状縄文が、14には横位斜行縄文がそれぞれ施されている。ともに深鉢の胴部破片である。H 30-4号土坑出土の15は口縁部に三叉文をもつ。16は山形突起を持ち、口縁部下に沈線及び破線状の沈線が平行して施文されている。17も口縁部に山形の突起を持ち、平行沈線が施されている。18は単節の斜行縄文が施された深鉢の口縁部である。H 31-4号土坑出土の19は平行する沈線によって区画され上部に縦位の刻目文が、下部に斜行縄文が施文されている。H 32-2号土坑出土の20は平行する2本の沈線によって区画され口縁部に刻目文をもつ。H 32-3号土坑出土の21は斜行縄文が施された深鉢の口縁部である。H 33-1号土坑の22は深鉢の胴部、H 33-4号土坑の23は深鉢の底部でいずれも無文である。I 30-1号土坑出土の24~27はいずれも深鉢の胴部で、24には三叉文が、25には2種類の平行沈線が、26には斜行縄文が、27には羽状縄文が施されている。I 32-1号土坑出土の28は深鉢の口縁部で欠損しているが、山形の突起をもつものと思われる。平行する沈線によって区画され、その間に磨消縄文が施されている。29は深鉢の口縁部付近と思われ、破線状の沈線及

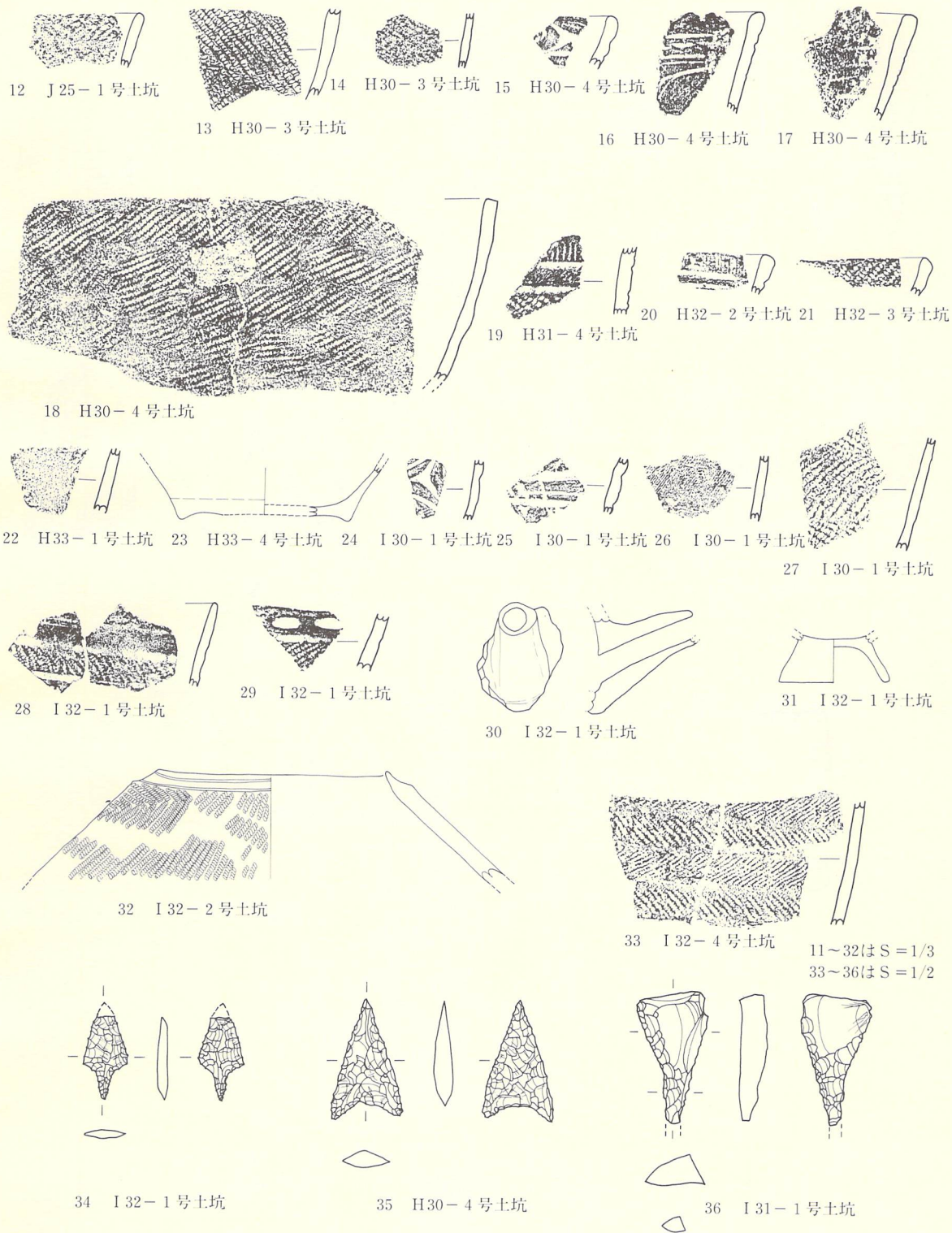
びそれに平行する沈線によって区画され、下部に斜行縄文が施文されている。30は注口土器の注ぎ口、31は台付土器の台部で、いずれも無文である。I 32-2号土坑出土の32は胴部が大きく張り出す形の深鉢の口縁部で、口唇部は断面が細くすぼまり、沈線が施されている。胴部には斜行縄文が施される。なお、口縁部付近に一部異なる原体での施文が見られる。I 32-4号土坑出土の33は羽状縄文が施された深鉢の胴部である。

石器は10基の土坑から13点が出土している。34はI 32-1号土坑から出土した石鏃である。凸基有茎鏃で、身部の先端が欠損しており、残存長は2.7cmである。同じ土坑からは39不定形石器と43石刀が出土している。39は隣り合う2辺に刃部をもち、一部両面から二次調整が施されている。H 30-4号土坑出土の35は凹基無茎鏃で、長さは5cmである。I 31-1号土坑から出土した36は石錐のつまみの部分で身部が欠損している。残存長は4.3cmである。37はI 32-2号土坑出土の縦型の石匙で、長さは6.9cmを測る。38はI 30-2号土坑出土の尖頭器で、二次調整が両面から施されているがやや粗い。長さは5.4cmである。40はI 30-1号土坑出土の不定形石器で、二次調整が片面からのみ施されている。長さは4.0cmである。I 31-4号土坑からは41・45・46の3点が出土している。は不定形石器で、二次調整が片面からのみ施されている。長さは5.7cmである。45は石皿で、使用面が僅かに凹面状になっておりざらざらしている。46は石臼で全体の4分の1程度しか残っていない。両面に放射状に溝が切られている。43はJ 32-1号土坑から出土した不定形石器である。二つの刃部が隣り合い、二次調整が両面から施されている。長さは5.7cmである。I 31-2号土坑出土の43は石刀で、両端が欠損しており、残存長は5.7cmである。J 30-1号土坑出土の44は凹石で、両面に凹みをもつが、側面に一か所切り込みが施されており、石錘あるいは破損した石錘の凹石への二次使用(あるいはその逆)の可能性もある。

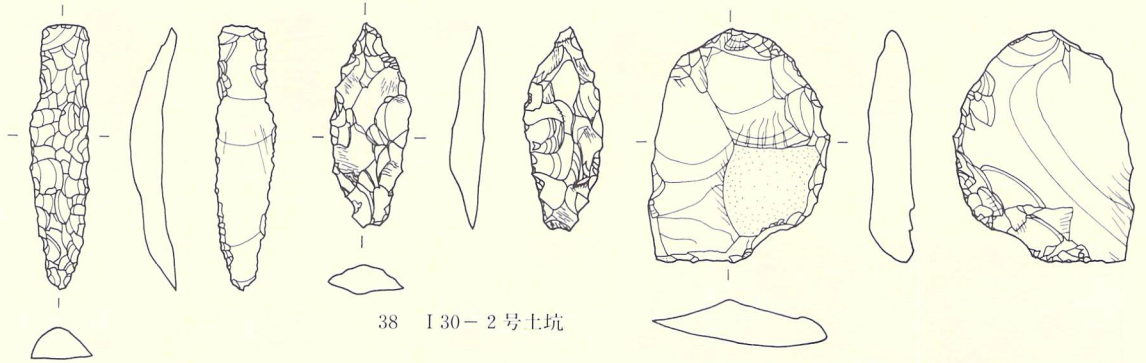
陶磁器は2基から1点ずつ出土している。I 32-2号土坑出土の47は、美濃産の茶碗の胴部破片で、18世紀末～19世紀にかけてのものと推定される。48はH 30-3号土坑からの出土で、美濃大窯Ⅱ期bの灰釉皿の底部破片で、15世紀末～16世紀初頭のものである。

土坑名	径(cm)	深さ(cm)	形状	出土遺物	備考	図版番号	写真図版番号
J23-1号土坑	27×22	12	円形			第15図	
J23-2号土坑	30×25	10	円形			第15図	
J23-3号土坑	25×23	9	円形			第15図	
J25-1号土坑	119×58	21	不整形	縄文土器		第15図	写真図版6
J25-2号土坑	43×35	11	楕円形			第15図	
I27-1号土坑	27×26	15	円形			第15図	
I28-1号土坑	47×38	57	楕円形			第15図	
I28-2号土坑	26×25	33	円形			第15図	
I28-3号土坑	27×23	14	円形			第15図	
I28-4号土坑	22×21	14	円形			第15図	
I28-5号土坑	25×23	13	円形			第15図	
J28-1号土坑	27×23	15	円形			第15図	
H30-1号土坑	55×54	37	円形			第14・16図	写真図版7
H30-2号土坑	53×46	38	楕円形			第14・16図	写真図版7
H30-3号土坑	92×60	81	楕円形	縄文土器・陶磁器		第14・16図	写真図版7
H30-4号土坑	64×63	32	円形	縄文土器・石器		第14・16図	写真図版7
H30-5号土坑	28×26	10	円形			第14図	
H31-1号土坑	55×?	10	楕円形?		調査区域外に続く・重複	第14・16図	
H31-2号土坑	90×?	26	円形?		調査区域外に続く・重複	第14・16図	
H31-4号土坑	32×30	11	楕円形	縄文土器		第14・16図	
H31-5号土坑	28×24	10	楕円形			第14・16図	
H31-6号土坑	39×32	10	楕円形			第14・16図	
H32-1号土坑	47×44	24	円形			第14・17図	写真図版7
H32-2号土坑	131×129	71	円形	縄文土器	桶を埋設・明治以降の遺構	第14・17図	
H32-3号土坑	64×?	68	楕円形?	縄文土器	調査区域外に続く	第14・18図	
H32-4号土坑	31×26	19	楕円形			第14図	
H33-1号土坑	87×84	64	円形	縄文土器	底部に4個の石を置く	第14・18図	写真図版7
H33-2号土坑	42×25	9	楕円形			第14図	
H33-3号土坑	29×24	23	楕円形			第14図	
H33-4号土坑	81×71	40	楕円形	縄文土器		第14・19図	
H33-5号土坑	62×?	60	円形?		調査区域外に続く	第14・18図	
I30-1号土坑	34×31	24	円形	縄文土器・石器		第14・16図	
I30-2号土坑	30×30	12	円形	石器		第14・16図	
I30-3号土坑	30×31	23	円形			第14・16図	
I31-1号土坑	93×70	68	楕円形	石器	柱の抜き取り痕?あり	第14・17図	写真図版7
I31-2号土坑	91×76	47	楕円形	石器		第14・17図	写真図版7
I31-3号土坑	35×32	21	円形			第14・17図	写真図版8
I31-4号土坑	57×54	13	円形	石器		第14・17図	写真図版8
I31-5号土坑	51×44	14	楕円形			第14・17図	写真図版8
I31-6号土坑	31×30	12	円形			第14・17図	
I32-1号土坑	90×65	27	楕円形	縄文土器・石器		第14・18図	写真図版8
I32-2号土坑	94×78	8	楕円形	縄文土器・石器・陶磁器		第14・18図	
I32-3号土坑	62×55	65	円形			第14・18図	写真図版8
I33-1号土坑	68×63	37	円形			第14・19図	写真図版8
I33-2号土坑	55×53	17	円形			第14・19図	
I33-3号土坑	54×40	10	楕円形			第14・19図	
I33-4号土坑	60×56	40	円形			第14・19図	写真図版8
J30-1号土坑	74×64	54	楕円形	石器		第14・16図	写真図版8
J31-1号土坑	72×65	40	楕円形			第14・17図	写真図版9
J32-1号土坑	72×67	33	円形	石器		第14・18図	写真図版9
J32-2号土坑	34×19	20	楕円形			第14図	
R2-1号土坑	78×78	45	円形	かわらけ		第15図	写真図版9

表2 小土坑計測表



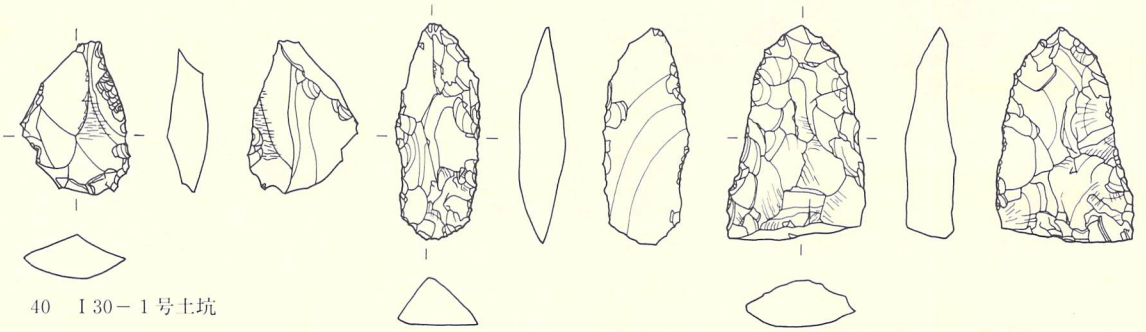
第20图 小土坑内出土遺物 1



37 I 32-2 号土坑

38 I 30-2 号土坑

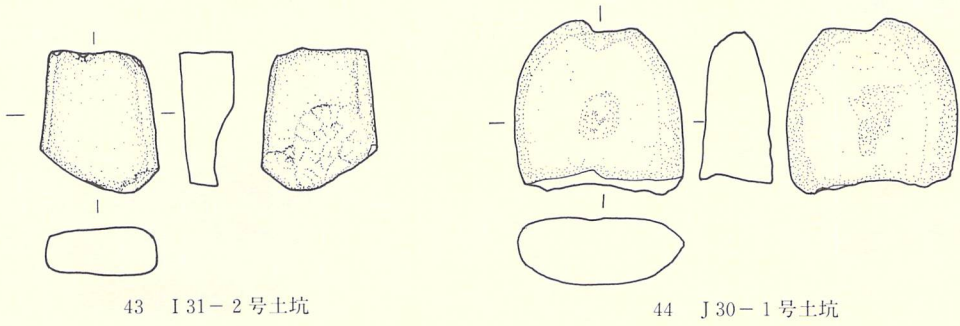
39 I 32-1 号土坑



40 I 30-1 号土坑

41 I 31-4 号土坑

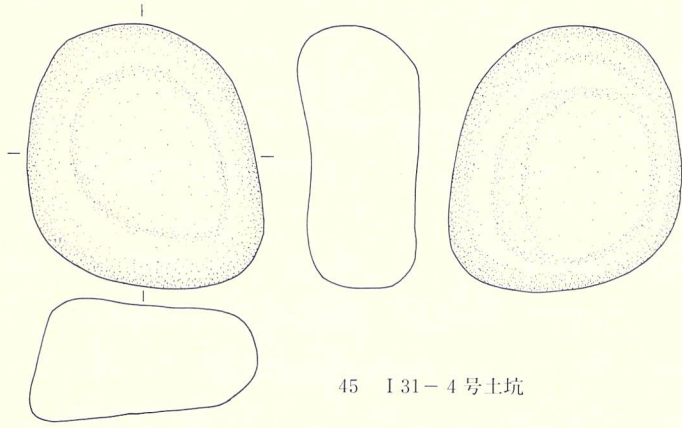
42 J 32-1 号土坑



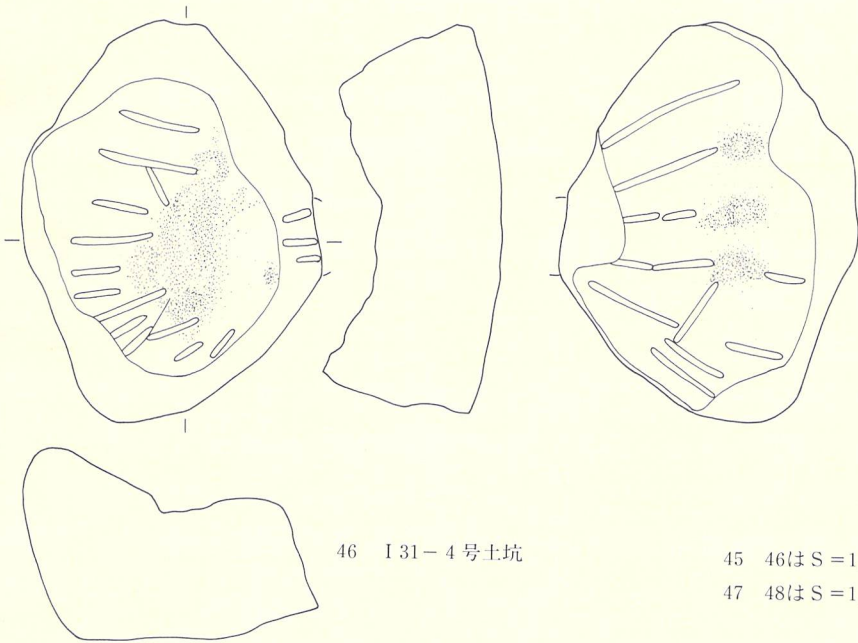
43 I 31-2 号土坑

44 J 30-1 号土坑

第21图 小土坑内出土遗物2



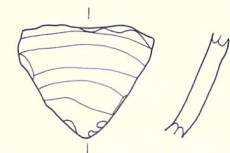
45 I 31-4 号土坑



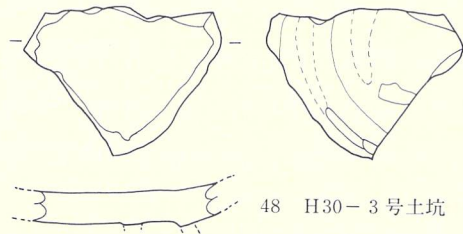
46 I 31-4 号土坑

45 46は S = 1/4

47 48は S = 1/2



47 I 32-2 号土坑



48 H30-3 号土坑

第22図 小土坑内出土遺物3

6. 焼土遺構（第23図、写真図版9）

焼土遺構は東側調査区から1基、西側調査区から3基検出されている。いずれも焼土が浅鉢状に残っており、平泉町の高玉遺跡で検出されたカマド状遺構と同様の施設と思われる。

○9 焼土遺構

本遺構は西側調査区の南寄りに位置している。検出面はⅥ層上面で、焼土の環状の広がりによって確認された。形状は平面形が楕円形で、西側は細く延びて壁の焼土を欠く。断面形は浅鉢状を呈する。形状から楕円形の部分は燃焼部、西側は焚口部と思われる。規模は燃焼部の開口部径が50×45cm、底部径が35×27cm、深さ30cmを測る。焚口部の幅は25cm、奥行きは23cmである。埋土は砂質のにぶい黄褐色土の単層で、焼土部分は明赤褐色土で堅く締まっている。煙道は確認されなかった。遺物は出土せず時期不明である。

○10 焼土遺構

本遺構は西側調査区南寄りに位置している。本遺構の西3mに○9焼土遺構が存在する。検出面はⅥ層上面である。平面形は楕円形であるが、東側を重機によって削平されている。断面形は浅鉢状を呈する。焚口部や煙道は確認されなかった。燃焼部の規模は、開口部径が67×55cm、底部径が56×50cm、深さ32cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土の単層で、炭化物を少量含む。出土遺物はなく時期不明である。

○4 焼土遺構

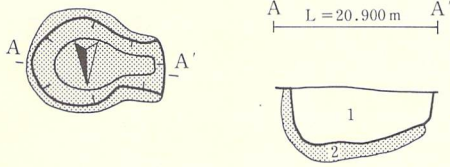
本遺構は西側調査区西寄りに位置している。検出面はⅥ層上面である。平面形はややいびつな楕円形で、断面形は皿状を呈する。焚口部や煙道は確認されなかった。燃焼部の規模は、開口部径が42×30cm、底部径が23×15cm、深さ7cmを測る。埋土は暗褐色土と赤褐色の焼土の2層で、赤褐色焼土は壁の崩落したものと思われる。本遺構も出土遺物がなく、時期は不明である。

H31 焼土遺構

本遺構は東側調査区北寄りに位置し、遺構の半分は調査区域外に続いている。検出面はⅡ層上面である。全体の形状は燃焼部が調査区域外に続いているため不明であるが、平面形は楕円形、断面は浅鉢状を呈し、南側に細長い焚口部をもつものと思われる。調査区域内の規模は、燃焼部で幅45cm、深さ6cm、焚口部の幅が10cm、奥行き30cm、深さ5cmを測る。煙道の有無は不明である。埋土はにぶい黄褐色土の単層である。なお、底部は黒褐色の縄文後期の遺物包含層内に形成されている。

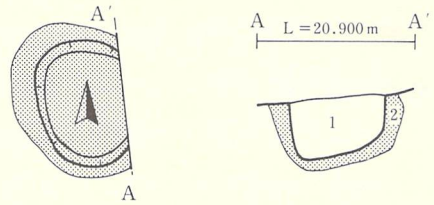
本遺構も出土遺物がなく、時期は不明である。

○9 焼土遺構



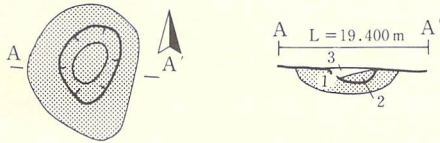
1. 10Y R4/3にふい黄褐色土 砂質 粘性・縮まりなし
2. 5 Y R5/6明赤褐色土 焼土・強く焼き縮まっている

○10 焼土遺構



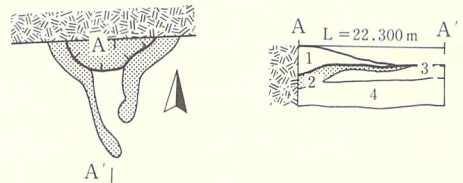
1. 10Y R4/3にふい黄褐色土 粘性なし 縮まりあり 炭化物を少量含む
2. 5 Y R4/8赤褐色土 焼土 強く焼き縮まっている

○4 焼土遺構



1. 5 Y R4/4にふい赤褐色土 焼土 強く縮まっている
2. 5 Y R5/4明赤褐色土 焼土 非常に強く縮まっている
3. 10Y R3/3暗褐色土 強く縮まっている 焼土粒を含む

○4 焼土遺構



1. 10Y R4/3にふい黄褐色土 粘性・縮まりなし
2. 5 Y R4/8赤褐色土 焼土 粘性なし 縮まりあり
3. 10Y R4/2灰黄褐色土 粘性なし 縮まりあり
4. 10Y R3/2黒褐色土 粘土質 粘性・縮まりあり 遺物を含む

第23図 焼土遺構

7. 遺構外出土遺物 (第24～36図、写真図版13～24)

遺構外から出土した遺物は縄文土器、弥生土器、土製品、陶磁器、石器類、石製品である。

(1) 土器

遺構外から出土した土器は、時期毎に大別した。

第I群……………縄文後期に属する土器

1類……………後期前葉に属する土器を一括した。

1点のみの出土で、49は入組文状の沈曲線が施文された深鉢の体部破片である。

2類……………後期中葉に属する土器を一括した。

3点の出土で50は口縁部が平行する沈線及び破線状の沈線によって区画される。51・52も平行する沈線によって区画されており51は地文が斜行縄文で52は無文である。52は口唇部に小規模な突起を有する。

3類……………後期後葉に属する土器を一括した。

53～74は、平行する沈線間あるいはその上下に、連続する短沈線によって刻目がつけられている。59・60はへら状の施文具を連続して刺突して刻みをつけたものとも考えられる。口縁部は、突起をもつもの(54)、頂部が2つあるいは3つに分かれる山形の突起をもつもの(53

・ 55 ・ 57 ・ 59 ・ 60)、細波状口縁となるもの (58)、平縁となるもの (56) などがある。69 は体部に羽状縄文が施されている。66 は刻目帯の下部に入組文が施文されているものと思われる。72 ～ 74 は入組文と刻目文が組み合わされている。59 には補修孔が穿たれている。

75 ～ 86 は貼瘤をもつ土器である。75 ・ 76 は刻目を伴う入組文に盲孔をもつ瘤がつけられている。77 ～ 79 は平行沈線間に連続して瘤がつけられているものである。80 は山形の突起下に三叉文?が施され、その下に盲孔の瘤が貼られている。81 は口縁部に 2 種類の山形突起をもち、下部に入組文が施文され、貼瘤を伴う。83 ・ 84 は山形突起状の瘤と考えられるが詳細は不明である。85 は入組文が平行沈線によって区画され、磨消縄文及び貼瘤が施されている。86 はボタン状の瘤が付けられた注口土器である。

87 ～ 96 は入組文が施された土器である。87 は載冠突起と小さな山形の突起をもつ。88 も口唇部に大きさの異なる突起をもつと思われるが、詳細は不明である。

97 は突起の下部に三角形状の沈線が施されている。98 は山形の突起に三叉状の彫り去りがなされている。99 ～ 101 は孤線状の沈線によって区画され、縄文が充填されている。100 は波状口縁、101 は突起をもつ。

102 ～ 110 は口縁部下部が平行する沈線によって区画されるものである。102 ・ 104 は山形の突起をもつ。110 は体部に羽状縄文が施されている。

第Ⅱ群……………縄文晩期に属する土器を一括した。個体数が少ないため類別はおこなわない。

111 ～ 117 は晩期初頭の土器である。111 ・ 113 は注口土器の口縁部と思われ、横位の沈線が施されている。112 ・ 117 には入組文が、115 ・ 116 には三叉文が施文されている。

118 は晩期中葉の土器で、口唇部に連続する押圧痕があり、細波状口縁となっている。119 は平行する沈線が施され、ミガキがかけられており、晩期後葉の土器と思われる。

第Ⅲ群……………粗製土器を一括した。

120 ～ 131 は単節の斜行縄文が、132 ～ 137 は羽状縄文がそれぞれ施されている。138 ～ 140 は縦位の櫛歯条線文が施文されている。139 と 140 は同一個体で、櫛歯条線文が不規則な曲線として描かれている。141 ～ 144 は無文の土器である。144 は形状から縄文後期後葉の注口土器と思われる。

第Ⅳ群……………弥生時代の土器を一括した。

西側調査区から 3 点が出土している。147 は口唇部に押圧痕があり細波状口縁となっている。口縁部には上下方向から角棒状の器具によって交互に刺突がなされている。148 は口縁部に粘土帯を貼り付け、その下方を細波状に調整している。149 は細い平行沈線によって同心円文が施されており、円田式の土器と思われる。

(2)土製品

土製品としては2点のミニチュア土器が出土している。145は浅鉢状のミニチュア土器で、文様は施されていない。146は壺型の土器のミニチュアで横位の沈線によって文様が描かれている。

(3)土師器

細片で少量出土している。実測に耐え得るものは150のみである。150はロクロ不使用の甕の底部破片である。調整は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。

(4)かわらけ

かわらけも細片で少量の出土である。151はロクロづくりの小型のかわらけで、底部に糸切り痕がみられる。口径は8.5cm、器高は1.5cmである。152・153は手づくねのかわらけで、152は2分の1、153は4分の1程度の残りである。152は口径が10cm、器高は1.8cmのやや小型のかわらけで、153は口径13.5cm(推定)、器高が3cmとやや大型である。

(5)陶磁器

154～156は中国産の白磁で、器種・製作時期とも不明である。157は美濃大窯Ⅱ期bの灰釉皿の口縁部破片である。15世紀末から16世紀初頭のものと考えられる。158は志野の菊の花弁状の口縁部をもつ皿の破片で、長石釉がかけられ、大窯Ⅴ期に属す。15世紀末から16世紀初頭のものである。159は須恵系陶器の壺の底部付近の破片と考えられる。中世のもので産地は不明である。160は唐津の茶碗の底部破片で、17世紀以降のものと考えられる。161は伊万里の茶碗の底部破片で、近世以降のものである。162は瀬戸の花瓶の頸部破片で18世紀末以降のものと考えられる。

(6)石器

出土した多量の石器のうち、形の判明する定形的な剝片石器類、磨製石器類はすべて図示したが、磨石、フレーク等は紙数の関係で省略したものもある。以下に記述する各石器はすべてグリッドより出土したもので、当然いずれかの時代・時期に属するものであるが、出土状況からは時期を特定することができないので、すべて器種ごとに一括して説明する。

石鏃

出土点数は11点である。163～166は凹基無茎鏃で、抉りは比較的浅く、身部は二等辺三角形形状を示す。長さはすべて2.6cm程で、石質は硬質泥岩、珪長質細粒凝灰岩などである。167～171は凸基有茎鏃である。167は中茎がやや不明瞭で一部欠損している。167～170は身部がほぼ正三角形に近い形態をとる。長さは1.9cm程である。171は他のものに比べ、長さ4.6cmと細長く、小型の尖頭器の可能性もある。石質は珪質泥岩、チャート、凝灰質硬質泥岩である。172は平基無茎鏃である。身部先端が欠損しており、残存長は2.6cm程で、石質は硬質泥岩である。

173は尖基鏃である。他の石鏃に比べ厚みがあり、尖頭器の可能性もある。石質は珩長質細粒凝灰岩である。

石匙

石匙は全部で12点出土している。174～181は縦長石匙である。縦長石匙の抉入は比較的浅く、ほとんどが片面の全周に調整剥離をもち、横断面はかまぼこ状を呈する。石質は凝灰質硬質泥岩、硬質泥岩、珩質泥岩、珩長質細粒凝灰岩である。182～185は横長の石匙である。すべてつまみは刃部に対して平行につけられている。刃部はほとんどのものが片面のみを剥離調整しているが、183は裏面にも剥離調整がみられる。石質は珩長質細粒凝灰岩、珩質泥岩である。

石錐

1点のみの出土である。186は身部が明瞭に作り出されており、太さは5mmでほぼ一定である。つまみを含めた全長は5.3cmで、石質は赤色凝灰岩である。

石篋

187・188の2点の出土である。両方とも台形状を呈し、両面に調整剥離がみられる。石質は187が粘板岩、188が凝灰質硬質泥岩である。

不定形石器

I類(189～199): 一次剥離の先端部を中心に剥離調整が施されているもので、彫器的あるいは穿孔具的な機能が考えられるもの。ほとんどが片面のみの調整剥離であるが、190・191・192・194・195は裏面にも調整剥離をもち、石質は凝灰質硬質泥岩がもっとも多く、他に珩長質細粒凝灰岩、珩質泥岩、チャート、粘板岩などがある。

II類(200～223): 剥片の周辺部に丁寧な剥離調整を行い、円形・方形あるいは三角形等に整形したもので、搔器・削器としての機能を有するもの。剥離調整は、両面の全周にあるもの、片面の両側面あるいは一方の先端部にあるものなど様々である。量的には先端部に刃部のあるエンドスクレーパー的なものと、側面に刃部のあるサイドスクレーパー的なものが多い。なお、221・222・223については、打製石斧的に土掘り具として使用された可能性もある。石質は凝灰質硬質泥岩・珩長質細粒凝灰岩・珩質泥岩・粘板岩・ホルンフェルス等である。

叩石

1点のみの出土である。224は柱状の河原石の先端部を使用し、大きな力で叩いたもので、使用面は凹凸のはげしい剥離面となっている。長さ13.3cm、重さ640kgほどで、石質は両輝石安山岩である。

磨製石斧

225は長さが10.5cm、幅4.1cmで、風化が著しい。石質はホルンフェルスである。226は中央部付近から折れていたものを接合したもので、長さ11.8cm、幅5.2cmで、石質は硬砂岩である。

敲石

227 は円礫の一部を打ち欠き、凸面を使用しているが、打ち欠いた部分については、自然のものか人工的に手を加えたものかは不明である。

磨石

228 は亜角礫の片面に使用痕が認められるほか、他の面に敲打痕が見られる。229～233・237 は棒状の亜角礫を用い、その稜部を使用している。234～236 はやや偏平な円礫の両面を使用している。238・239 は球状をなす円礫の全面をまんべんなく使用している。石質は228 が凝灰角礫岩、238 が安山岩、ほかはすべて両輝石安山岩である。

石皿

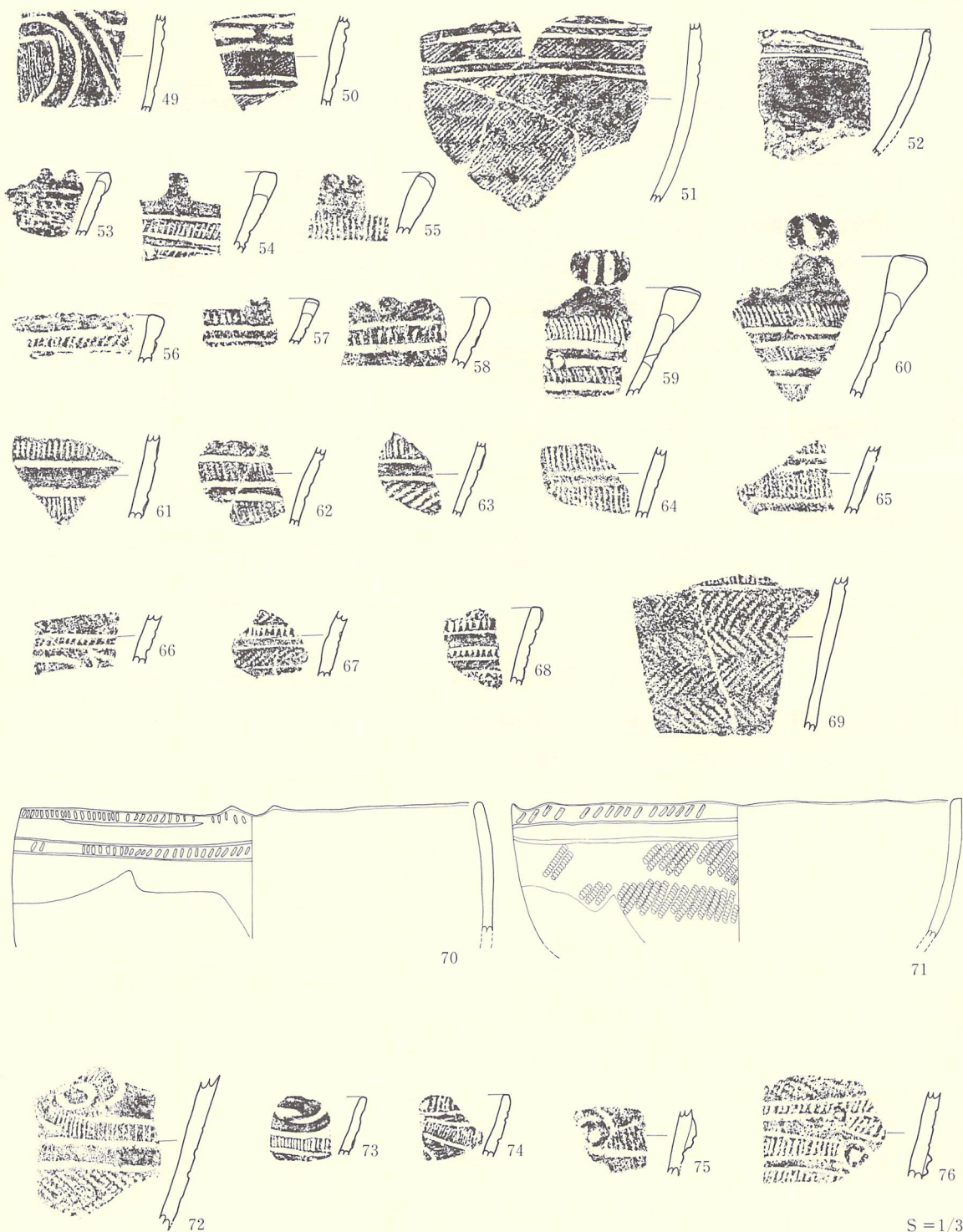
2点の出土で両方とも縁辺の作り出しはなく、使用面は平坦ないし僅かに凹面状になっている。石質はともに両輝石安山岩である。

砥石

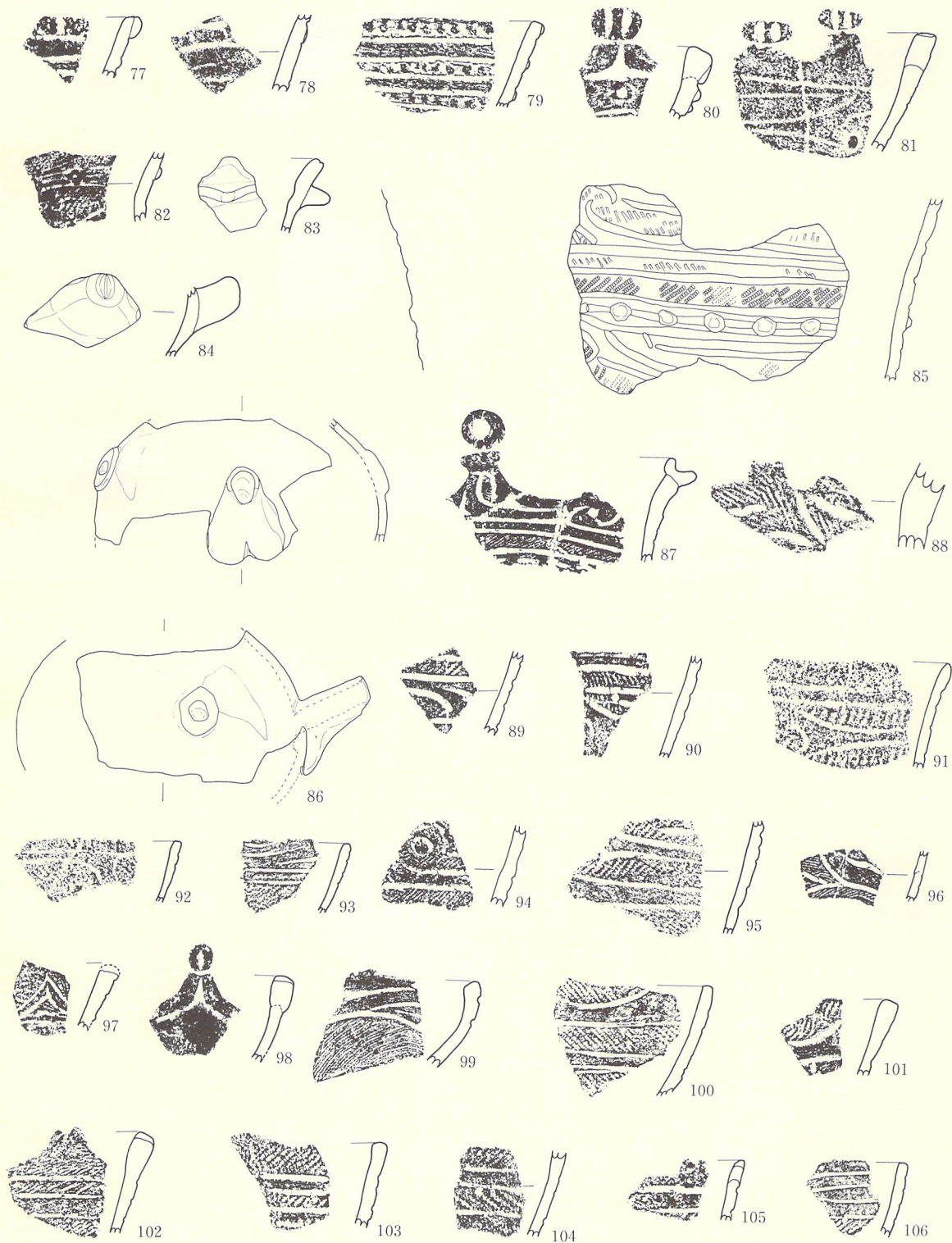
243・244 はともに欠損部分があるが、242 と同じように直方体をなしていたと思われる。使用面は非常に滑沢で細かく小さな線状痕を伴っている。石質は流紋岩質細粒凝灰岩である。

(7)石製品

245・246 は有孔石製品で、錐状の器具で孔があげられている。欠損しており、用途は不明である。247 は岩版である。三角形の珪長質細粒凝灰岩に深く文様が刻まれている。文様は左右対称で、中央部に楕円形が描かれ、S字状の文様がまわりにみられる。裏面も同様の文様である。

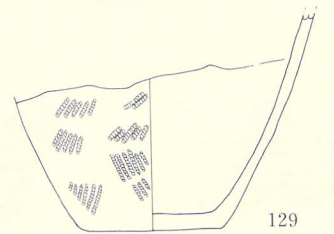
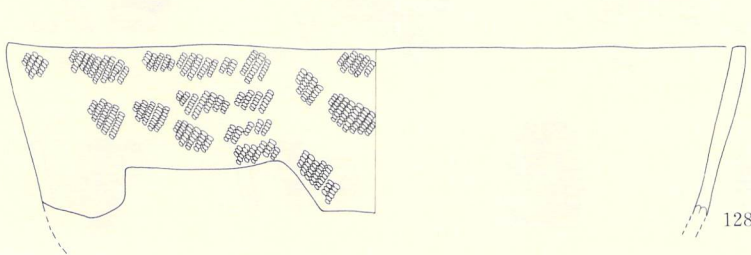
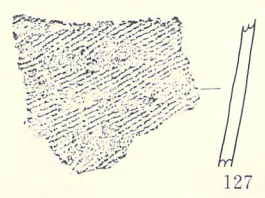
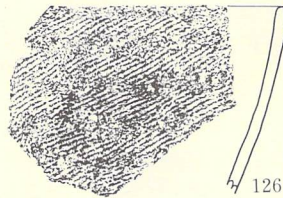
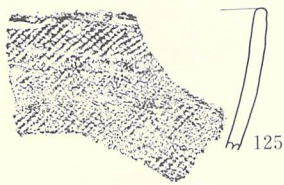
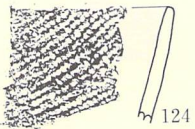
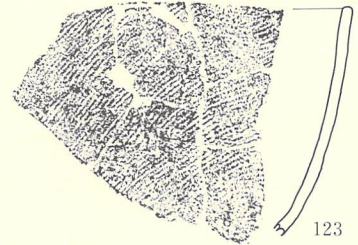
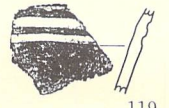
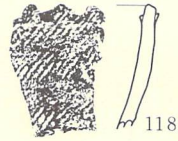
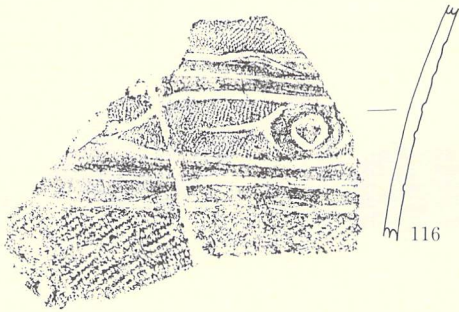
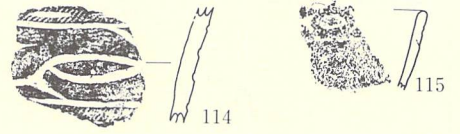
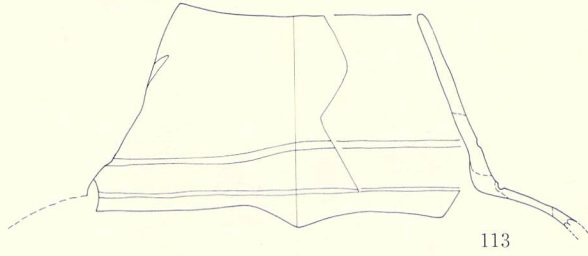
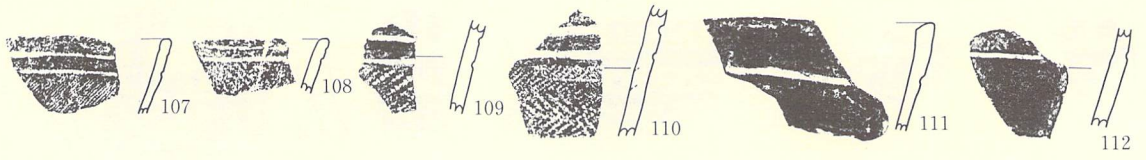


第24図 遺構外出土遺物（土器1）



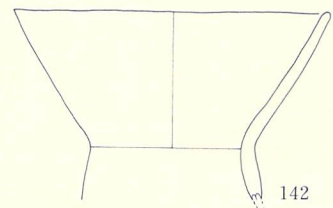
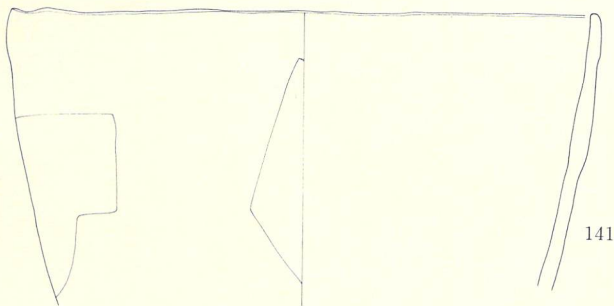
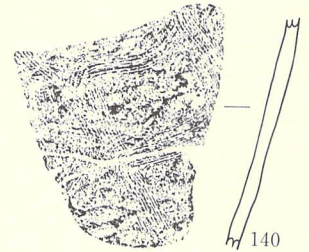
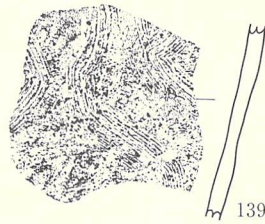
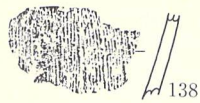
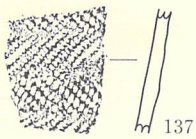
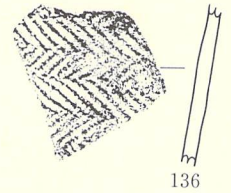
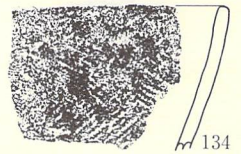
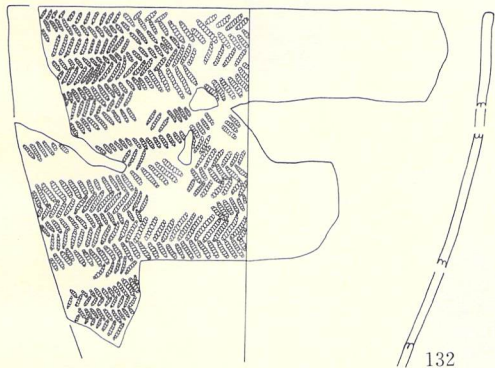
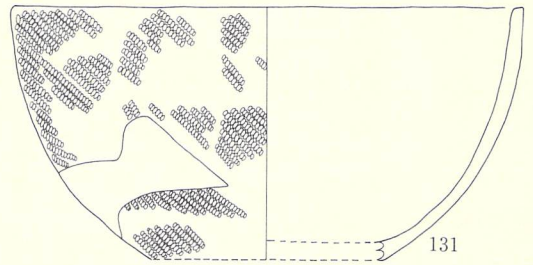
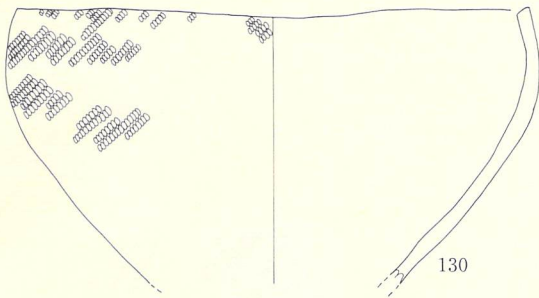
第25図 遺構外出土遺物（土器2）

S = 1/3



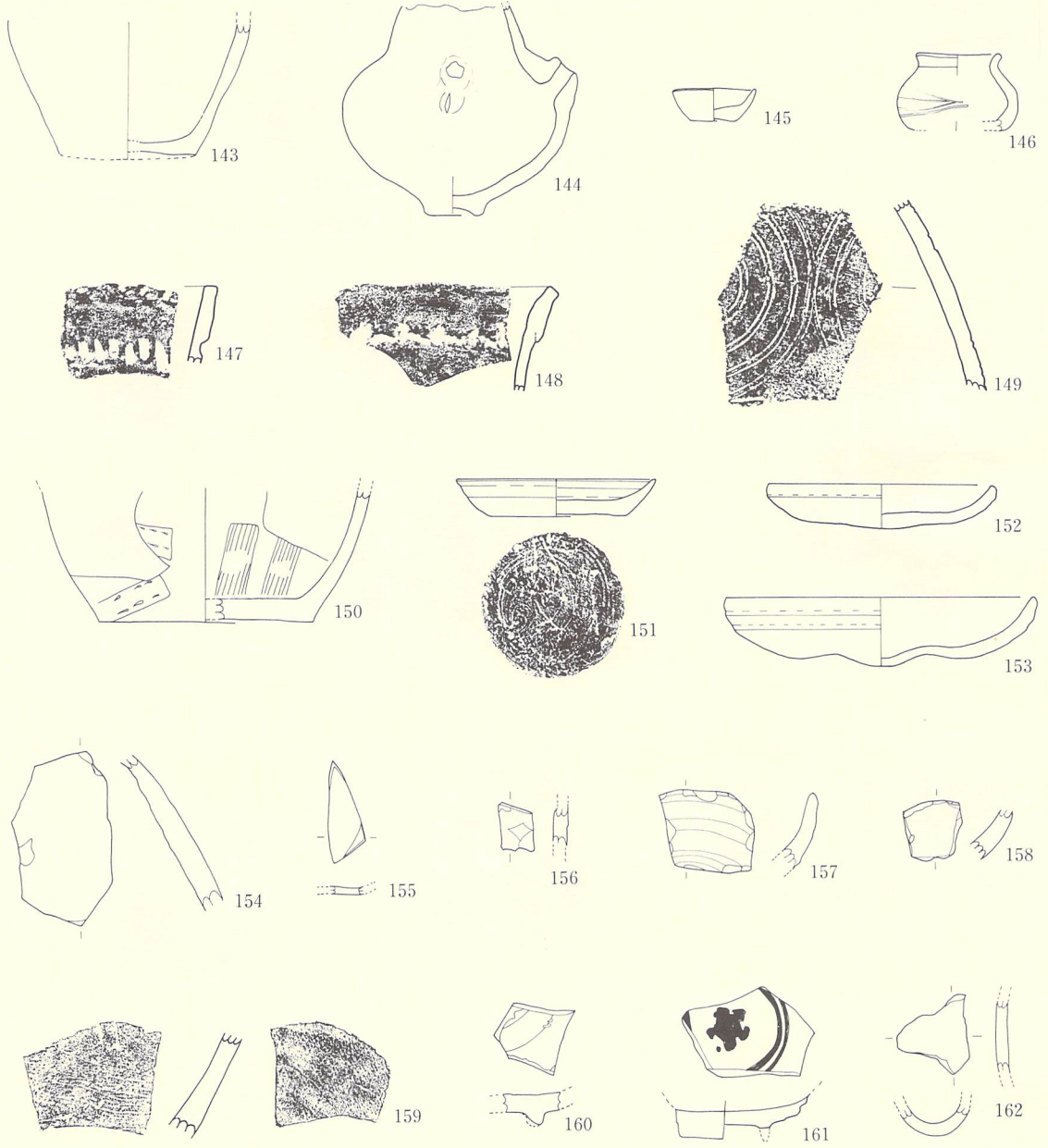
第26図 遺構外出土遺物(土器3)

S = 1/3



132はS = 1/6
他はS = 1/3

第27図 遺構外出土遺物（土器4）



S = 1/3

第28图 遺構外出土遺物（土器5・陶磁器）



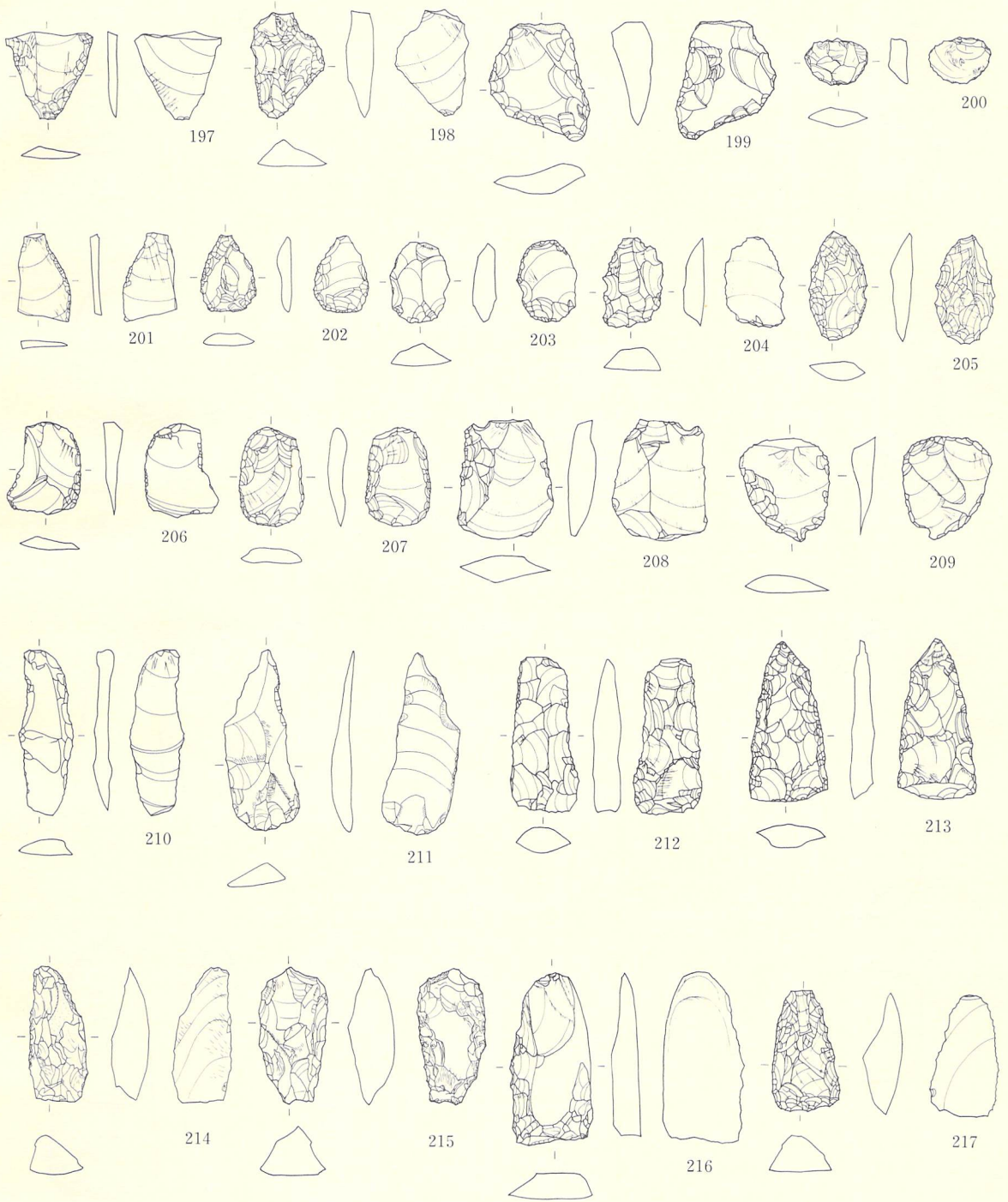
第29图 遺構外出土遺物（石器1）

S = 1/2



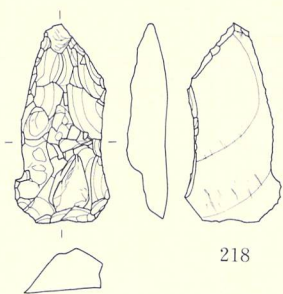
S = 1/2

第30图 遺構外出土遺物 (石器 2)

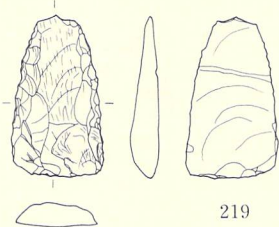


S = 1/3

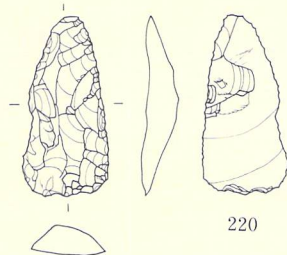
第31図 遺構外出土遺物 (石器3)



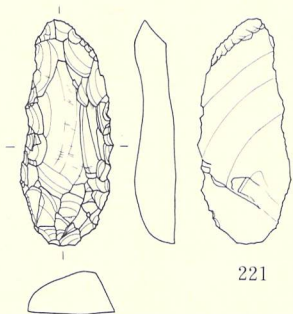
218



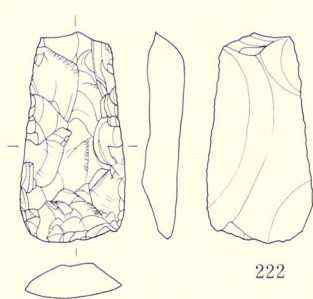
219



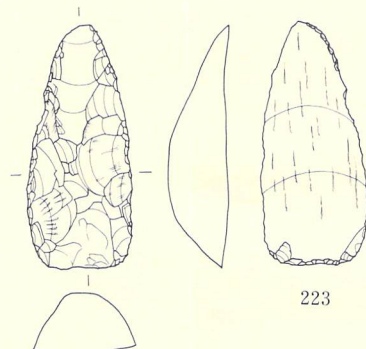
220



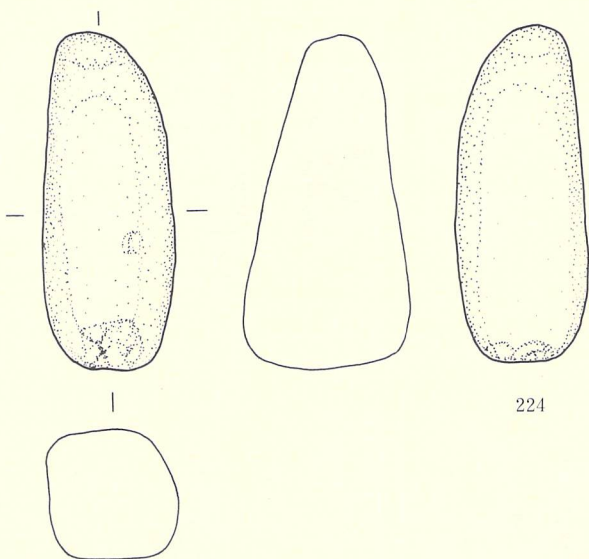
221



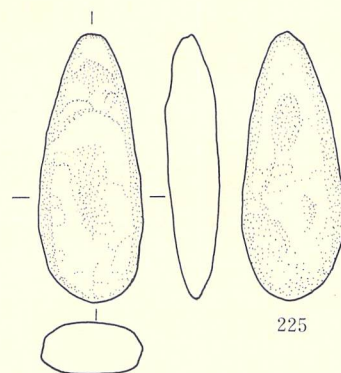
222



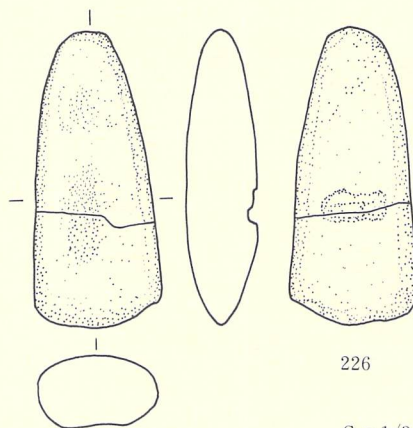
223



224



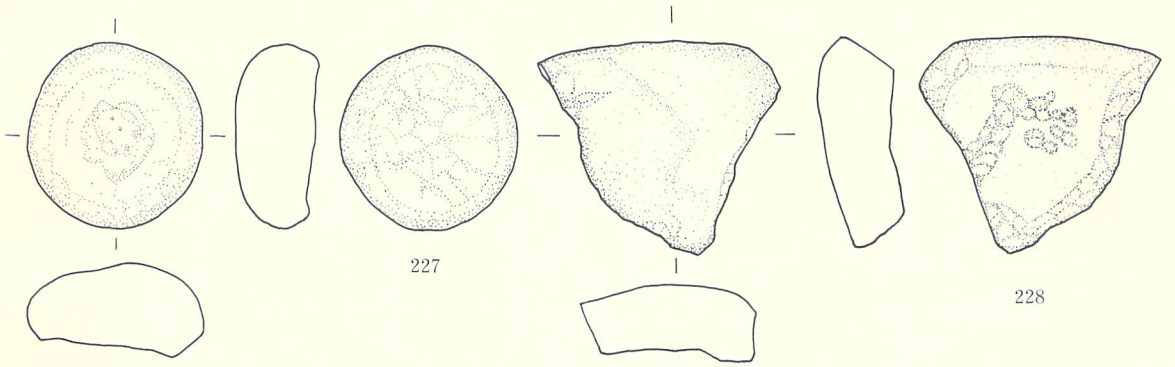
225



226

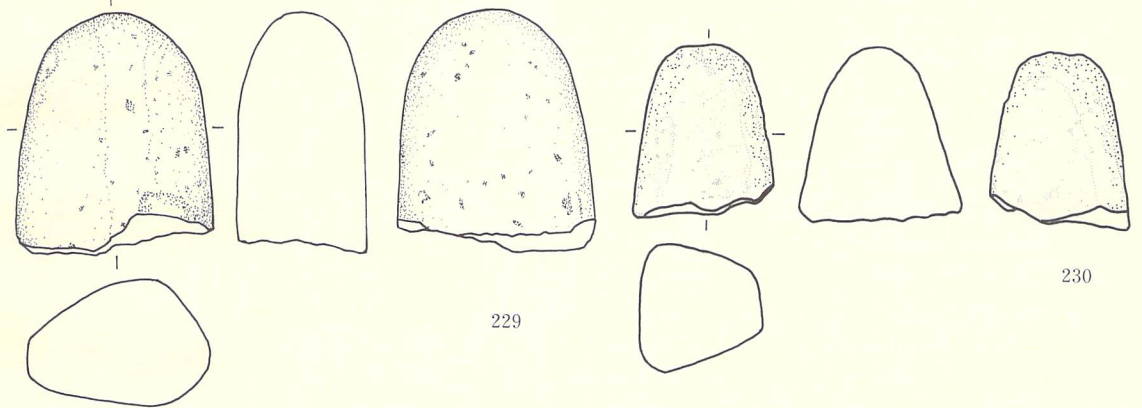
S = 1/3

第32図 遺構外出土遺物（石器4）



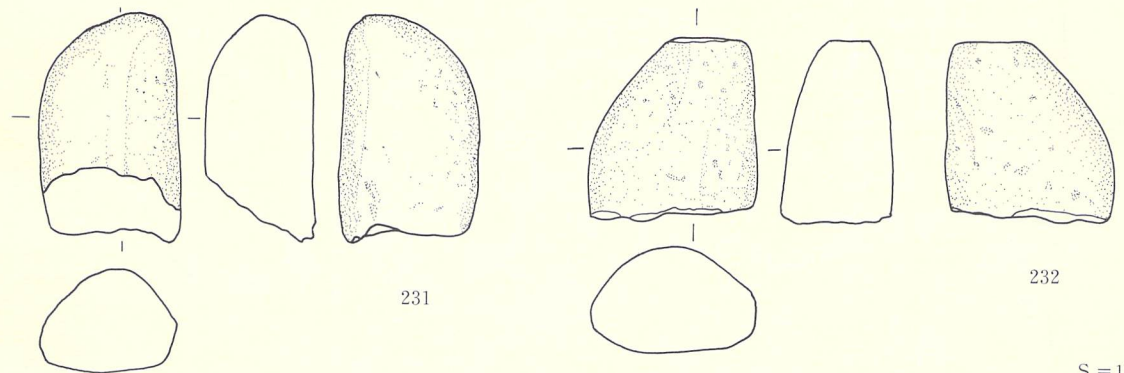
227

228



229

230

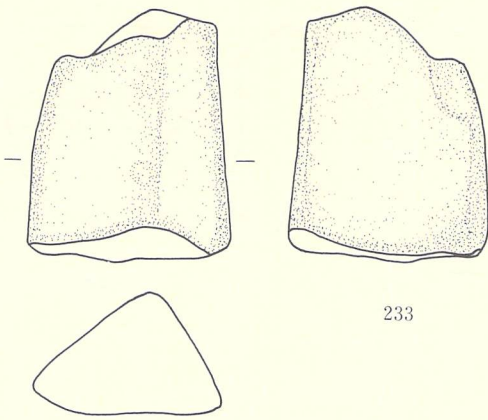


231

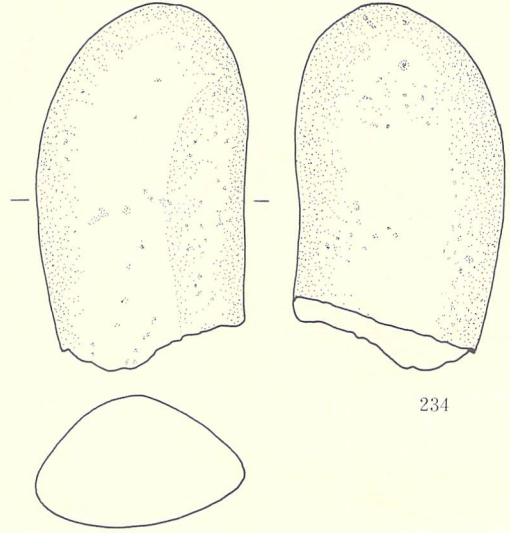
232

S = 1/3

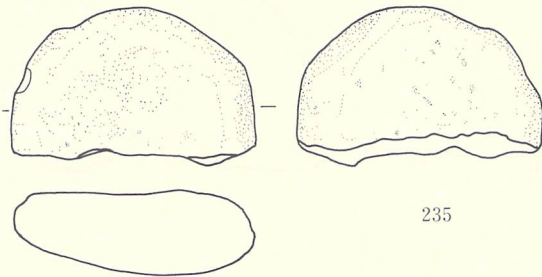
第33図 遺構外出土遺物（石器5）



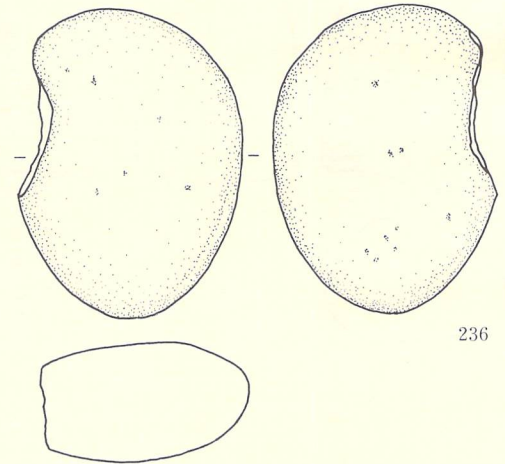
233



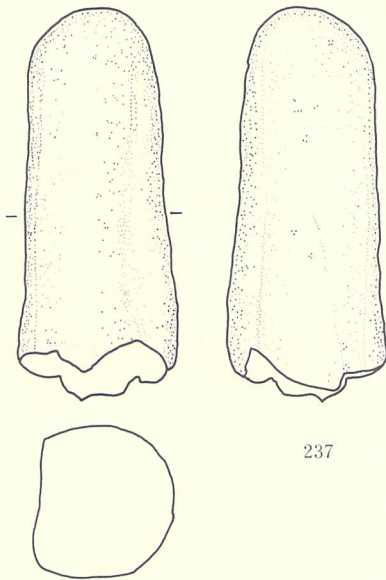
234



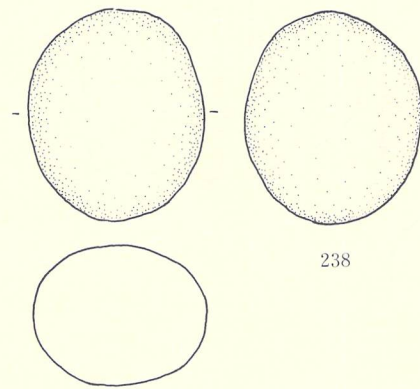
235



236



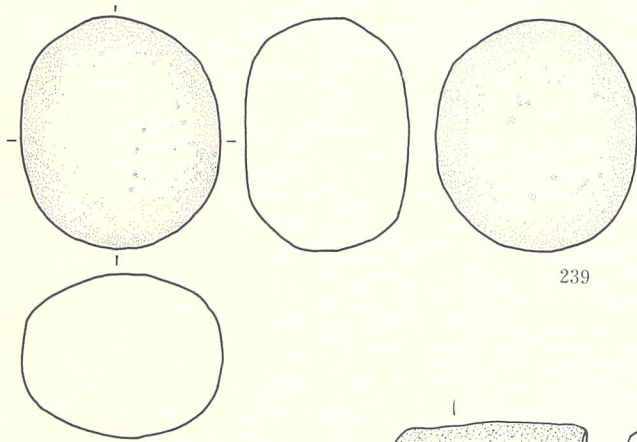
237



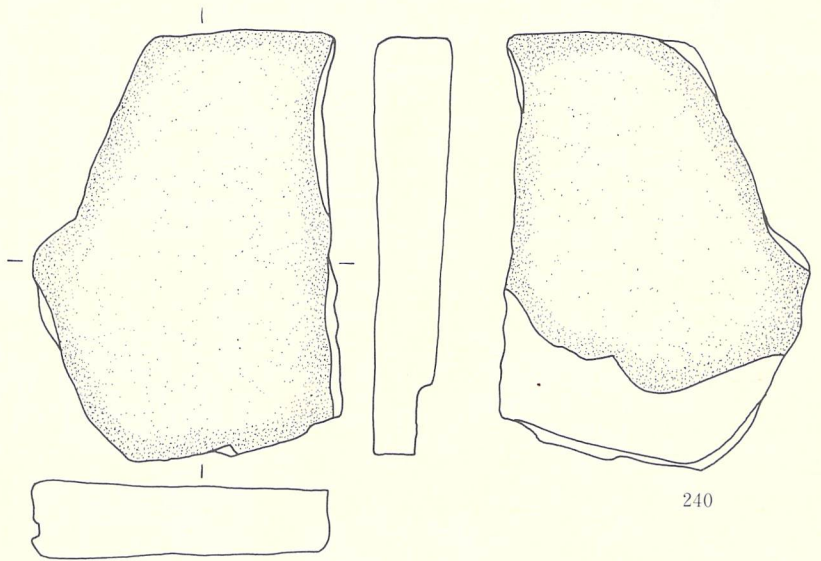
238

S = 1/3

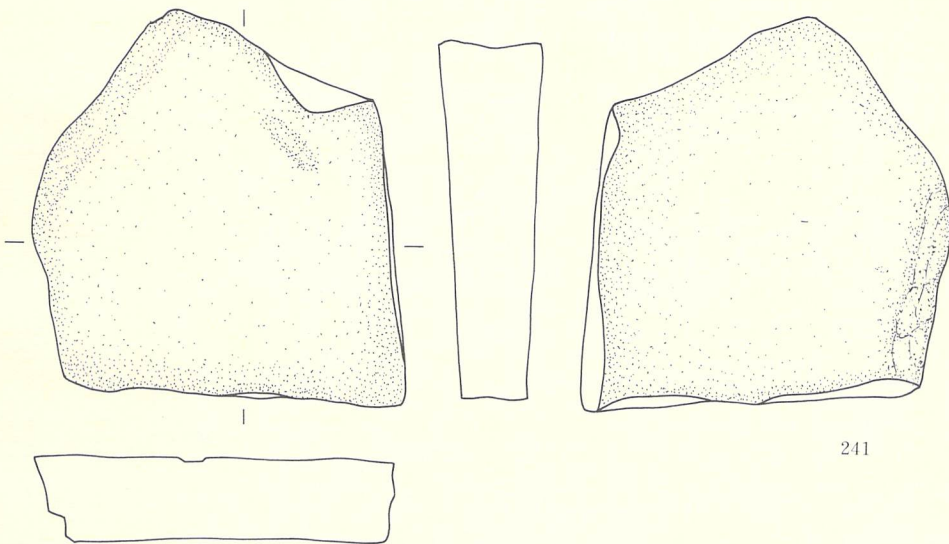
第34図 遺構外出土遺物（石器6）



239



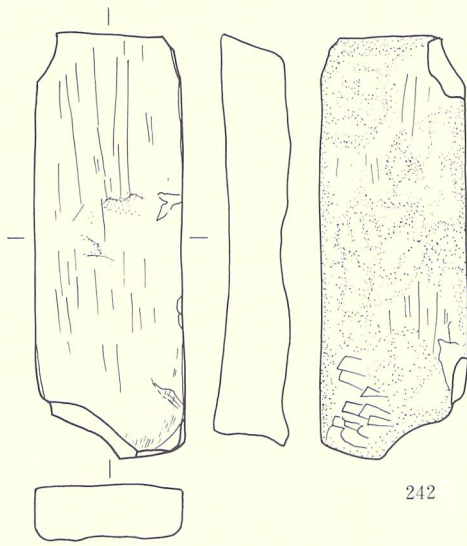
240



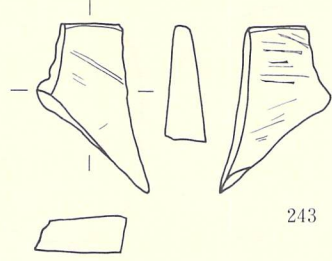
241

S=1/3

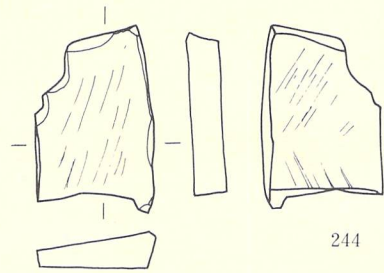
第35図 遺構外出土遺物（石器7）



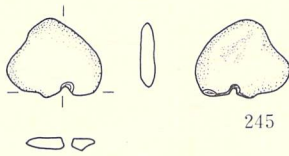
242



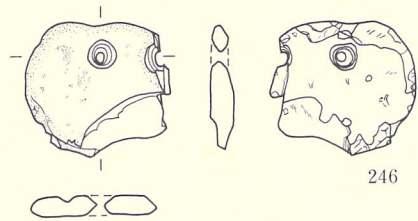
243



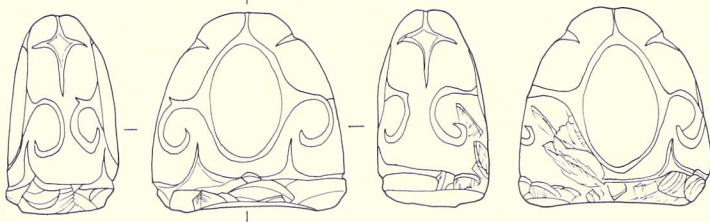
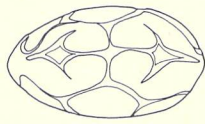
244



245



246



247

242~244は S = 1/3

245~247は S = 1/2

第36図 遺構外出土遺物 (石器 8・石製品)

V まとめと考察

1. 遺跡の立地と遺構

「泉屋」の地名は「吾妻鏡」にも見られる古い地名で、以前より陶磁器やかかわらけなどが表採される周知の遺跡として知られていた所である。今回の発掘場所の北 500 m 付近には藤原 3 代秀衡の私邸といわれる伽羅之御所跡、西 400 m 付近には志羅山遺跡がある。また泉屋遺跡についても平成元年から平泉町教育委員会の調査が行われ、12 世紀や中世の遺物等が出土している。そこで今回の調査においては、当初 12 世紀の遺構及び遺物がかなり検出されることが予想された。しかし結果的には、検出された遺構で 12 世紀のものは井戸跡 1 基のみであり、遺物も少量であった。これは本調査区の立地場所と大いにかかわりがあると思われる。今回の調査及び平成 2 年の平泉町教育委員会の太田川堤防埋蔵文化財内容確認調査において、本遺跡東端部付近で太田川の旧河道が検出されている。このことは現在調査区付近でほぼ東西にまっすぐ流れている太田川が、河川改修以前は調査区東端部付近で大きく北東に流れを変えていたものと推定される。太田川の南側も地山面が現河道に向かって落ち込むことから、今回の調査区は太田川左岸のごく縁辺部に位置していたと推定される。また東北本線の西側は東側より 1～3 m ほど低くなり、川が蛇行していた時期もある。おそらく遺跡の主体部は今回の調査区よりもっと平泉駅に近い地点にあると考えられる。現に平成 2 年の町の調査では、本調査区の北 70 m の地点で多数のかかわらけが出土している。

したがって唯一 12 世紀の遺構と推定される井戸跡付近が遺跡の南端部と考えられる。井戸跡は深さが 2 m 以上ということで土坑と区別した。井戸枠を有しておらず、断面形はロート状を呈する。開口部は不整な楕円形で、検出面から 70 cm 下がった地点から底部までは方形となる。井戸内から出土した椀は器形や漆の塗りなどが柳之御所跡から出土した椀と非常に似通っている。おそらくこの遺構に関連する建物跡などが調査区の北側に存在するものと思われる。

時期不明の掘立柱建物跡については、検出規模は桁行 5 間、梁行 1 間の東西棟であるが、さらに北側調査区域外に続く建物であることも考えられる。また、遺構の項でも書いたが、西側の 2 基の柱穴の規模が他の柱穴に比べて小さいことから、西側に庇などの付属の施設をもつ建物である可能性もある。

土坑類については縄文時代に属するもの、近現代に属すると思われるもの、時期不明のものなどさまざまであり、東側調査区の土坑が集中して検出された地点には昭和初期まで建物があったということで、土坑の性格を特定することは難しい。ただ柱穴と思われる柱痕跡をもつものについては北側の調査区域外を調査することで建物跡になることも考えられる。

焼土遺構については、東側調査区のものには縄文後期の土器を包含する黒褐色土の中から検出されており、黒褐色土を埋土とし、壁面があまり立ち上がらない形状の縄文時代の住居跡の炉とも考えられるが、調査区内での住居跡のプランの確認はできなかった。また柳之御所跡からも燃焼部と焚口部・煙道とで構成される地下式あるいは半地下式の焼土遺構が検出されており時期は明確にできないが、近世の遺構と推定している。今回の調査で検出された4基の焼土遺構のうち焚口部が確認されたものはO 9 焼土遺構とH 31 焼土遺構の2基で、煙道を確認できたものはなかったが(H 31 焼土遺構については調査区域外に続くため不明)、地面を円形に近い形に掘り下げて作っている点などから同様のものと思われる。

溝跡については太田川に向かって続いており、何らかの排水施設であることは間違いないが、遺物の出土がなく、時期については不明である。またK 24 - 1号土坑にも溝状の掘り込みがみられるが土坑自体の埋土が砂質でやわらかく比較的新しいものと思われる。

2. 遺物

出土した遺物は土器、石器、石製品、土師器、かわらけ、陶磁器、椀である。

土器はほとんどが縄文後期後葉に属するもので次のような特徴をもつ。器種は深鉢、浅鉢、注口土器、台付土器の4種で、体部がふくらみ、頸部でくびれて口縁部が外傾するものと、くびれをもたずそのまま口縁部にいたるものがみられる。口縁部の形態は、波状口縁、平口縁、突起付口縁、突起付平口縁などがある。文様の特徴としては貼瘤が施されるもの、入組文、刻目文、三叉文が施文されるもの、平行沈線間に縄文が充填されるもの、弧線によって区画され縄文が充填されるものなどがみられる。地文には単節の斜行縄文のほかに羽状縄文、櫛歯条線文などが施文されている。これらは宮戸Ⅲ式に比定されるものと思われる。

弥生土器については3点のみの出土で詳細は不明であるが、県内の出土例では水沢市佐倉河常盤広町遺跡出土の常盤式土器と同時期で、弥生時代後期のものと思われる。

陶磁器は、予想された12世紀のものは出土せず、国産のものは15世紀から16世紀にかけてのものが主体であり、中国産の白磁は時期の特定ができなかった。遺構との関連も不明である。石器は石鏃、石匙、石錐、石籠、不定形石器、叩石、磨製石斧、敲石、磨石、石皿、砥石が出土している。石鏃は凹基無茎鏃、凸基有茎鏃、平基無茎鏃、尖基鏃が出土し、凹基無茎鏃と凸基有茎鏃の割合が高い。石匙は縦型と横型がみられ、縦型8点、横型4点と縦型が多くなっている。縦型石匙のつまみ部分の挟入は比較的浅い。不定形石器で比較的多いのは形状がほぼ左右対称で上方が狭く、下方が広がるタイプである。断面形は三角形で稜がかなり高く、調整は片面のみである。長さは6~9cmを測る。石質は凝灰質硬質泥岩と珪長質細粒凝灰岩が多く、風化が進んでいるものもみられる。石籠、打製石斧に似るが用途等是不明である。

おわりに

今回の調査において本調査区は縄文時代と12世紀藤原氏時代の複合遺跡であることが分かった。縄文時代の住居跡は検出されなかったが、土器を包含する黒褐色土が調査区北側に続くことから、集落跡の存在が予想される。また12世紀の遺構についても、泉屋遺跡西側に隣接する志羅山遺跡から多くの遺構や遺物が出土しており、今後広範な調査を行えば検出されると思われる。

《引用・参考文献》

岩手県（1971）：土地分類基本調査『一関』

岩手県教育委員会（1980）：『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告書Ⅴ』岩手県文化財報告書第54集

岩手県埋蔵文化財センター（1985）：『高玉遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第93集

後藤勝彦（1962）：『陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について』『考古学雑誌』第48巻1月号 日本考古学協会

斎藤良治（1968）：『陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について』『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史研究会

高柳圭一（1988）：『仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向』『古代』第85号 早稲田大学考古学会

平泉町教育委員会（1990）：『柳之御所跡発掘調査報告書－第24次・25次調査概報－』岩手県平泉町文化財調査報告書第19集

平泉町教育委員会（1991）：『柳之御所跡発掘調査報告書－第27次・29次調査概報－』岩手県平泉町文化財調査報告書第24集

平泉町教育委員会（1991）：『平泉遺跡群発掘調査報告書－泉屋遺跡第2次・泉屋遺跡第3次・伽羅之御所第4次・毛越Ⅱ遺跡第2次発掘調査－』岩手県平泉町文化財調査報告書第23集

平泉町教育委員会（1990）：『平泉遺跡群発掘調査報告書－志羅山遺跡第9次・国衡館第2次・伽羅之御所第3次・泉屋遺跡第1次発掘調査－』岩手県平泉町文化財調査報告書第21集

平泉町教育委員会（1990）：『泉屋遺跡第4次発掘調査概報－太田川堤防埋蔵文化財内容確認調査－』岩手県平泉町文化財調査報告書第22集

平泉郷土館（1991）：『平泉の埋蔵文化財』平泉郷土館図録第Ⅳ冊

福島県立博物館（1988）：『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告第17集

楨要照（1968）：『陸前宮戸島に於ける縄文後期末遺物の研究』『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史研究会

水沢市史編纂委員会（1974）：『水沢市史1 原始－古代』

図版番号	地 点・層 位	器種	部 位	文 様 の 特 徴	分 類	写真図版
12-6	J 24-1号土坑埋土	深鉢	体 部	無文	第Ⅲ群	10-6
20-12	J 25-1号土坑埋土	深鉢	口縁部	羽状縄文	第Ⅲ群	10-12
20-13	H 30-3号土坑埋土	深鉢	体 部	羽状縄文	第Ⅲ群	10-13
20-14	H 30-3号土坑埋土	深鉢	体 部	斜行縄文	第Ⅲ群	10-14
20-15	H 30-4号土坑埋土	浅鉢	口縁部	三叉文	第1群3類	10-15
20-16	H 30-4号土坑埋土	深鉢	口縁部	平行沈線 破線状沈線	第1群3類	10-16
20-17	H 30-4号土坑埋土	深鉢	口縁部	平行沈線 突起	第1群3類	10-17
20-18	H 30-4号土坑埋土	深鉢	口縁部	斜行縄文	第Ⅲ群	10-18
20-19	H 31-4号土坑埋土	深鉢	体 部	平行沈線 刻目文 斜行縄文	第1群3類	11-19
20-20	H 32-2号土坑埋土	深鉢	口縁部	沈線 刻目文	第1群3類	11-20
20-21	H 32-3号土坑埋土	深鉢	口縁部	斜行縄文	第Ⅲ群	11-21
20-22	H 33-1号土坑埋土	深鉢	体 部	無文	第Ⅲ群	11-22
20-23	H 33-4号土坑埋土	深鉢	底 部	無文	第Ⅲ群	11-23
20-24	I 30-1号土坑埋土	深鉢	体 部	三叉文	第1群3類	11-24
20-25	I 30-1号土坑埋土	深鉢	体 部	平行沈線	第1群3類	11-25
20-26	I 30-1号土坑埋土	深鉢	体 部	斜行縄文	第Ⅲ群	11-26
20-27	I 30-1号土坑埋土	深鉢	体 部	羽状縄文	第Ⅲ群	11-27
20-28	I 32-1号土坑埋土	深鉢	口縁部	平行沈線 磨消縄文	第1群3類	11-28
20-29	I 32-1号土坑埋土	深鉢	体 部	破線状沈線 沈線 斜行縄文	第Ⅱ群	11-29
20-30	I 32-1号土坑埋土	注口	注口部	無文	第Ⅲ群	11-30
20-31	I 32-1号土坑埋土	台付	台 部	無文	第Ⅲ群	11-31
20-32	I 32-2号土坑埋土	深鉢	口縁部	斜行縄文	第Ⅲ群	11-32
20-33	I 32-4号土坑埋土	深鉢	体 部	羽状縄文	第Ⅲ群	11-33
24-49	H 31区IV層	深鉢	体 部	入組文状沈線	第1群1類	13-49
24-50	H 32区IV層	深鉢	体 部	平行沈線 磨消縄文 破線状沈線	第1群2類	13-50
24-51	H 31区IV層	深鉢	体 部	平行沈線 斜行縄文	第1群2類	13-51
24-52	西側調査区出土地不明	深鉢	口縁部	平行沈線 小突起	第1群2類	13-52
24-53	H 30区V層	深鉢	口縁部	平行沈線 刻目文 突起	第1群3類	13-53
24-54	H 31区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 刻目文 突起	第1群3類	13-54
24-55	H 31区IV層	深鉢	口縁部	刻目文 沈線 突起	第1群3類	13-55
24-56	H 33区V層	深鉢	口縁部	平行沈線 刻目文	第1群3類	13-56
24-57	H 32区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 刻目文 突起	第1群3類	13-57
24-58	H 31区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 刻目文 細波状口縁	第1群3類	13-58
24-59	H 31区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 刻目文 突起 補修孔	第1群3類	13-59
24-60	H 31区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 刻目文 突起	第1群3類	13-60
24-61	H 31区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 刻目文	第1群3類	13-61
24-62	H 32区IV層	深鉢	体 部	平行沈線刻目文	第1群3類	13-62
24-63	H 31区IV層	深鉢	体 部	平行沈線 刻目文 斜行縄文	第1群3類	13-63
24-64	H 31区IV層	深鉢	体 部	平行沈線 刻目文	第1群3類	13-64
24-65	H 31区IV層	深鉢	体 部	平行沈線 刻目文64と同一個体	第1群3類	13-65
24-66	H 33区V層	深鉢	体 部	平行沈線 刻目文 入組文	第1群3類	13-66
24-67	出土地不明	深鉢	体 部	平行沈線 刻目文 充填縄文	第1群3類	13-67
24-68	H 31区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 刻目文	第1群3類	13-68
24-69	H 32区V層	深鉢	体 部	沈線 刻目文 羽状縄文	第1群3類	13-69
24-70	H 31区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 刻目文	第1群3類	13-70
24-71	H 31区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 刻目文 斜行縄文	第1群3類	13-71
24-72	出土地不明	深鉢	体 部	平行沈線 入組文 刻目文 斜行縄文	第1群3類	14-72
24-73	H 31区IV層	深鉢	口縁部	区画沈線 刻目文	第1群3類	14-73

表3 土器一覧表 (1)

図版番号	地 点・層 位	器種	部 位	文 様 の 特 徴	分 類	写真図版
24-74	H 32 区V層	深鉢	口縁部	区画沈線 刻目文	第1群3類	14-74
24-75	H 32 区IV層	深鉢	体部	貼瘤 入組文 刻目文	第1群3類	14-75
24-76	H 31 区IV層	深鉢	体部	貼瘤 平行沈線 刻目文	第1群3類	14-76
25-77	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 貼瘤	第1群3類	14-77
25-78	中央調査区Ⅲ層	深鉢	体部	平行沈線 貼瘤	第1群3類	14-78
25-79	H 31-3号土坑埋土	深鉢	口縁部	平行沈線 貼瘤	第1群3類	14-79
25-80	中央調査区Ⅲ層	深鉢	口縁部	貼瘤 三叉文 突起	第1群3類	14-80
25-81	H 32 区V層	深鉢	口縁部	貼瘤 入組文 突起	第1群3類	14-81
25-82	H 31 区IV層	深鉢	体部	平行沈線 貼瘤 斜行縄文	第1群3類	14-82
25-83	H 30 区V層	深鉢	口縁部	貼瘤? 突起	第1群3類	14-83
25-84	H 31 区IV層	壺	体部	貼瘤? 無文	第1群3類	14-84
25-85	H 31 区IV層	深鉢	体部	平行沈線 貼瘤 入組文 充填縄文 刻目文	第1群3類	14-85
25-86	H 31 区IV層	注口	体・注口部	貼瘤	第1群3類	14-86
25-87	I 31 区IV層	深鉢	口縁部	載冠突起 入組文 平行沈線 磨消縄文	第1群3類	14-87
25-88	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	入組文? 突起	第1群3類	14-88
25-89	H 31 区IV層	深鉢	体部	入組文 磨消縄文	第1群3類	14-89
25-90	H 31 区V層	深鉢	体部	入組文 磨消縄文	第1群3類	14-90
25-91	I 30 区IV層	深鉢	口縁部	入組文	第1群3類	14-91
25-92	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	入組文	第1群3類	14-92
25-93	H 31 区IV層	深鉢	体部	入組文 平行沈線 斜行縄文	第1群3類	14-93
25-94	H 30 区IV層	深鉢	体部	入組文 磨消縄文	第1群3類	14-94
25-95	H 33 区IV層	深鉢	体部	入組文 平行沈線 磨消縄文	第1群3類	14-95
25-96	H 31 区IV層	深鉢	体部	入組文 充填縄文	第1群3類	14-96
25-97	H 30 区V層	深鉢	口縁部	三角形彫去 沈線 充填縄文 突起	第1群3類	15-97
25-98	中央調査区Ⅲ層	深鉢	口縁部	三叉文 突起	第1群3類	15-98
25-99	H 30 区IV層	浅鉢	口縁部	三叉文 磨消縄文	第1群3類	15-99
25-100	東側調査区IV層	深鉢	口縁部	沈線 磨消縄文 波状口縁	第1群3類	15-100
25-101	H 30 区IV層	深鉢	口縁部	沈線 充填縄文 突起	第1群3類	15-101
25-102	H 32 区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 磨消縄文 突起	第1群3類	15-102
25-103	H 31 区IV層	深鉢	体部	平行沈線 磨消縄文 斜行縄文	第1群3類	15-103
25-104	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 充填縄文	第1群3類	15-104
25-105	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 突起	第1群3類	15-105
25-106	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 斜行縄文	第1群3類	15-106
26-107	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 斜行縄文	第1群3類	15-107
26-108	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	平行沈線 斜行縄文	第1群3類	15-108
26-109	I 32 区IV層	深鉢	体部	平行沈線 斜行縄文	第1群3類	15-109
26-110	H 31 区IV層	深鉢	体部	平行沈線 羽状縄文	第1群3類	15-110
26-111	H 31 区IV層	注口	口縁部	沈線	第Ⅱ群	15-111
26-112	H 31 区IV層	深鉢	体部	沈線	第Ⅱ群	15-112
26-113	H 31 区IV層	注口	口縁部	沈線	第Ⅱ群	15-113
26-114	H 31 区IV層	深鉢	体部	入組文 充填縄文	第Ⅱ群	15-114
26-115	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	三叉文 沈線	第Ⅱ群	15-115
26-116	I 33 区IV層	深鉢	体部	三叉文 充填縄文 斜行縄文	第Ⅱ群	15-116
26-117	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	入組文	第Ⅱ群	15-117
26-118	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	斜行縄文 小波状口縁	第Ⅱ群	15-118
26-119	H 31 区IV層	深鉢	体部	平行沈線	第Ⅱ群	15-119
26-120	中央調査区出土地不明Ⅲ層	深鉢	口縁部	斜行縄文	第Ⅲ群	15-120
26-121	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	斜行縄文	第Ⅲ群	15-121

表4 土器一覽表 (2)

図版番号	地 点・層 位	器種	部 位	文 様 の 特 徴	分 類	写真図版
26-122	H 32 区IV層	深鉢	口縁部	斜行縄文	第Ⅲ群	15-122
26-123	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	斜行縄文	第Ⅲ群	16-123
26-124	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	斜行縄文	第Ⅲ群	16-124
26-125	I 32 区IV層	深鉢	口縁部	斜行縄文	第Ⅲ群	16-125
26-126	H 31 区IV層	深鉢	体部	斜行縄文	第Ⅲ群	16-126
26-127	H 31 区IV層	深鉢	体部	斜行縄文	第Ⅲ群	16-127
26-128	H 32 区IV層	深鉢	口縁部	斜行縄文	第Ⅲ群	16-128
26-129	H 31 区IV層	深鉢	体部～底部	斜行縄文	第Ⅲ群	16-129
27-130	H 31 区V層	浅鉢	口縁部	斜行縄文	第Ⅲ群	16-130
27-131	H 31 区IV層	浅鉢	口縁部	斜行縄文	第Ⅲ群	16-131
27-132	H 31 区IV層	深鉢	口縁～胴部	羽状縄文	第Ⅲ群	16-132
27-133	I 33 区V層	深鉢	口縁部	羽状縄文	第Ⅲ群	17-133
27-134	H 31 区IV層	深鉢	口縁部	羽状縄文	第Ⅲ群	17-134
27-135	I 32 区IV層	深鉢	体部	羽状縄文	第Ⅲ群	17-135
27-136	H 32 区IV層	深鉢	体部	羽状縄文	第Ⅲ群	17-136
27-137	H 31 区IV層	深鉢	体部	羽状縄文	第Ⅲ群	17-137
27-138	H 32 区IV層	深鉢	体部	縦位櫛歯条線文	第Ⅲ群	17-138
27-139	I 32 区IV層	深鉢	体部	縦位蛇行櫛歯条線文	第Ⅲ群	17-139
27-140	I 32 区IV層	深鉢	体部	縦位蛇行櫛歯条線文 139 と同一個体	第Ⅲ群	17-140
27-141	H 32 区V層	深鉢	口縁部	無文	第Ⅲ群	17-141
27-142	H 31 区IV層	壺	口縁部	無文	第Ⅲ群	17-142
28-143	H 32 区V層	深鉢	体部～底部	無文	第Ⅲ群	17-143
28-144	H 32 区IV層	注口	完形	無文	第Ⅲ群	17-144
28-145	H 31 区IV層	浅鉢	完形	ミニチュア 無文	土製品	17-145
28-146	H 31 区IV層	壺		ミニチュア 沈線	土製品	17-146
28-147	西側調査区出土地不明	深鉢	口縁部	交互刺突	第Ⅳ群	18-147
28-148	西側調査区出土地不明	深鉢	口縁部	粘土帯貼付口縁	第Ⅳ群	18-148
28-149	西側調査区出土地不明	壺	体部	同心円文	第Ⅳ群	18-149

表 5 土器一覧表 (3)

図版番号	出土地点・産地	器種	石材	産地・時期	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版
10-1	井戸跡埋土上位	石鏃	赤色凝灰岩	北上山地・古生界	2.2	1.1	0.5	1.0	10-1
12-7	J24-1号土坑埋土	石鏃	硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	3.2	2.2	0.6	4.2	10-7
13-8	K24-1号土坑埋土	砥石	流紋岩質細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.2	4.7	2.2	120.0	10-8
20-34	I32-1号土坑埋土	石鏃	珪質泥岩	零石西部・新第三系中新統	2.7	1.4	0.3	0.9	12-34
20-35	H30-4号土坑埋土	石鏃	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	5.0	2.4	0.6	3.4	12-35
20-36	I31-1号土坑埋土	石鏃	粘板岩	北上山地・古生界	4.3	2.4	1.1	8.95	12-36
21-37	I32-2号土坑埋土	石匙	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	6.9	1.6	0.9	10.9	12-37
21-38	I30-2号土坑埋土	尖頭器?	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	5.4	2.1	0.8	8.2	12-38
21-39	I32-1号土坑埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地・古生界	6.2	4.8	1.15	38.7	12-39
21-40	I30-1号土坑埋土	不定形石器	チャート質粘板岩	北上産地・古生界	4.1	2.9	1.1	10.7	12-40
21-41	I31-4号土坑埋土	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	5.7	2.2	1.2	14.5	12-41
21-42	J32-1号土坑埋土	不定形石器	珪質泥岩	零石西部・新第三系中新統	5.7	3.6	1.3	26.9	12-42
21-43	I31-2号土坑埋土	石刀	斜長石珎岩	北上山地・中生界	5.7	4.7	1.9	90.0	12-43
21-44	J30-1号土坑埋土	石錘・凹石	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系鮮新統	6.5	6.7	2.8	200.0	12-44
22-45	I31-4号土坑埋土	石皿	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系鮮新統	14.1	12.5	6.7	1760.0	12-45
22-46	I31-4号土坑埋土	石臼	凝灰角礫岩	衣川・新第三系鮮新統	20.5	15.8	9.5	3220.0	12-46
29-163	I33区・V層	石鏃	硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	1.7	1.1	0.25	0.6	19-163
29-164	H33区・V層	石鏃	珪長質細粒凝灰岩	零石西部・新第三系中新統	2.6	1.2	0.5	1.55	19-164
29-165	遺構外出土地不明	石鏃	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	2.5	1.4	0.5	1.4	19-165
29-166	J33区・V層	石鏃	硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	2.7	1.0	0.4	1.05	19-166
29-167	I32区・IV層	石鏃	珪長質細粒凝灰岩	零石西部・新第三系中新統	1.8	1.4	0.35	0.65	19-167
29-168	I32区・IV層	石鏃	珪質泥岩	零石西部・新第三系中新統	1.9	1.4	0.35	1.0	19-168
29-169	H33区・V層	石鏃	チャート	北上山地・古生界	1.9	1.3	0.5	0.85	19-169
29-170	H30区・IV層	石鏃	チャート	北上山地・古生界	2.5	1.4	0.4	1.25	19-170
29-171	I31区・V層	石鏃	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	4.6	1.1	0.5	2.05	19-171
29-172	I33区・V層	石鏃	硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	2.6	1.1	0.35	1.15	19-172
29-173	H30区・V層	石鏃	珪長質細粒凝灰岩	零石西部・新第三系中新統	3.7	1.7	0.8	3.7	19-173
29-174	H32区・IV層	石匙	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	5.4	1.4	0.7	5.4	19-174
29-175	L26区・III層下位	石匙	珪質泥岩	零石西部・新第三系中新統	6.5	2.3	0.7	11.5	19-175
29-176	H33区・IV層	石匙	珪質泥岩	零石西部・新第三系中新統	7.4	1.7	1.0	12.6	19-176
29-177	I32区・V層	石匙	珪質泥岩	零石西部・新第三系中新統	7.6	1.7	0.9	10.9	19-177
29-178	H33区・V層	石匙	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	7.7	1.7	0.5	8.3	19-178
29-179	H33区・V層	石匙	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	6.1	1.6	0.7	7.6	19-179
29-180	I36区・V層	石匙	珪長質細粒凝灰岩	零石西部・新第三系中新統	5.7	1.8	0.4	4.85	19-180
29-181	遺構外出土地不明	石匙	硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	3.5	1.8	0.4	2.7	19-181
29-182	H32区・V層	石匙	珪質泥岩	零石西部・新第三系中新統	3.9	5.9	0.5	10.85	19-182
30-183	L26区・III層下位	石匙	珪質泥岩	零石西部・新第三系中新統	3.0	3.6	1.1	7.7	20-183
30-184	H31区・IV層	石匙	珪質泥岩	零石西部・新第三系中新統	3.9	4.6	0.7	8.4	20-184
30-185	H32区・IV層	石匙	珪長質細粒凝灰岩	零石西部・新第三系中新統	3.6	5.3	0.8	20.5	20-185
30-186	H32区・IV層	石鏃	赤色凝灰岩	北上山地・古生界	5.3	1.7	0.8	3.35	20-186
30-187	J31区・V層	石籠	粘板岩	北上山地・古生界	3.3	2.4	0.6	6.8	20-187
30-188	I30区・V層	石籠	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	5.2	3.6	1.1	21.0	20-188
30-189	H33区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	3.0	1.3	0.7	2.1	20-189
30-190	I33区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	3.3	2.2	0.5	4.7	20-190
30-191	I33区・V層	不定形石器	珪長質細粒凝灰岩	零石西部・新第三系中新統	3.2	2.4	1.1	8.3	20-191
30-192	H33区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	4.7	2.5	0.4	6.3	20-192
30-193	I31区・IV層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	5.4	2.6	1.7	18.4	20-193
30-194	遺構外出土地不明	不定形石器	珪質泥岩	零石西部・新第三系中新統	4.7	2.5	6.5	8.9	20-194
30-195	I30区・V層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	3.6	3.1	0.6	6.75	20-195
30-196	K26区・VI層上面	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	零石西部・新第三系中新統	3.9	2.7	0.7	7.8	20-196
31-197	J31区・V層	不定形石器	粘板岩	北上山地・古生界	4.1	4.0	0.5	8.4	20-197

表6 石器・石製品一覧表 (1)

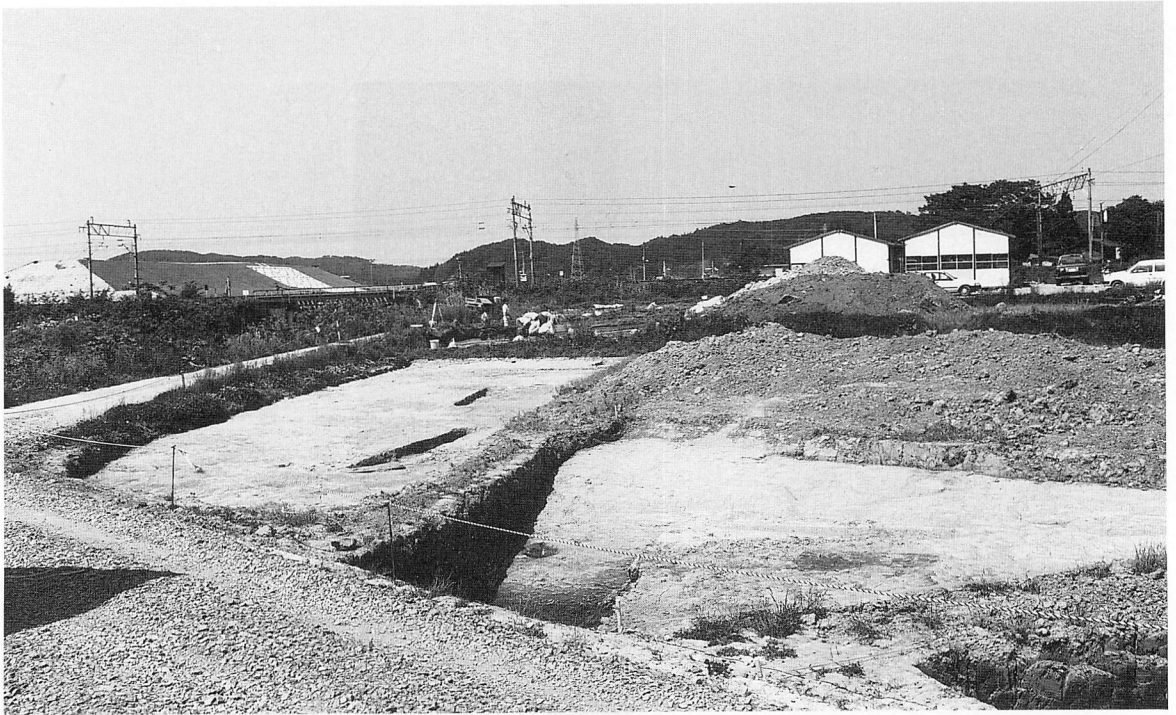
図版番号	出土地点・産地	器種	石材	産地・時期	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	写真図版
31-198	J31区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	4.9	3.4	1.25	16.8	20-198
31-199	I31区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	5.5	4.7	1.7	39.3	20-199
31-200	遺構外出土地不明	不定形石器	珪長質細粒凝灰岩	雲石西部・新第三系中新統	2.1	2.9	0.8	5.4	20-200
31-201	I31区・IV層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	4.1	2.5	0.4	5.4	20-201
31-202	J31区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	3.6	2.6	0.7	6.7	20-202
31-203	H31区・IV層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	3.7	2.8	1.2	10.7	20-203
31-204	J30区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	4.0	1.0	1.1	14.9	20-204
31-205	J31区・V層	不定形石器	粘板岩	北上山地・古生界	5.0	3.3	0.9	12.85	20-205
31-206	H33区・V層	不定形石器	珪質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	4.2	3.4	0.8	9.6	20-206
31-207	I32区・IV層	不定形石器	珪長質細粒凝灰岩	雲石西部・新第三系中新統	4.1	3.0	0.8	13.95	21-207
31-208	I33区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	5.5	4.5	1.3	33.9	21-208
31-209	J30区・V層	不定形石器	粘板岩	北上山地・古生界	4.8	4.2	0.9	15.45	21-209
31-210	H31区・IV層	不定形石器	珪質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	7.7	2.5	0.9	17.05	21-210
31-211	I31区・IV層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	8.4	3.6	0.9	21.8	21-211
31-212	I33区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	7.1	3.2	1.2	29.3	21-212
31-213	H31区・IV層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	7.4	3.7	1.1	30.9	21-213
31-214	H33区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	6.3	2.4	1.8	29.5	21-214
31-215	遺構外出土地不明	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	6.3	3.2	2.3	43.8	21-215
31-216	I30区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	8.0	3.8	1.2	55.4	21-216
31-217	I33区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	5.6	3.2	1.8	28.25	21-217
32-218	I33区・V層	不定形石器	粘板岩	北上山地・古生界	7.8	3.8	0.6	50.7	21-218
32-219	I30区・V層	不定形石器	珪長質細粒凝灰岩	雲石西部・新第三系中新統	6.4	3.6	1.1	20.85	21-219
32-220	I32区・V層	不定形石器	珪長質細粒凝灰岩	雲石西部・新第三系中新統	7.1	3.4	1.2	26.6	21-220
32-221	J30区・V層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	雲石西部・新第三系中新統	8.9	3.8	1.8	56.6	22-221
32-222	I32区・IV層	不定形石器	ホルンフェルス	北上山地・古生界	8.3	4.7	1.6	700.0	22-222
32-223	I30区・V層	不定形石器	珪長質細粒凝灰岩	雲石西部・新第三系中新統	9.6	4.2	2.2	100.0	22-223
32-224	I33区・V層	叩石	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	13.3	5.3	5.1	640.0	22-224
32-225	H31区・IV層	磨製石斧	ホルンフェルス	北上山地・古生界	10.5	4.1	2.2	140.0	22-225
32-226	I33区・V層	磨製石斧	硬砂岩	北上山地・古生界	11.8	5.2	2.9	250.0	22-226
33-227	K31区・V層	敲石	硬砂岩	北上山地・古生界	7.3	7.0	3.1	260.0	22-227
33-228	L26区・III層下位	磨石・敲石	凝灰角礫岩	衣川・新第三系新鮮統	8.3	9.6	2.6	190.0	22-228
33-229	I33区・V層	磨石	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	9.4	7.9	5.1	510.0	22-229
33-230	J31区・V層	磨石	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	5.7	5.5	6.0	260.0	22-230
33-231	I30区・V層	磨石	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	8.6	5.4	4.3	300.0	23-231
33-232	I32区・IV層	磨石	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	7.0	6.7	4.4	290.0	23-232
34-233	H32区・IV層	磨石	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	10.0	8.0	5.4	520.0	23-233
34-234	I32区・IV層	磨石	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	14.3	8.3	5.2	910.0	23-234
34-235	I33区・V層	磨石	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	5.8	9.7	3.5	280.0	23-235
34-236	I33区・V層	磨石	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	12.3	8.7	4.6	670.0	23-236
34-237	H31区・V層	磨石	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	15.4	6.3	6.2	850.0	23-237
34-238	I30区・V層	磨石	安山岩	北上山地・中生界	8.4	7.0	5.6	490.0	23-238
35-239	遺構外出土地不明	磨石	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	9.1	8.0	6.5	700.0	23-239
35-240	I30区・IV層	石皿	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	17.0	12.2	3.1	1000.0	24-240
35-241	I33区・V層	石皿	両輝石安山岩	衣川国見山・新第三系新鮮統	15.7	14.6	3.9	1440.0	24-241
36-242	J32区・II層	砥石	流紋岩質細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	16.6	6.0	3.0	480.0	24-242
36-243	I31区・II層	砥石	流紋岩質細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	6.7	3.6	1.7	500.0	24-243
36-244	L26区・III層	砥石	流紋岩質細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	7.4	4.7	1.5	70.0	24-244
36-245	H32区・IV層	有孔石製品	珪長質細粒凝灰岩	雲石西部・新第三系中新統	2.1	2.5	0.4	2.55	24-245
36-246	H32区・IV層	有孔石製品	珪長質細粒凝灰岩	雲石西部・新第三系中新統	3.6	3.9	0.6	9.25	24-246
36-247	H31区・IV層	岩版	珪長質細粒凝灰岩	雲石西部・新第三系中新統	5.2	5.3	3.0	46.25	24-247

表7 石器・石製品一覧表 (2)

写 真 图 版



写真図版 1 遺構遠景（南から）



東側調査区（東から）



中央調査区（西から）

写真図版2 遺跡近景



H31区北壁断面

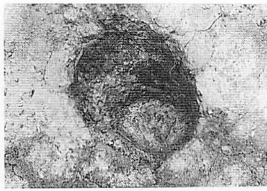


L26区南壁断面

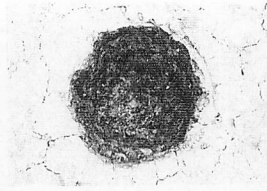
写真図版3 土層断面



掘立柱建物跡全景（東から）



B₁ 柱穴



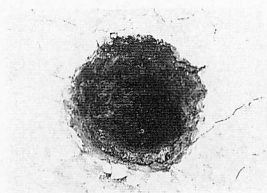
B₄ 柱穴



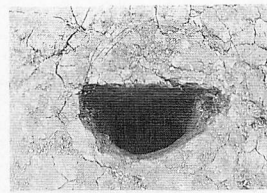
A₁ 柱穴



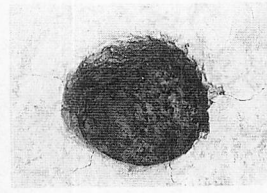
A₄ 柱穴



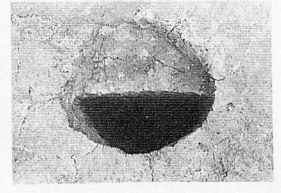
B₂ 柱穴



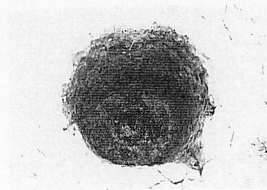
B₅ 柱穴



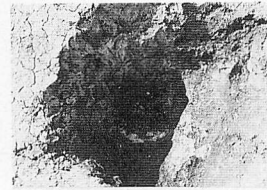
A₂ 柱穴



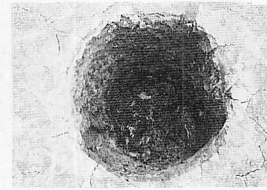
A₅ 柱穴断面



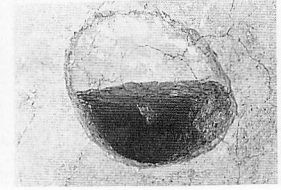
B₃ 柱穴



B₆ 柱穴



A₃ 柱穴

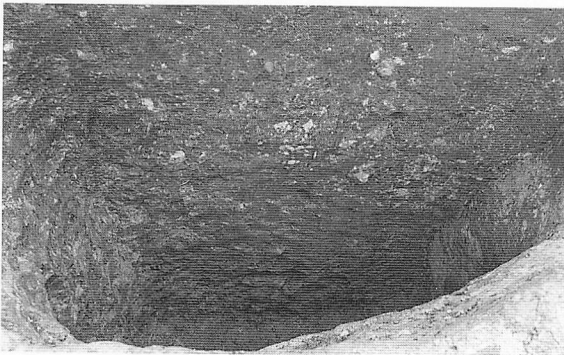


A₆ 柱穴断面

写真図版 4 掘立柱建物跡



全景（北から）



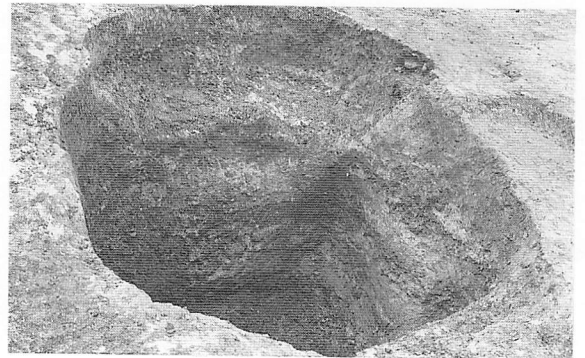
断面（南から）



掘出土状況

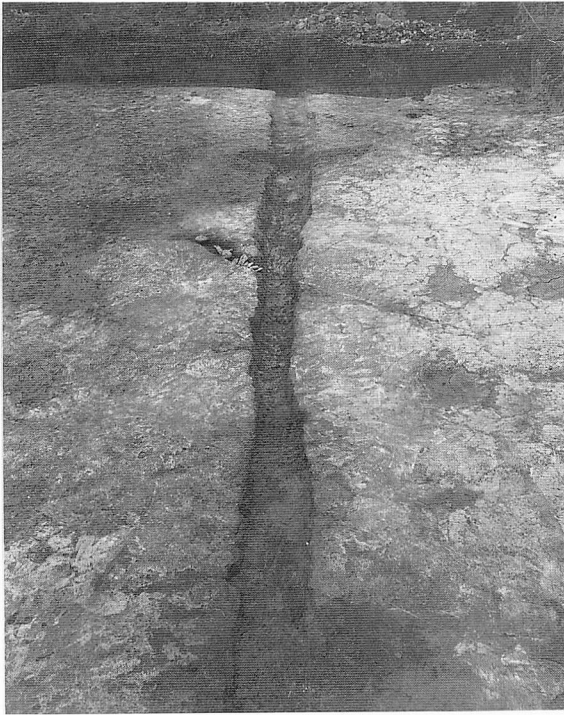


全景（北西から）

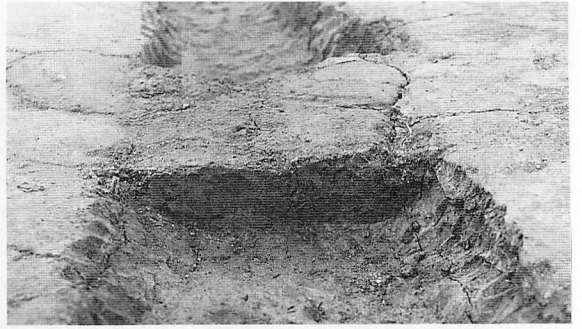


全景（西から）

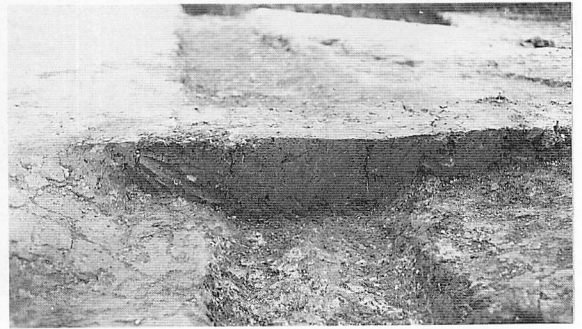
写真図版5 井戸跡



溝跡全景 (北から)



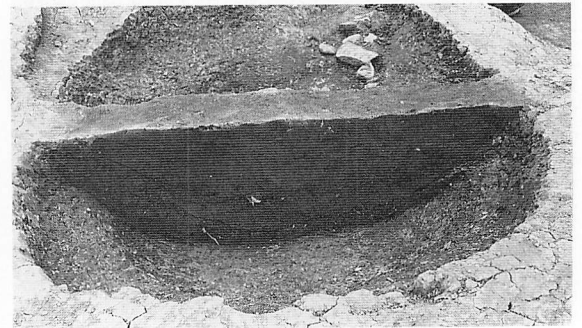
溝跡断面(1)



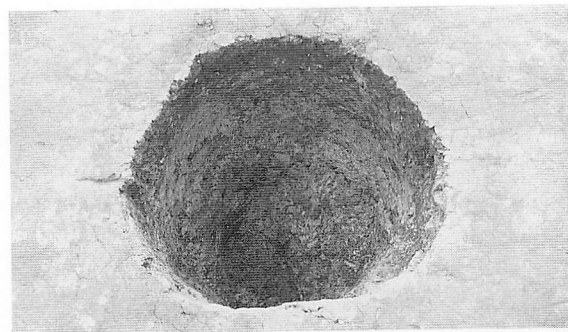
溝跡断面(2)



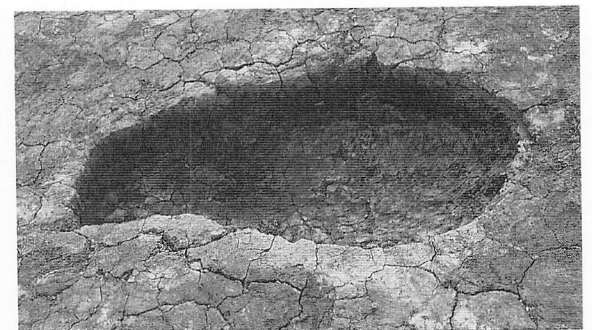
K24-1号土坑平面



K24-1号土坑断面

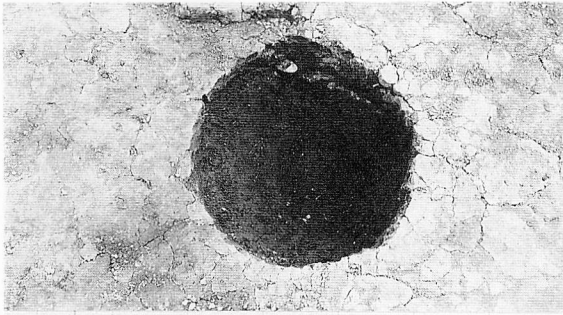


J24-1号土坑平面



J25-1号土坑平面

写真図版6 溝跡・土坑 (1)



H30-1号土坑（北から）



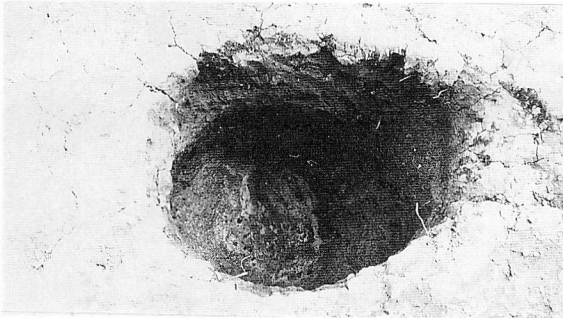
H32-1号土坑（南から）



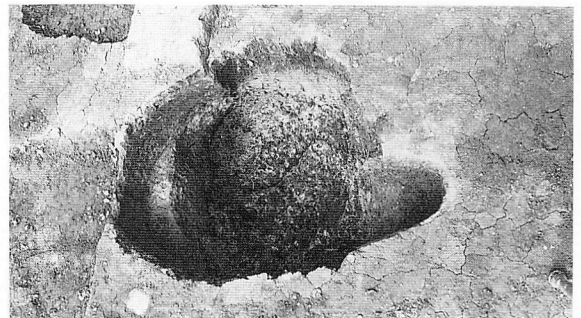
H30-2号土坑（南から）



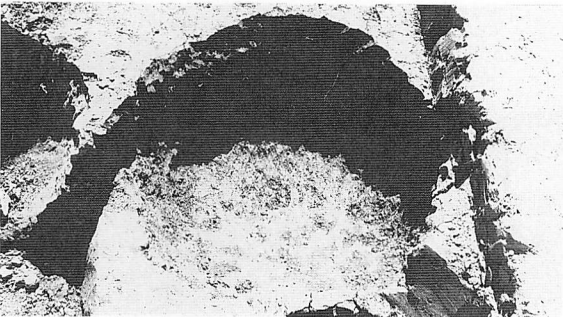
H33-1号土坑（南から）



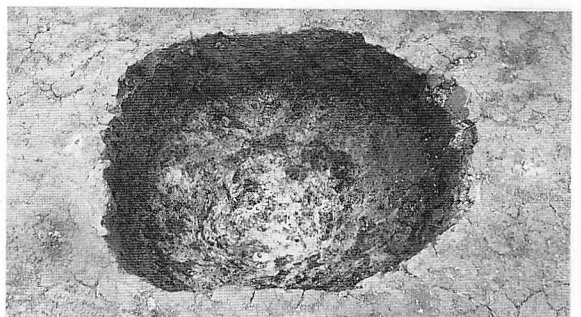
H30-3号土坑（北から）



I31-1号土坑（東から）

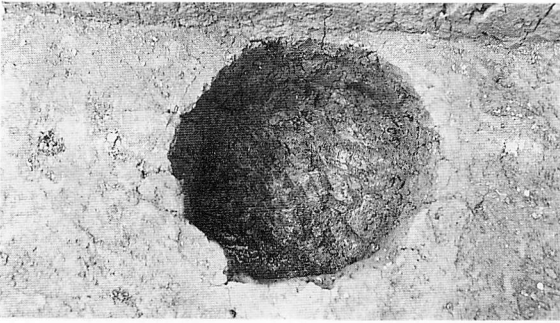


H30-4号土坑（西から）

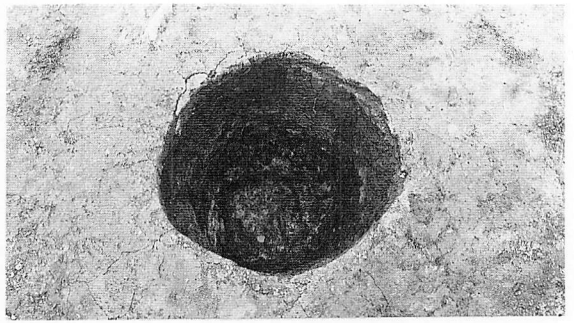


I31-2号土坑（南から）

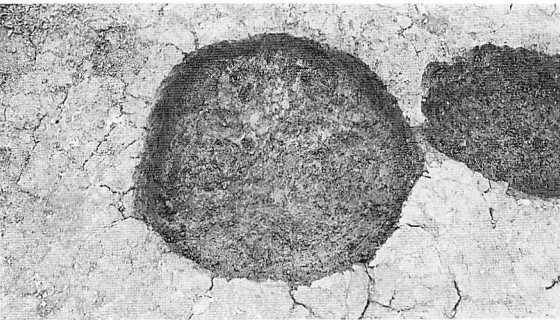
写真図版7 土坑 (2)



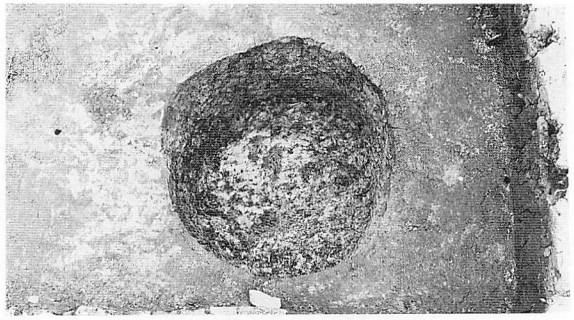
I 31-3号土坑 (南から)



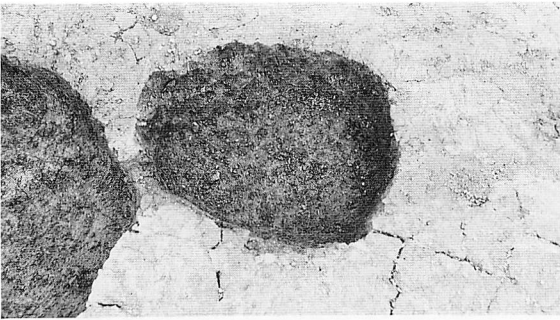
I 32-3号土坑 (南から)



I 31-4号土坑 (南から)



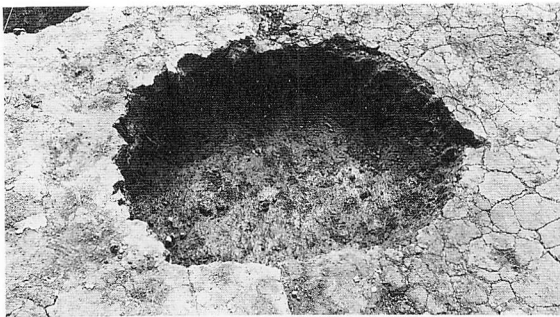
I 33-1号土坑 (東から)



I 31-5号土坑 (南から)



J 33-4号土坑 (西から)



I 32-1号土坑 (西から)

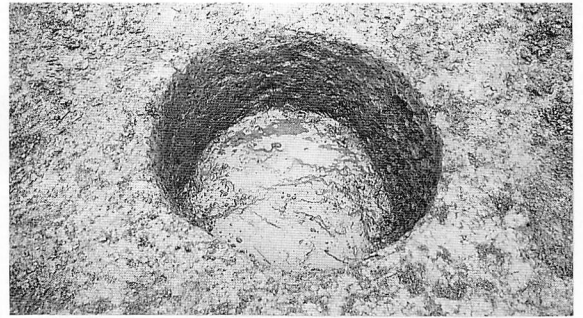


J 30-1号土坑 (南から)

写真図版8 土坑 (3)



J31-1号土坑(南から)



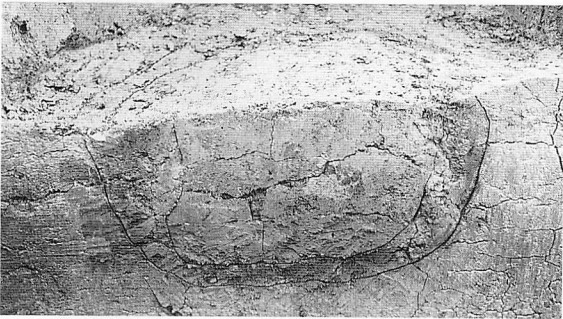
R2-1号(北から)



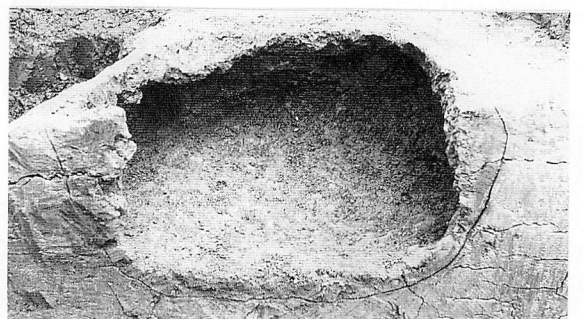
J32-1号土坑(南から)



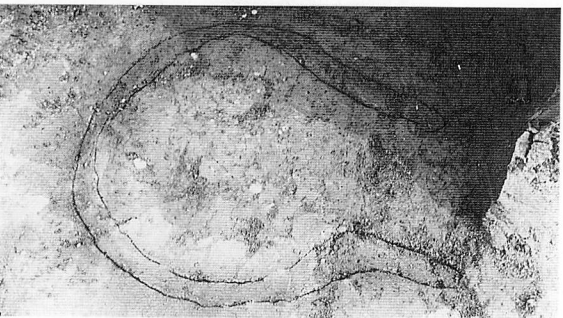
O4焼土遺構断面



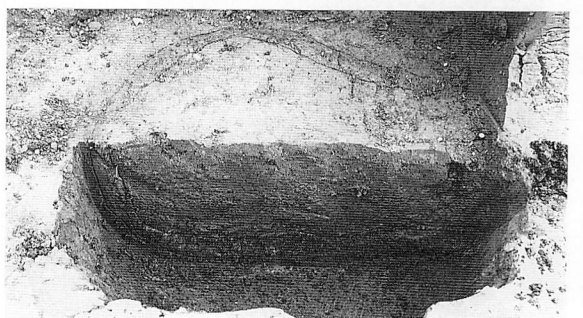
O10焼土遺構断面



O10焼土遺構完掘

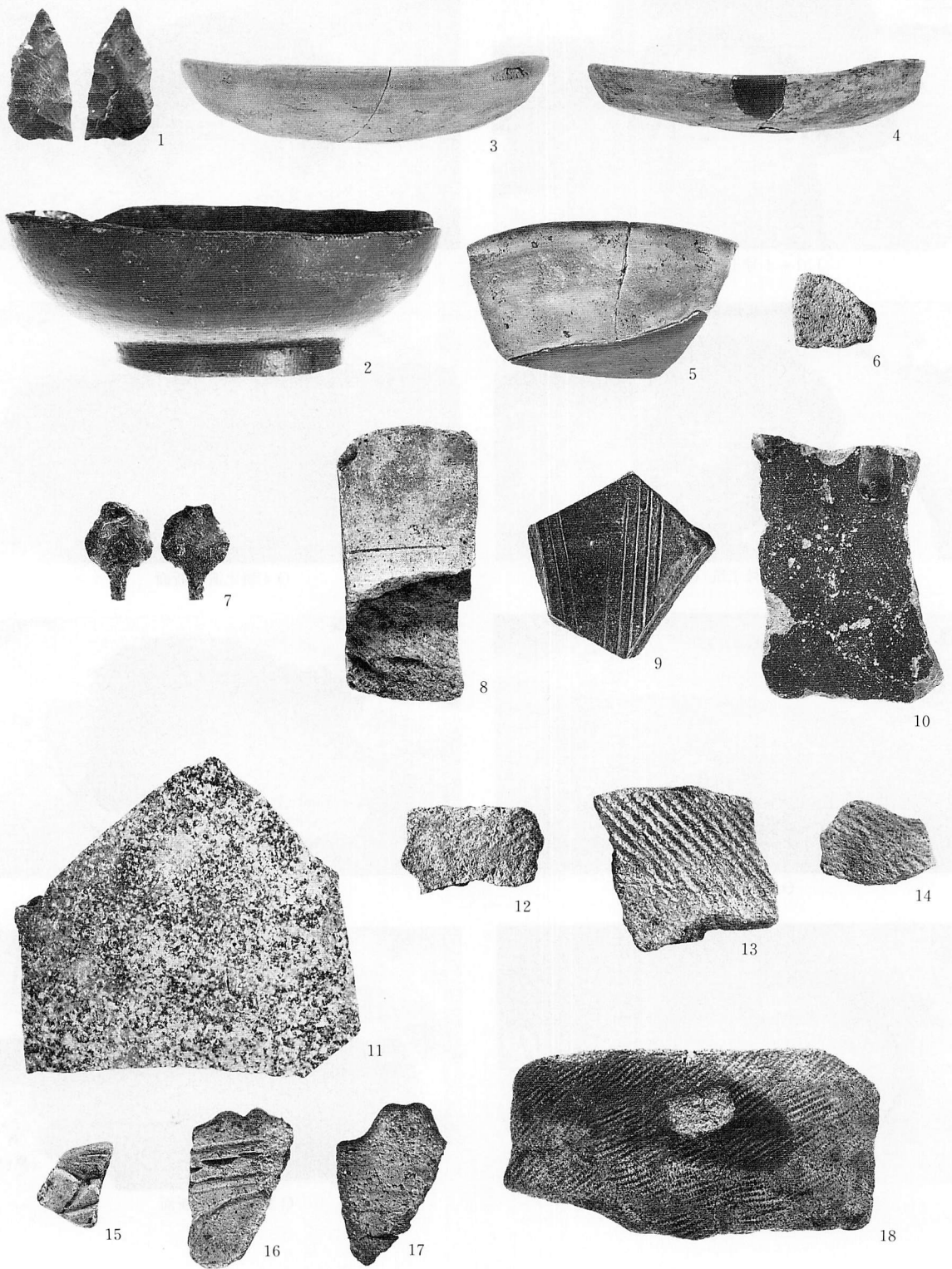


O9焼土遺構検出状況

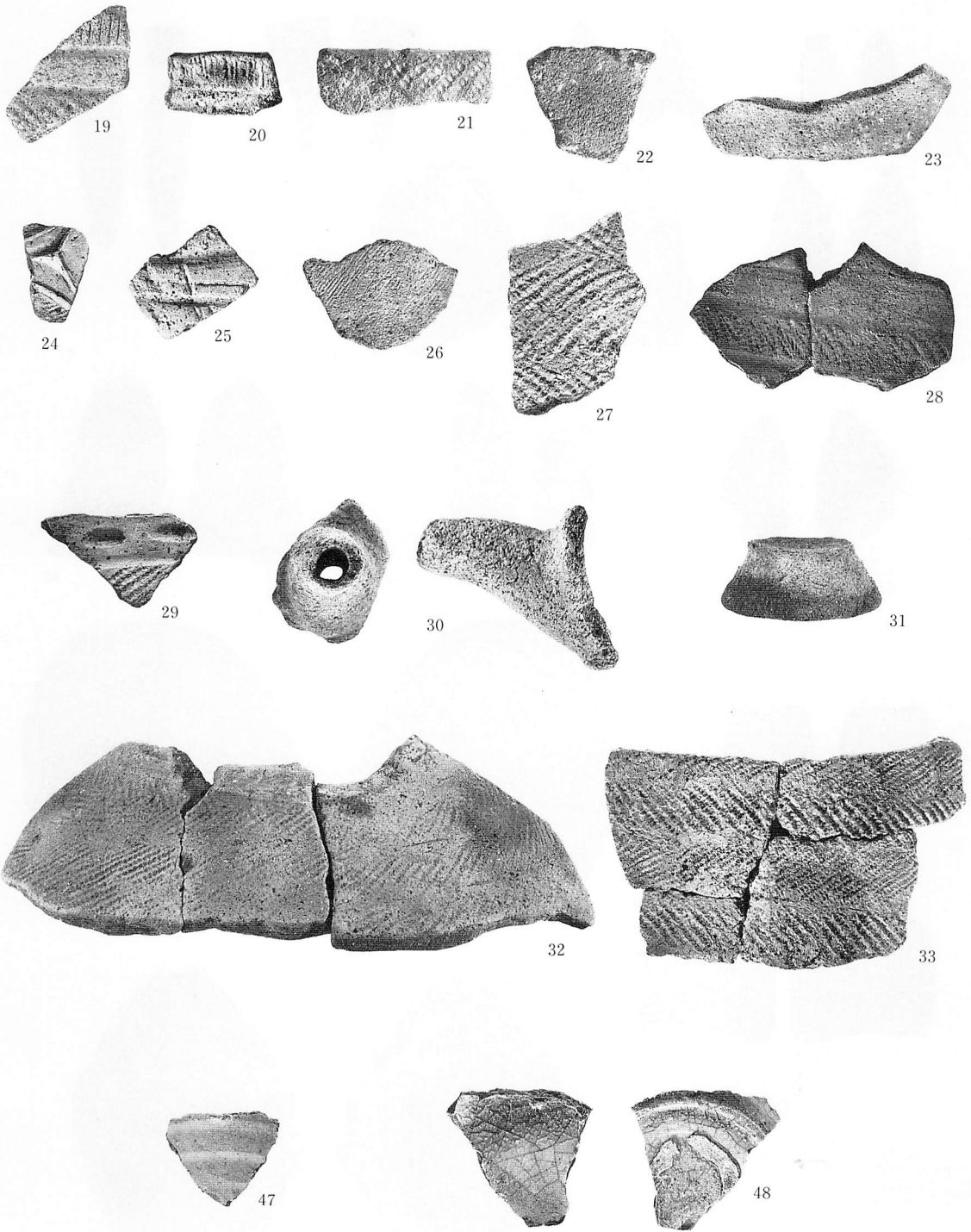


O9焼土遺構断面

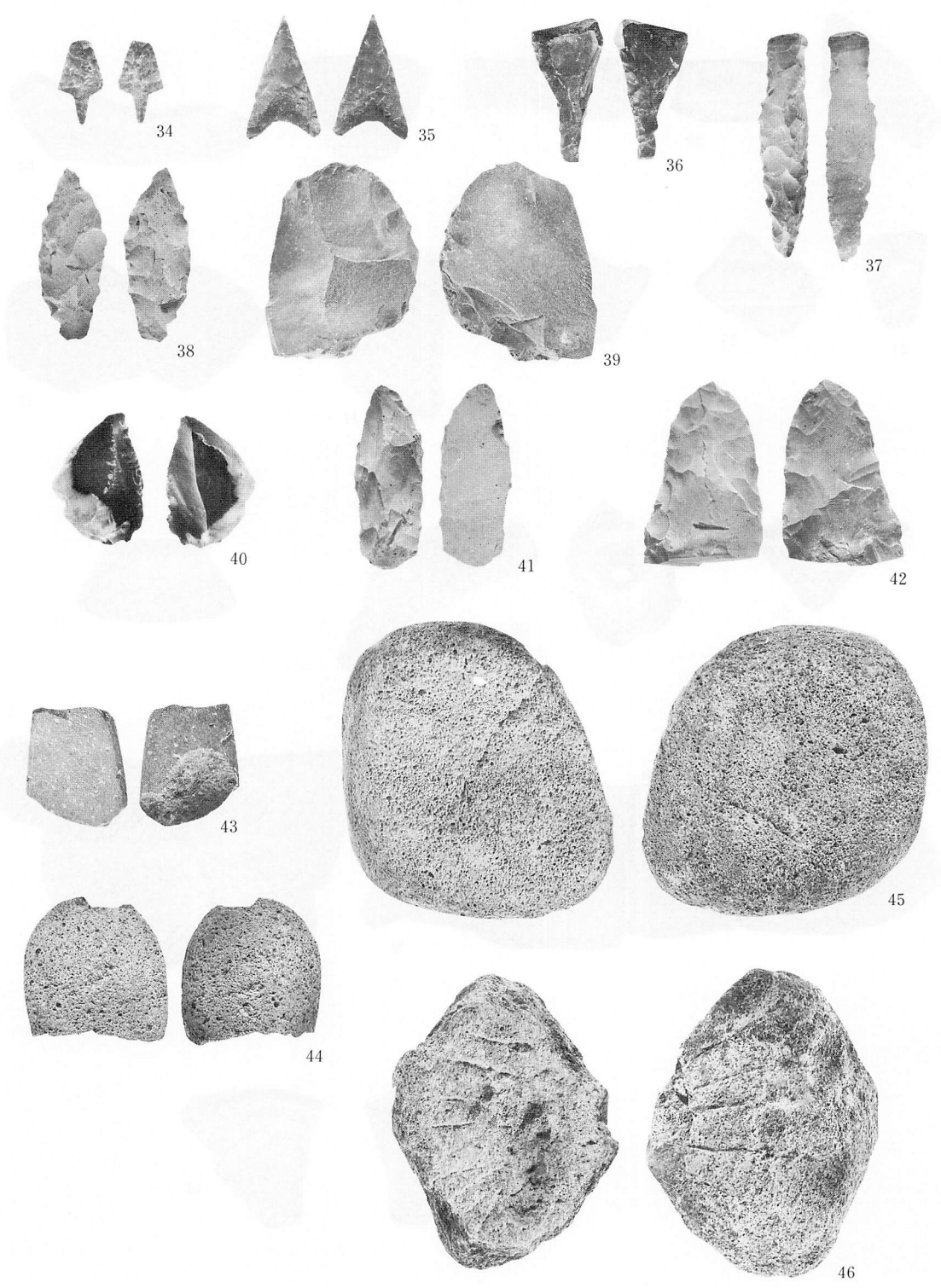
写真図版9 土坑(4)・焼土遺構



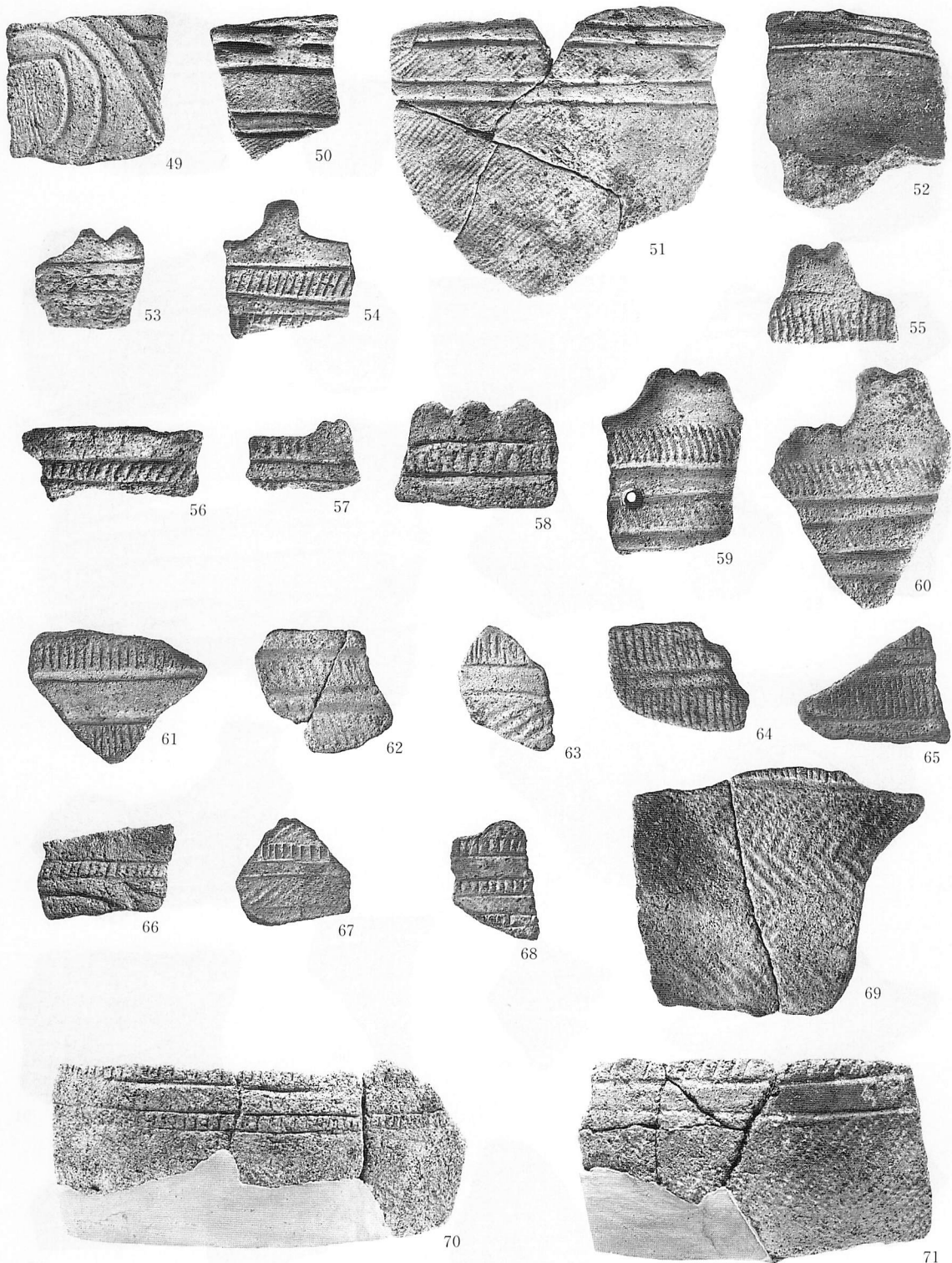
写真図版10 遺構内出土遺物 1 (井戸跡・土坑 1)



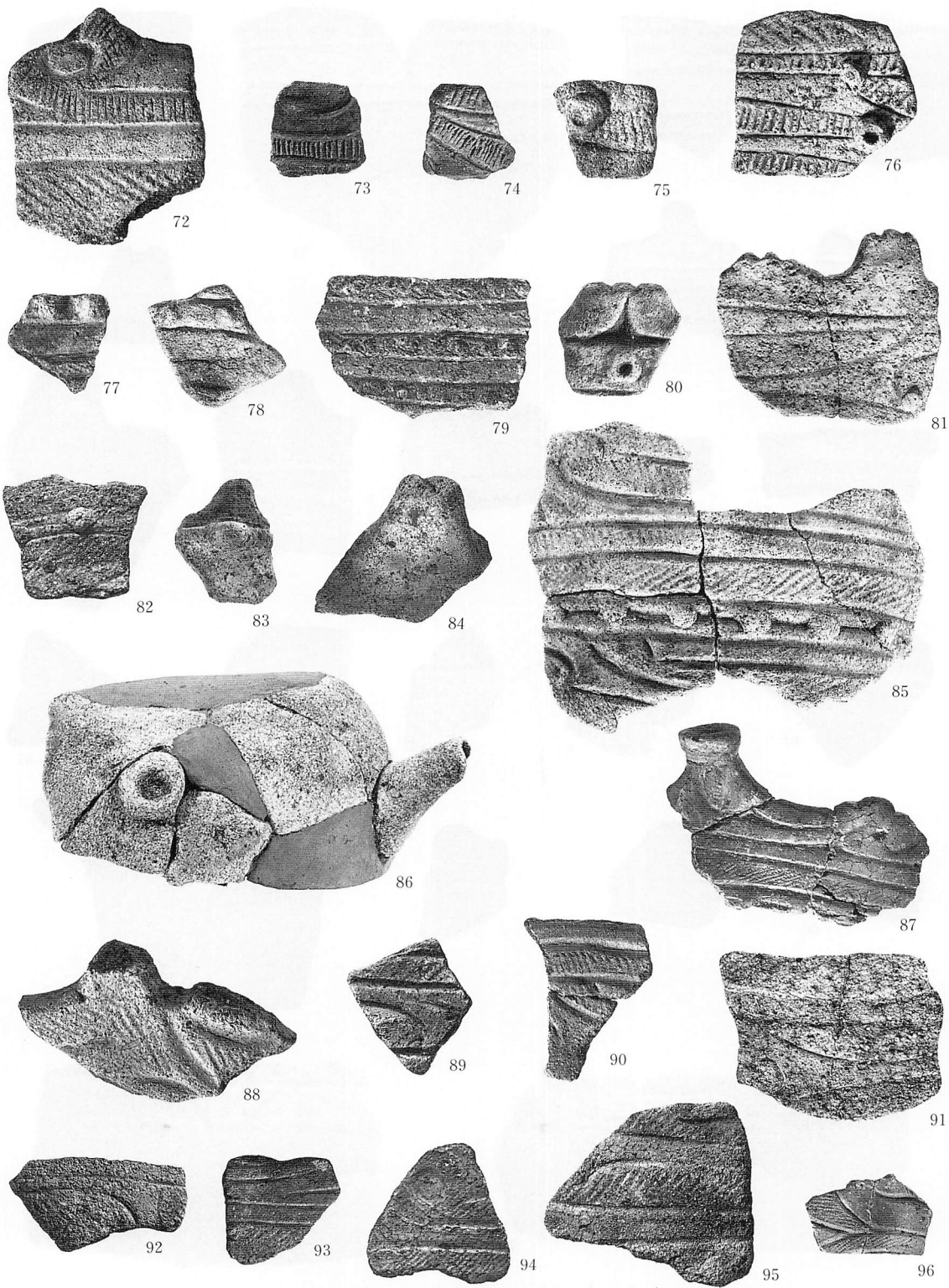
写真図版11 遺構内出土遺物2 (土坑2)



写真図版12 遺構内出土遺物3 (土坑3)



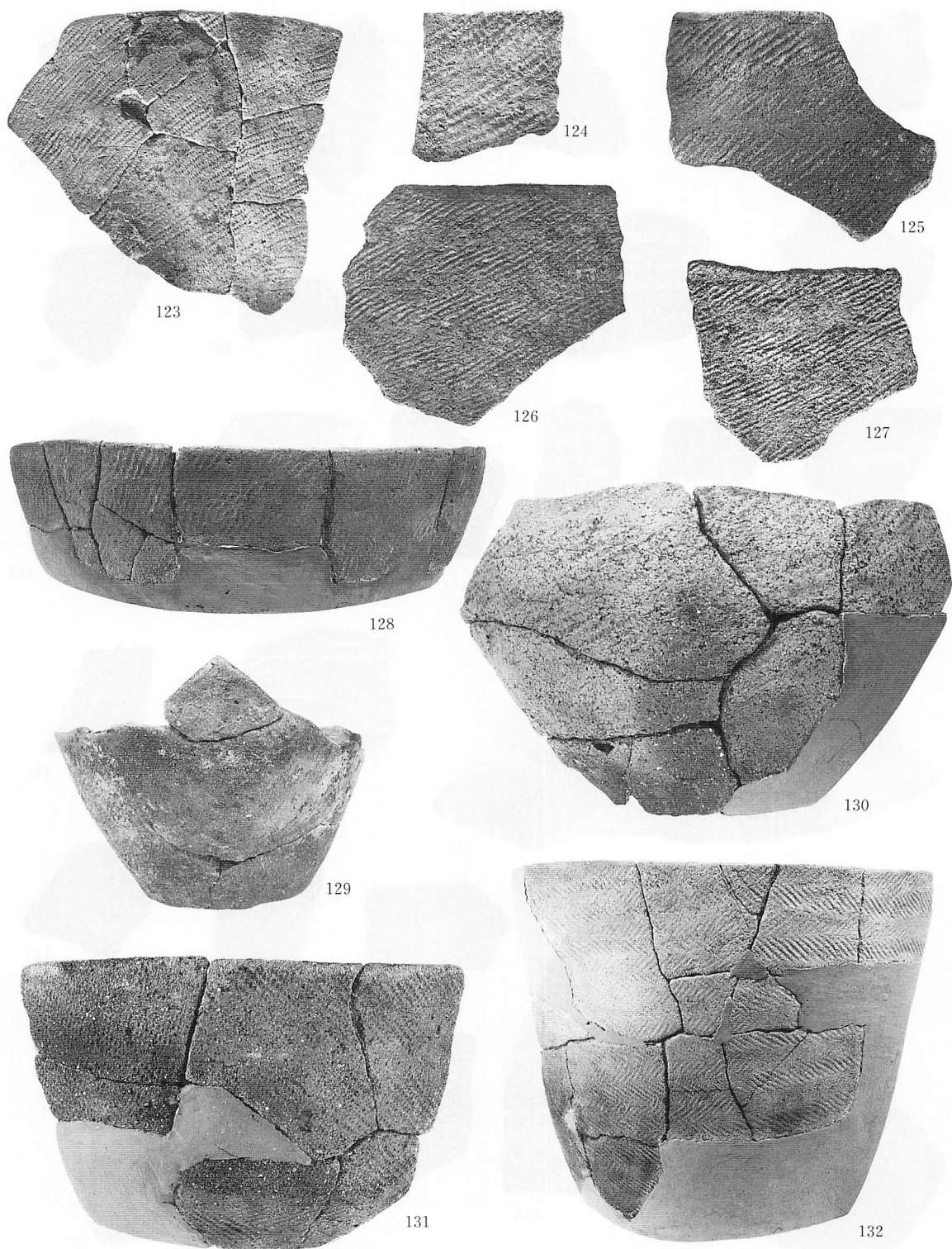
写真図版13 遺構外出土遺物（土器1）



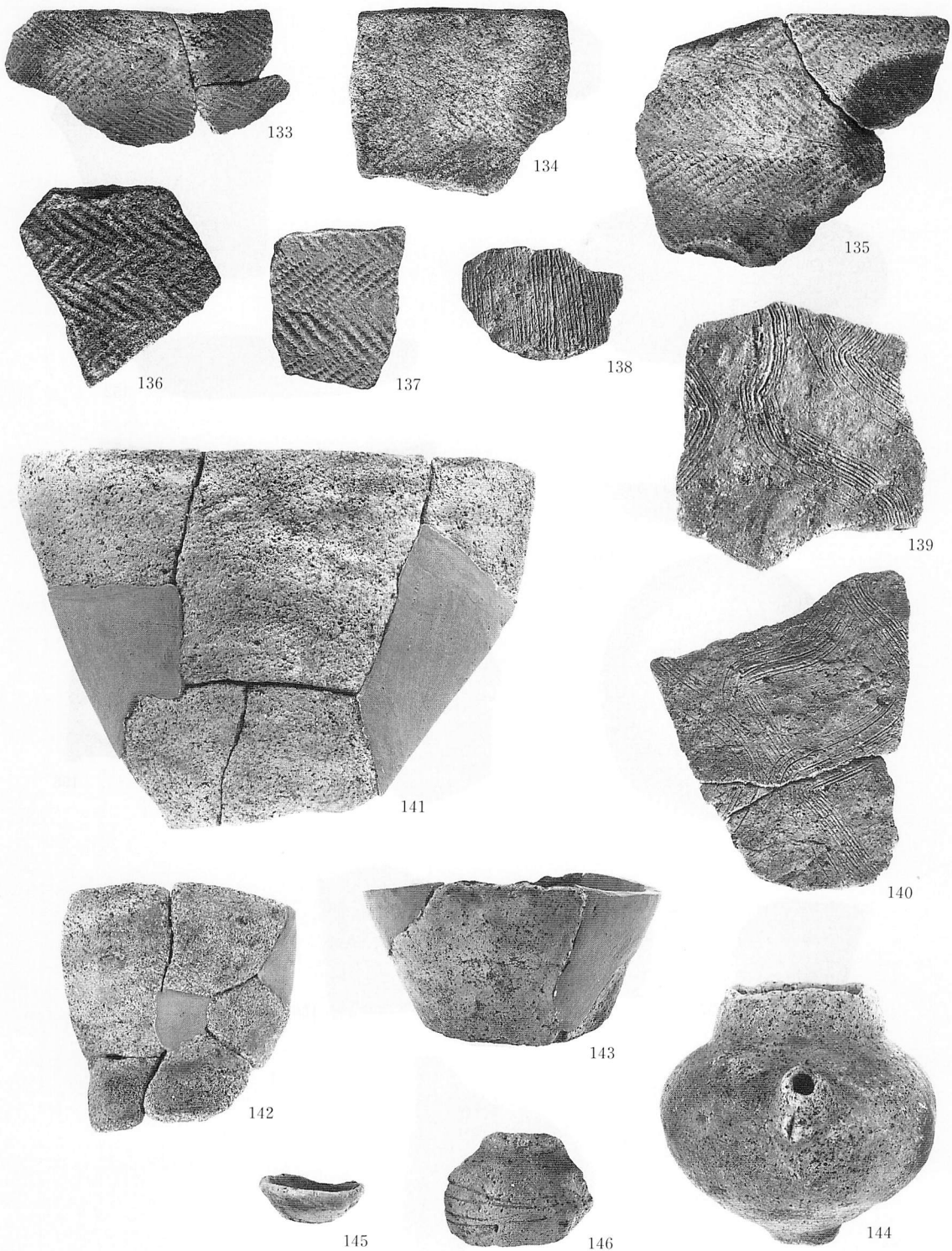
写真図版14 遺構外出土遺物（土器2）



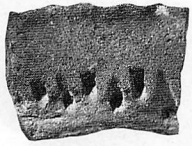
写真図版15 遺構外出土遺物（土器3）



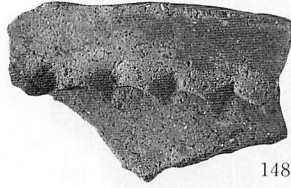
写真図版16 遺構外出土遺物（土器4）



写真図版17 遺構外出土遺物（土器5）



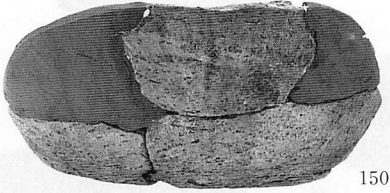
147



148



149



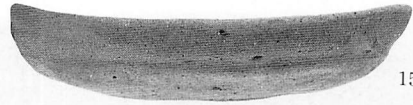
150



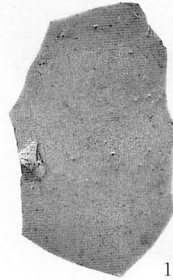
152



151



153



154



155



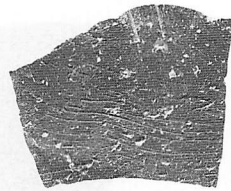
156



157



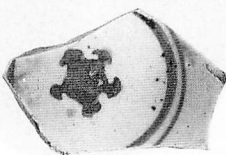
158



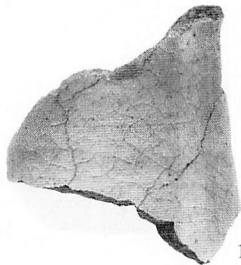
159



160

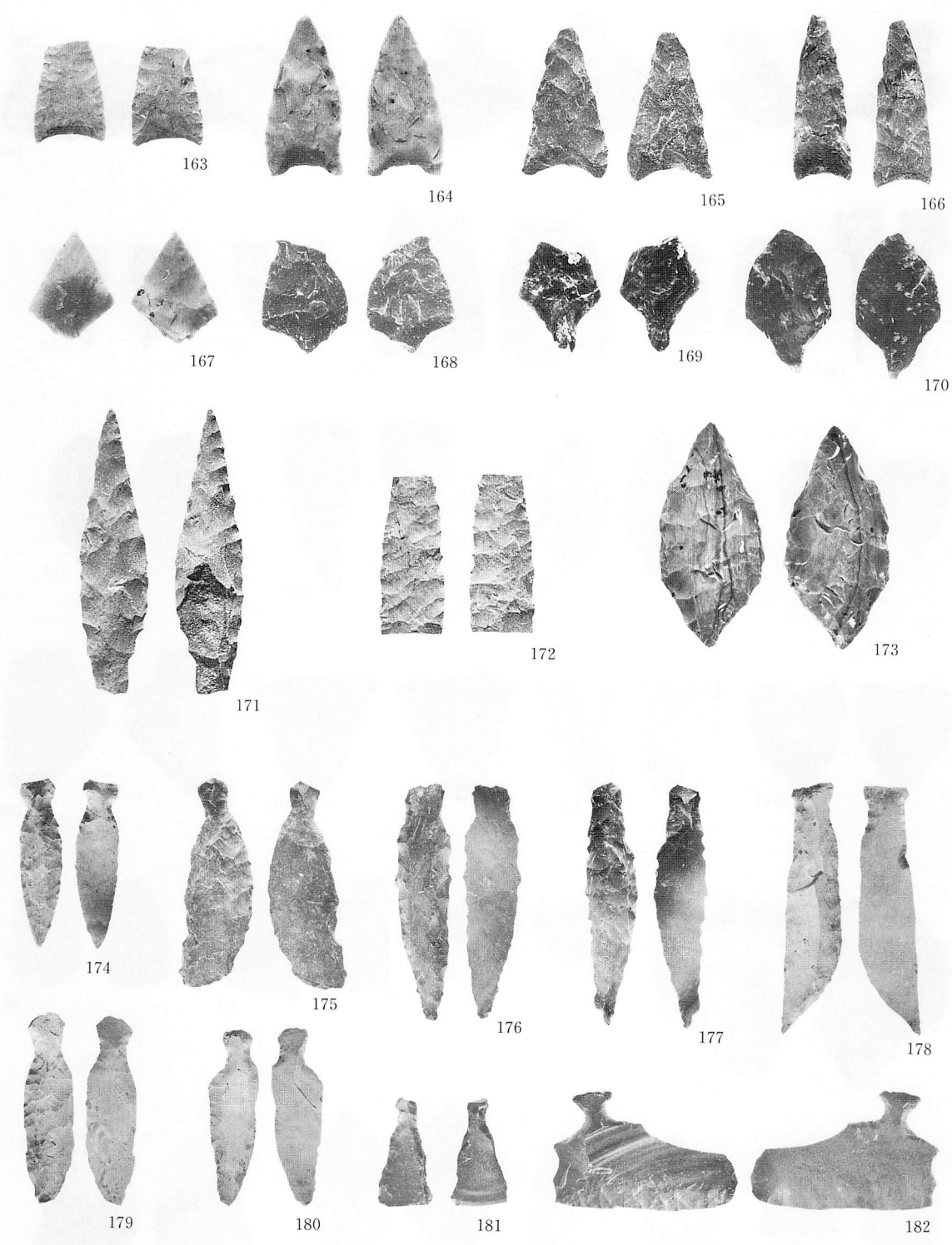


161



162

写真図版18 遺構外出土遺物 (土器6・陶磁器)



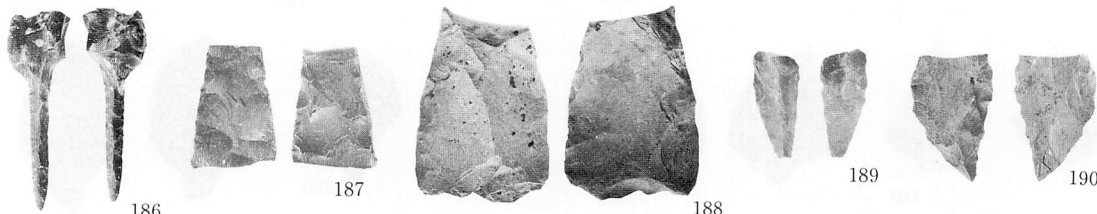
写真図版19 遺構外出土遺物（石器1）



183

184

185



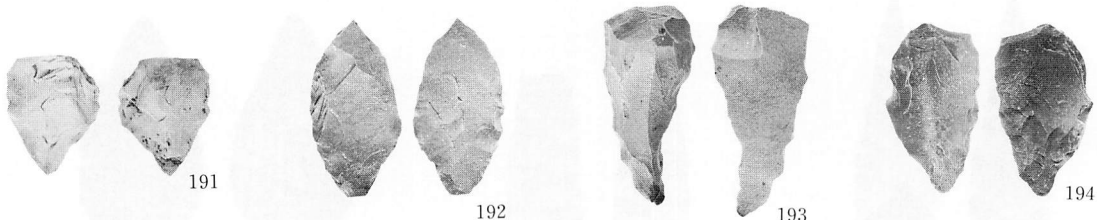
186

187

188

189

190

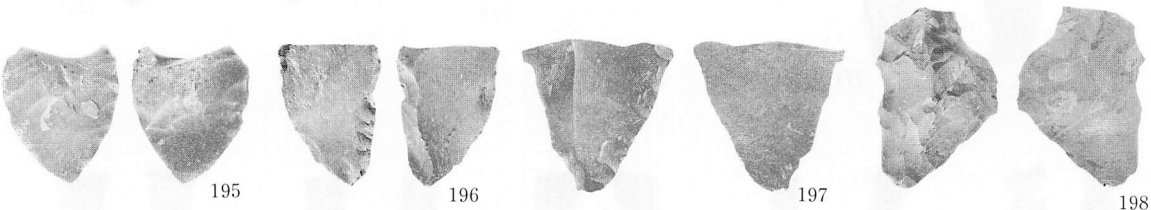


191

192

193

194

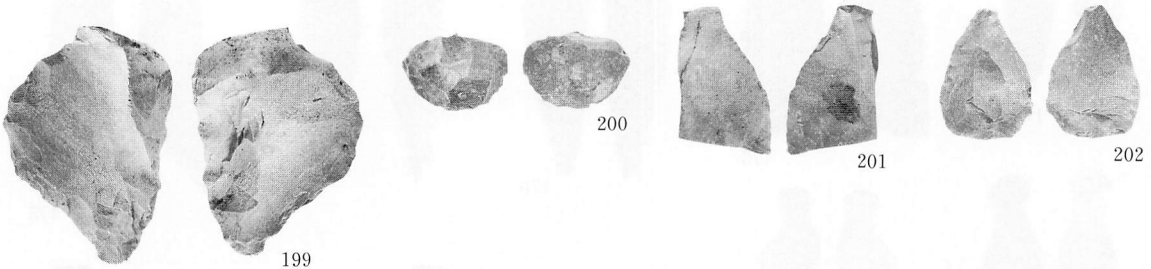


195

196

197

198

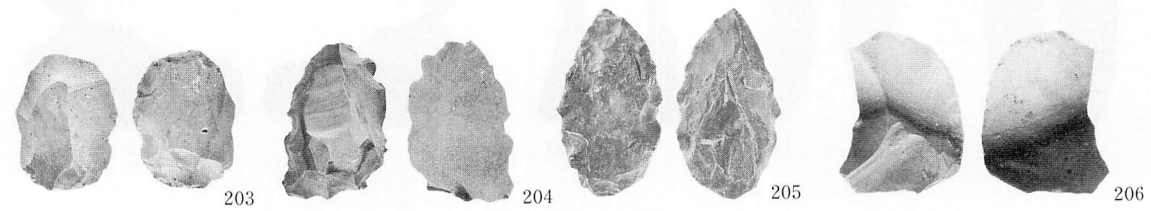


199

200

201

202



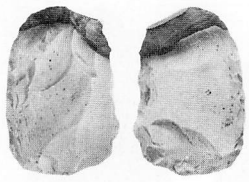
203

204

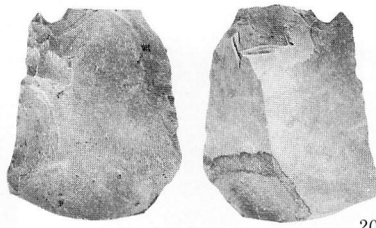
205

206

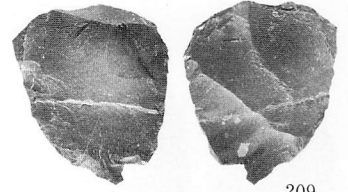
写真図版20 遺構外出土遺物（石器2）



207



208



209



210



211



212



213



214



215



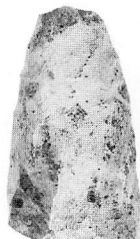
216



217



218

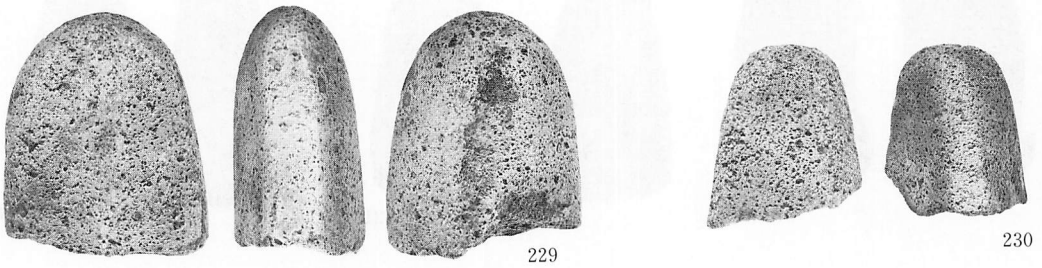
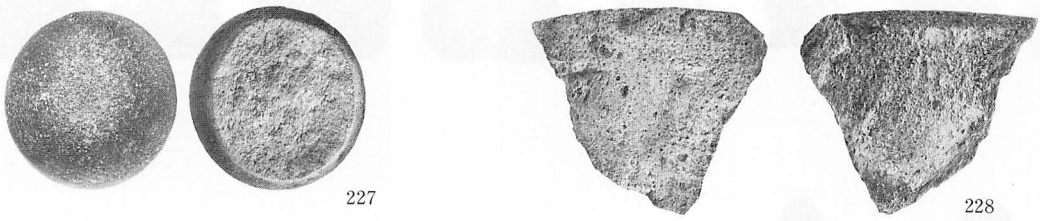
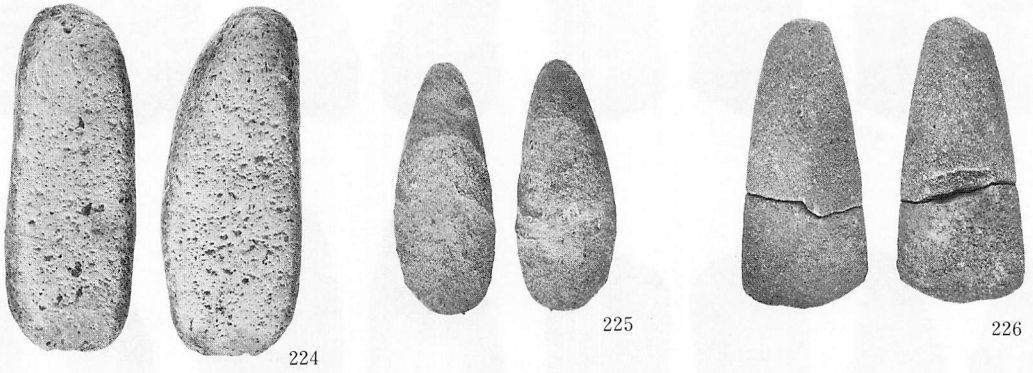
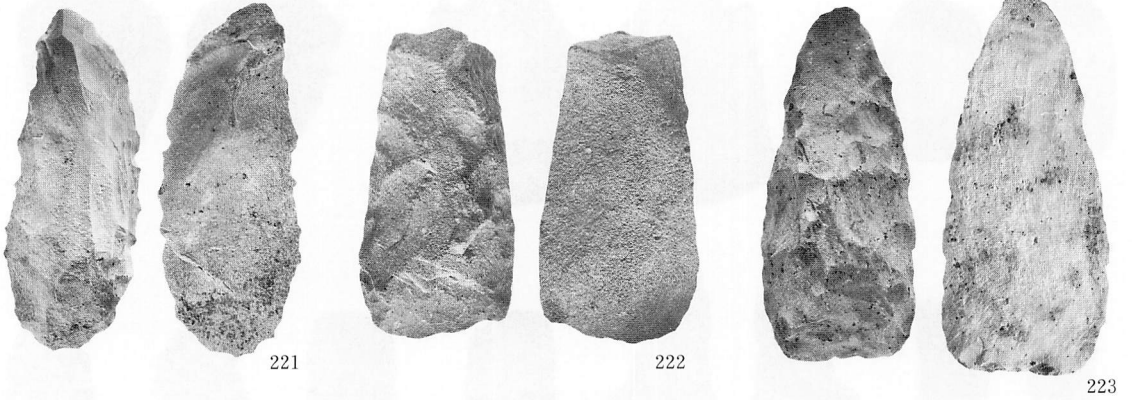


219

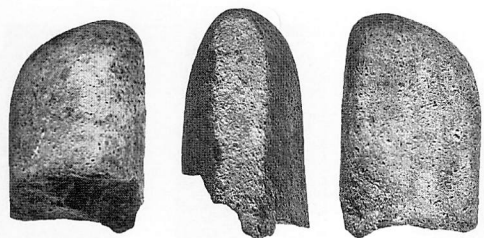


220

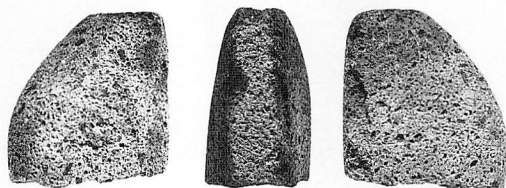
写真図版21 遺構外出土遺物（石器3）



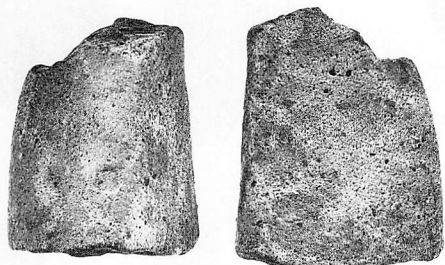
写真図版22 遺構外出土遺物（石器4）



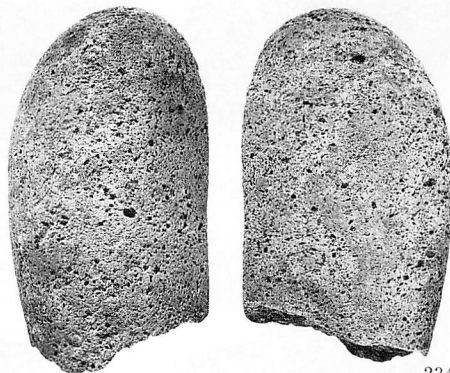
231



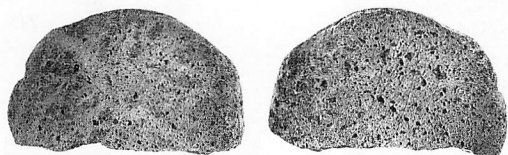
232



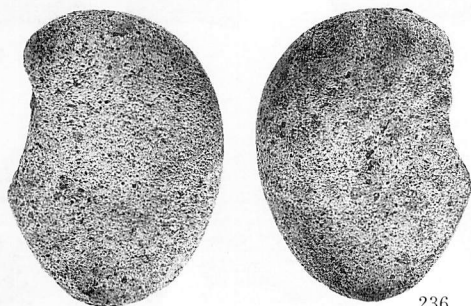
233



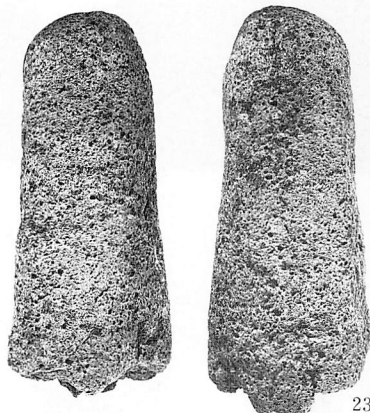
234



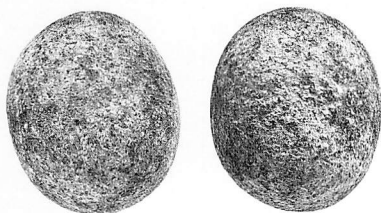
235



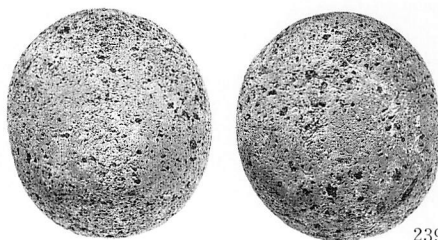
236



237

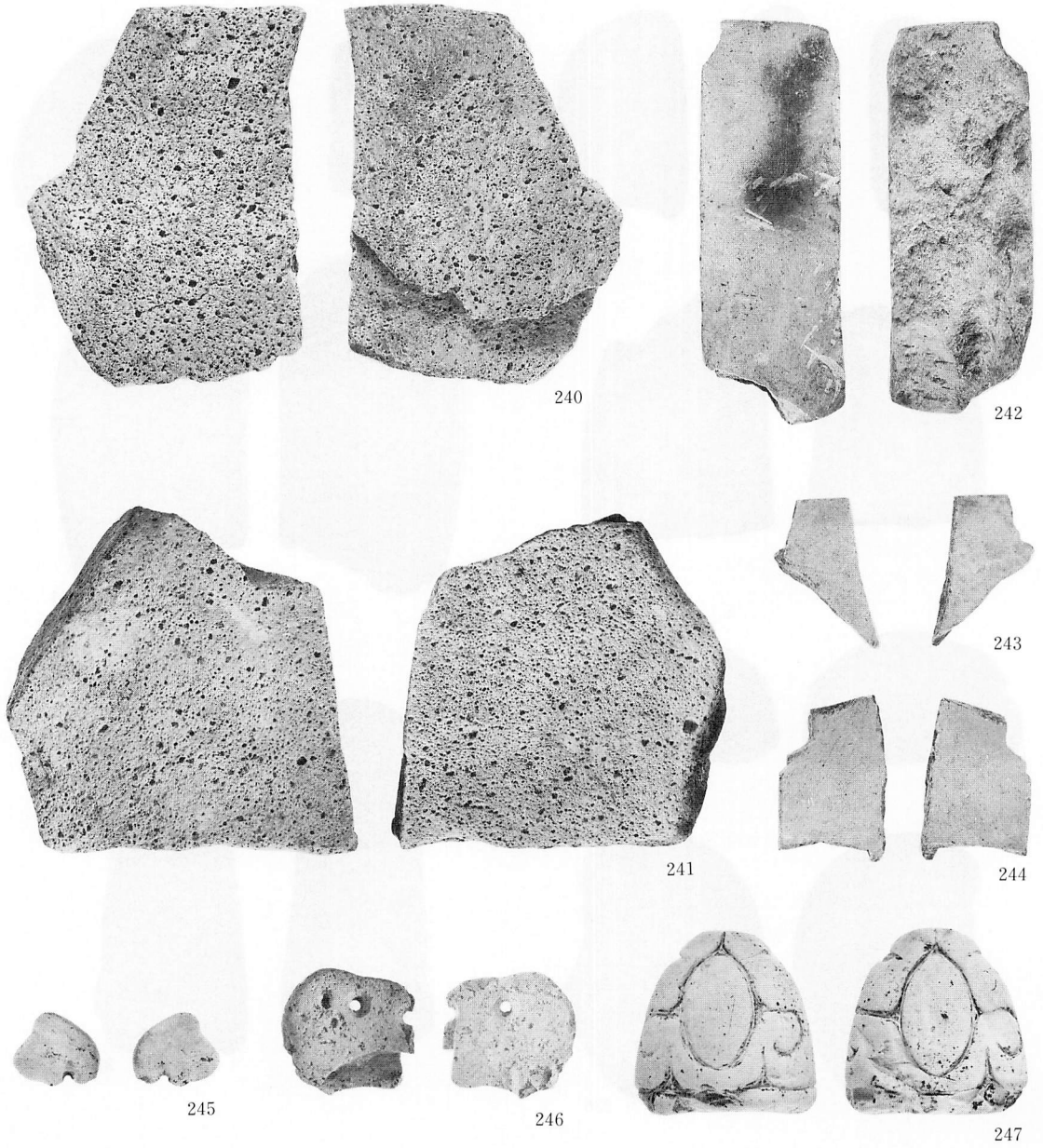


238



239

写真図版23 遺構外出土遺物（石器5）



写真図版24 遺構外出土遺物 (石器6・石製品)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼 小笠原 喜 一
副所長 高 橋 敬 明

[管理課]

管理課長(兼) 高 橋 敬 明
課長補佐 森 岡 陽 一
主 事 佐 藤 理

嘱 託 根 橋 文 一
" 吉 田 十 次
運 転 技 士 佐 藤 春 男
兼 事 務 員

[調査課]

調 査 課 長 村 上 康 昭
課 長 補 佐 鈴 木 恵 治
" 三 浦 謙 一
主任文化財 高橋 與右衛門
専門調査員
" 工 藤 利 幸
" 中 川 重 紀
" 藤 村 敏 男
" 高 橋 義 介
" 高 橋 正 之
" 渡 辺 洋 一
" 佐々木 清 文
文 化 財 齋 藤 實
専門調査員
" 佐 瀬 隆
" 千 葉 孝 雄
" 齋 藤 博 司
" 東 海 林 隆 幹
" 佐々木 弘
" 川 村 均
" 鈴 木 貞 行
" 伊 東 格
" 齋 藤 邦 雄
" 神 敏 明
" 佐々木 信 一
" 小 原 眞 一
" 酒 井 宗 孝

文 化 財 松 本 建 速
専門調査員
" 笹 平 克 子
" 花 坂 政 博
" 佐々木 務
" 金 子 昭 彦
" 濱 田 宏
" 羽 柴 直 人
" 星 雅 之
" 高 木 晃
" 鎌 田 勉
期 限 付 鎌 田 精 造
專 門 職 員 " 阿 部 勝 則
" 千 葉 悟
" 熊 谷 博 由
" 新 倉 信 一 郎
" 山 口 博 英
" 小 山 内 透
" 柳 田 磨
" 田 中 元 明
" 菅 原 敬 悦
" 工 藤 剛 司
" 高 橋 英 樹
" 溜 浩 二 郎
" 佐 藤 修 一

[資料課]

資 料 課 長 村 松 義 夫
文 化 財 高 橋 一 浩
専門調査員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第184集

泉屋遺跡発掘調査報告書

一 関遊水地事業関連発掘調査

印刷 平成5年3月25日

発行 平成5年3月30日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 川口印刷工業(株)

〒020 岩手県盛岡市本町通2丁目13番8号

TEL (0196) 23-3351

© 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1993